
この世界はフィクションです

銀猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世界はフィクションです

【Nコード】

N3798H

【作者名】

銀猫

【あらすじ】

あるとき、銀時が目覚めると、世界は一変していた。戦場を疾るしろい鬼は、唐突に泰平の世を生きることとあいなるが。捏造注意。
お題配布：不在証明

*** 0 0 1 *** 途方に暮れて立ち尽くした、まだ地面も足もある（前書き）

これは週間少年ジャンプで連載中の漫画『銀魂』を下敷きとした二次創作です。

基本的にCPはありません。作者は仲良し家族な万事屋愛です。真選組及び攘夷組とも腐れ縁的な喧嘩友達だったらいいと思ってます。仲良しです。キーワードに坂田銀時とありますが銀さん出て来ない恐れがあります。以上を踏まえた上でおっけいカモン！と云って下さる奇特な方はどうぞ本編をお楽しみください。

* 0 0 1 * 途方に暮れて立ち尽くした、まだ地面も足もある

一瞬にして眠りから覚めた銀時は、まだ夢の中であるかのような錯覚を覚えた。どこか郷愁を誘う陽なたと埃の匂いが、血と腐肉と硝煙の所為で馬鹿になった鼻をかすめる。ここはどこだ。手をついて身体を起こす。やわからに手のひらを押し返す弾力に気がついて目を落し、そこで自分が長椅子の上に横になっていたことを知る。

銀時には長椅子はもとより、屋根の下でさえ寝た覚えはない。血泥に塗れたみずからを見下ろす。格好は眠りについたそのまま、血脂でいい加減切れ味の鈍った刀も手放してはいない。ゆるりと視線をめぐらし、見知らぬ部屋の中を見回した。まったく覚えのない室内は綺麗に片づけられていて、長椅子に挟まれた低い机の上に、ぽつんと赤い駄菓子箱の空箱がひとつ、置き去りにされていた。

——これは夢だ、と銀時は断ずる。

恩師も友人もいた、あのたいらかな時代。あの時間に通ずるような、穏やかなひかり。午も疾うに過ぎているのだろっ、喧騒と共に窓から入り込む陽光はやさしいきんいろを帯びていた。ぼうとそのひかりに目を奪われながら、銀時は埒もないことを思う。夢想する。もし、もしも、このいくさが終わったら、このようにあたたかな（このようにやわらかなひかりの下で、午睡のできるような、）ささやかなしあわせを噛み締めるような日が、やってくるのだろうか。

現状では夢物語としか云えぬような馬鹿げた空想をしてしまった自分を自嘲して、けれど口許には嘲るのではない、ただの笑みが微かに浮かぶ。目が覚めるまで、もう少しだけ、このやさしい世界の中まどろんでいられたらいい。再度ごろりと長椅子に寝そべり、銀時はゆっくりと目を閉じる。

しかしそのまどろみは瞬時にして破られた。

「ただいま帰りましたア。銀さーん？」

「ただいまヨー。銀ちゃん、いいかげん起きたアルかー？」

聞き覚えのない声。こどものたかい声だ。警戒する必要などない、しかし身体はここ数年ですっかり身に染みついた反射により飛び起きて太刀を引つ掴み、そのまま右足を引いていた。僅かに前屈みになった上体と軽く曲げられた膝。重心を低くしたその姿は、まさしく獲物に飛び掛からんとする獣の姿である。張り詰めた緊張は、ぺたぺたと足を鳴らしてやってくるその音に若干和らぐ。しかし視線は外さぬまま、銀時は向かって来る足音たちをしかと見据えた。

「あ、起きてたんですね。お早うございます、銀さん？　なんですかその格好？」

やってきたのは、やはりこどもたちだった。

まず安っぽいビニール袋を両手に提げ、眼鏡をかけた大人しそうな少年が半開きの引き戸から顔を出した。次いで花のようにあざやかな髪と紺碧の瞳を持つ少女が、そして犬と云ってしまっているのかしばし悩んでしまうほど有り得ない大きさの白い獣が入ってくる。何も云わない銀時に訝る様子を見せた少年は、次の瞬間ぎょっと目を剥いた。

「って銀さんしかも土足じゃないっすか！　あーあーソファどころどろ！　その格好で寝ッ転がってたんですか？！　ちょ、早くそれ脱いでください！　その着物洗濯！　あー、下足は脱いでくださいってば！！」

僕らが買い物行ってる間に何やってたんですか、今お風呂沸かしてきますからあんまり動いて部屋汚さないでくださいよ！　怒ったように早口でまくし立てて賑やかに奥へと消えた、まるで母親のような口をきく少年に呆氣にとられ構えることも忘れたまま何も云えないでいると、少女が傍らに立ち駄菓子をくわえながら小首を傾げた。

「どしたネ、銀ちゃん。寝すぎてモジャモジャな頭もつとバカになったか？」

だからオメーはいつまでたっても天パーなんだヨ、と外見に似合わず辛辣な科白を吐く少女に絶句する。うるせエな天パーは関係ねエ

だろ、ようよう絞り出せた声は小さく、苦かった。高杉といい桂といいこの少女といい、何故こつも皆ピンポイントで人のコンプレックスを突いてくるのだろうか。

と、のし、と突然両肩と頭と背中にあたたかな重みがかかった。焦って首を捻ると、手触りのよさそうな白い毛皮が目に入る。ア、と可愛らしい声で鳴く、断じて可愛らしいとは云えない体躯の仔犬が後ろから銀時の肩に前肢を、頭に顎を乗せてきたらしい。重みで自然首が曲がる。

そのぬくもりとは裏腹に、銀時の中でひいやりと冷たいものがじわりじわりと広がっていく。どういうことだ、銀時は自分を見上げる少女と戻ってきた少年の顔を呆然として見詰めた。銀さん、銀ちゃん、自分の知らぬ愛称で自分を呼ぶ、少年と少女。ついでに犬。彼らには殺気はない。害意もない。敵意もない。血の匂いさえしないのだ。あるのは親愛のような、友愛のような、つい家族や友人を悪く云ってしまう心情にも似た、気安い空気。子どもが当たり前に笑う、過ぎ去ってしまった日々のままに。だからこそ戸惑う。こんな風に銀時に接するものは、ほとんど皆鬼籍に入ってしまった。眼鏡の少年と、あざやかな少女。知らない顔だ。男のほうはともかく、日ノ本の民には有り得ぬ花のような髪色を持つ異国の少女など、会ったことがあるならばそうそう忘れることなどなさそうなのに。

「……ッ!」

なんともいえない怖気が背筋を走り、銀時は纏わりついてくる犬もこどもも振り切って駆け出した。銀ちゃんドコいくアルか？やらちよ、だからアンタそれ土足だってば！やらワンワン！やら後ろで色々云っていたが、構ってられる余裕はない。がらりと玄関の引き戸を開け放ち一足飛びで階段を駆け下りる。カンカンカン、体重が乗るたび鳴る薄っぺらな金属音がやけに大きく耳についた。

夢ではない。

これは、ここは夢ではない。何が夢なものか、さっきまでの自分を殴りつけたくなる。これが夢であるものか。そんなものであるはずがない。

ならばここはいったいどこか。

通りに立つた銀時は弾む息をそのままにぐるりと視線を一周させた。

見上げた先には江戸城が見える。ならばここは江戸か。けれど街には城よりも高層^{たか}い建物が建ち並び、銀時の知る面影などほとんどない。蒼い空は電線で区切られ、異郷の船が飛び交っている。そして、なによりも、江戸の街を、侍の国を、天人どもが我が物顔で歩いている。

「……どこだ、ここは」

思わず零れた声は、自分でもはつきりとわかるほどに震えていた。銀時は、このせかいを知らない。

途方に暮れて立ち尽くした、まだ地面も足もある

いつそ世界でも壊れていてくれたなら、まだ気が楽だったかもしれない。

*** 0 0 1 *** 途方に暮れて立ち尽くした、まだ地面も足もある（後書き）

第1話をお読み頂きありがとうございました。

別名「十年バズーカシリーズ」と作者や身内が呼んでいるこの話は、ぶっちゃけタイトルまんまな銀さん 白夜叉入れ替わりタイムスリップです。なんとなく作者が「あ、そしたら面白そう」と思いつき、その場のノリと勢いで書き上げた代物です。そんなグダグダ感満載な上見切り発車であるせいでラストすら定まっていな駄文ではあります。少しでもお気に召して頂けたなら幸いです。感想・質問、「アイツは出ないの？ 寧ろ出せ」等要望などありましたらお待ちしております。それではまた次の話でお目にかかりましょう。

*** 0 0 2 *** **どこからが過去でどこからが現在なのか。どこからが偶然でどこか**

ご指摘頂いた第1話を修正しました。前書き及び後書きをようやく載せることができたのでそちらのほうもご覧下さい。（↑アホ）頂いた感想に返信させて頂きました。感想・評価して下さい。方々、ありがとうございます。それでは第2話をお楽しみください。

* 0 0 2 * どこからが過去でどこからが現在なのか。どこからが偶然でどこか

「銀さん？」

新八は戸惑いながらも突然家を飛び出した銀時を追った。いつものコスプレともまた違う、見馴れぬ格好をした彼はなにやら様子がおかしかったようだった。頭の隅で小さく主張する漠然とした不安を気のせいだと打ち捨て、急ぎ下足を履いて玄関を潜る。家を出てすぐの欄干から見下ろした先にしろい色彩を見つけて少しばかり安堵するが、彼らしからぬ風情に眉が寄った。甲高い金属音を響かせて階段を降りる。背に向けた銀時の表情は見えない。銀さん、数歩の距離を開けてその背中に声をかけるが、銀時は聴こえた風もなく通りのド真ん中で、どこか茫然自失の体で立ち尽くしていた。

「ちよつと銀さん、いきなりどうしたんですか？」

新八は呆れ果てた、というような声を作って、時々ふとした瞬間に酷く遠いところにいるように感じることをある男に呼びかけた。大丈夫、このひとはまだ、僕たちの手の届くところにいる。どろどろの格好と、不可解な行動に小言を云えば、銀時もまた子供の屁理屈じみたたわごとを大真面目に抜かすだろう。そしてそれに新八が大声で突っ込みを入れれば、それで、ほら、いつもどおり。得体の知れない嫌な感覚など（僕たちは怖いのだ、だってこのひとはきつといつだつて置いていく側の人間だから）消え失せてしまうだろう。期待に近い予測された未来。何故ならそれが彼らの愛すべき日常なのだから。

「銀さん！ もう、どうしたんですよ。ていうか、それ真剣ですよ。ね？ どつからそんなもん持ち出してきた…」

なおも小言を続けようとした新八は、みなまで云えずにひゅっと息を呑んだ。

目前数センチに音もなく突きつけられた、鉄臭い、赤茶けた何か

のこびりつく、それでもなお生命を切り裂かんと太陽光を反射しきらめく、刃。

「……ここはどこだ」

ひたりと睨み据えられて、知らず一步後ずさった。言葉が喉に絡んで何も出てこない。ただ呆然と自分に刀を突きつける銀時を見詰める。無理に感情の抑えつけられた声だった。あかい瞳に焰が揺らいている。心臓を鷲掴まれたような感覚。常に飄々としてポーカーフェイスを気取る、この男らしからぬ振る舞いであった。彼はこともたちに見せたくないものは（たとえば彼が鬼であることなんて）、きつちりと隠してのけていたから。なにより、殺気にも似た空気を他ならぬ銀時から向けられているということが、新八を射竦めていた。

ごくり、とおのれの喉が鳴る音がイヤに大きく聴こえる。視線は彼に絡めとられたまま、思考はただ空回りするばかり。銀時はそんな新八に構わず（慣れているのだろうか、畏怖の対象となることも、恐怖に怯えられることも？）同じ問いを繰り返す。

「俺アいくさ場にいたはずだ。……どこだ、ここは」

「……………は、」

「……新ハイ、下がれ」

じゃきん、という音と共に、後ろから神楽の声が聴こえた。血縁など欠片もないくせに、妙に家主に似ていつもマイペースな彼女の声が、硬い。

傘を刃物であるかのように銀時に突き出す彼女が信じられずに、神楽ちゃん、そう名を呼んで、呼ぼうとして、新八はそこで自分の歯がかちかちと小さな音を立てていたことに気が付いた。恐怖を自覚した瞬間、身体中からどつと冷や汗が噴き出す。彼に恐怖を感じることなど今までいっぺんもなかったのに。

「オマエ、本当に銀ちゃんアルか？」

少女の声が銀時に打ちつけられた。彼は視線を新八から神楽に移す。その眼は濁ってはいなかった。死んではいなかった。だがその

代わり、温度というものが存在しなかった。冷たくすらない瞳。

「……オマエ、血の匂いがするアル。…腐った泥と、腐った肉と、火薬の匂いアル。銀ちゃんはその匂いしないネ。糖分と、時々お酒の匂いアル。…誰だ」

はっと目の前の男を見た。どろどろの姿。それは、文字通りの血泥であつたというのか。彼はこどもたちの知らない眼で少女を睨み据えている。新八が何も云えなくなった程のそれを受け止めて、神楽はたじろぎもしない。十、二十、たつぷり三十秒も無言のまま対峙して、彼はようよう姓名を名乗る。

「……名は、坂田銀時だ」

さかたぎんとき。新八と神楽が慕う男の名である。家族とすら思う男の名である。しかし、どこか違和感を覚えるのは、服装の所為だけでも、雰囲気の所為だけでもあるまい。どこだろう、つい一時ばかり前に目にした姿と今との差異を探し、ようやく違和感の元に思い至った新八は、驚愕に目を見張った。男にしてはしろいおもて。感情の削ぎ落とされた顔に色のない瞳ばかりが刃のように鋭い、それは銀時が戦いの中ふと垣間見せる、その表情によく似ていた。

「……もしかして」

ひとつの可能性に行き着いて、新八は瞠目する。有り得ない、有り得てはいけない、けれど残された正解はそれしかない。

白を茶斑に染め上げた男を見やる。見馴れた、見飽きた、どこまでもイクオールに近くはあるが新八らの知る彼とは決して合図ではない、その男。白髪だの天パだの普段いいように悪態を吐かれる髪はしろがねの王冠めいて光を乱雑に弾いて輝き、死んだ魚のような濁った瞳は野生の獣じみてぎらぎらと血色にひかっていた。身に纏うは常と変わらぬしろい色。なびく鉢がね、洗いざらしの羽織、手には太刀。その全てが血泥によって赤黒く染まっている。いつか少しばかり聞き及んだ銀時の過去。攘夷戦争。…そう、彼は地獄にいたのだと、新八はふと思った。真実ではないにせよ。だが地獄に在ることが出来るのは鬼か亡者だけである。そしてこの男は亡者では

ない。つまりはそういうこと。

その男をなんと呼ぶのか、きつと新八は知っていた。

「——白、夜叉？」

はつと神楽が息を呑んだ。神楽もまたその名を知っている。そして、彼の表情は変わらない。ただついと眼を細めただけである。ついぼろりとこぼしてから、しまったと新八は臍を噛んだ。銀時がそう呼ばれるのを快く思っていないのは知っていた。彼は過去をこどもたちに見せたがらない。新八も神楽も聞かない。それはタブーであり、不可侵の領域であり、銀時が決して立ち入らせようとしてない境界線の向こう側である（こちらへはくるな、おまえたちは、こちらがわにはこないでいいから。そうして彼はわらうのだ）。いつの間にか暗黙の了解のようになっていた。

けれど今日の前に在る彼をそれ以外どう呼べばいいかわからなかった。彼はきつと「そう」であるとかわかってしまった。

「俺を知ってんのか」

静かな、しかしそればかりではない、強いものを孕んだ声。新八は再度生唾を飲み込んだが、あれ、ふとあることに気がついて場違いにもきよとした。

「……ていうか、銀さん、なんか、小さい？」

へ、と同じく間抜けな声を上げて神楽がぱちりとまたたたいた。マジでか、と大きな瞳が無遠慮に銀時を観察する。

「あ、ほんとアル！　しかもなんか髪の毛いつにも増してモジャモジャネ。当社比1.5倍アル」

「本当だ、なんか伸びてる……。……やっぱ、これってただ格好がどうのってだけじゃなくって、若返ってるんだよ、ねえ……？」

「ジジイになったり若返ったり、忙しいヤツアルな。銀ちゃん今、多分姐御とかどこぞのサド野郎と同じ年くらいネ」

「だよねえ。僕とも身長そう変わんないくらいだし」

「銀ちゃんの子どもの頃って想像できないアル。これが実物アルか」
「ていうか、あのひといい年こいて変なところもだからね。今とそんなに変わんないんじゃない？」

「そうアルな。いちご牛乳とコーヒ―牛乳しか飲めないあたりが特別にお子ちゃまネ」

「幽霊とか本気で怖がってるしね。歯医者も嫌いじゃなかったっけ銀さん。たぶん注射とかも駄目だよねあの分じゃ」

「いまだにジャンプ購読してるしな。とりあえず、銀ちゃんはマダオつてことアル」

「そうだね」

「……オイ」

いつの間にやら張り詰めた空気は霧散してしまっていた。彼のひとなどそつちのけで云い放題のこどもたちに毒気を抜かれたのか、突きつけられた刀は下げられている。

「……なんか好き勝手云われてるみてーだけど置いていて。……お前ら、何云ってやがる？」

呆れた風の彼に最早殺気はない。瞳は温度のないままだったが、その手に持つものを使う気は失せたようだった。

「いや、僕らもよくわかんないんですけど。ていうか僕らがなんなんだって訊きたいんですけど」

「いや、絶対エ俺のほうがなんなんだって訊きてエから。……あー、……なんだ、……マジで訳解ンねーんですけどオ」

なんなんだよこれ、つーかマジでここどこだ。くしゃりと前髪を掴んで彼はうめいた。気持ちにはわからないでもない。新八とて神楽とて、買い物から帰ってきたらなんか雇用主が若返ってました、なんて流石に想像してもみなかった。当然である。

「……えーと、銀さん？」

とうとう頭を抱えだした彼に、新八は遠慮がちに声をかけた。彼はちらりと視線をやり、器用に片眉を上げる。銀髪の下に覗く赤い

瞳について先ほどのひかりはなかった。皆に口を揃えて「死んだ魚のよう」と称される、万事屋の店主の、坂田銀時の目である。こどもたちはこっそりと安堵した。生気の欠片もない瞳がこの上なく安心させてくれるなんて、可笑しな話ではあったけれど。

それ、ちよいと織手（と云うには少しばかり胼胝やら肉刺やらが多すぎたけれど）が動いて、新八を指す。

「…その、銀さん、つてなア、俺のことかい？」

「え？ あ、ハイ、そうですよ。僕が前に「坂田さん」って呼んでたら、「銀さん」でいいって、銀さんが」

「そうヨ！ 私も「銀ちゃん」って呼んだら、それでいいって云ってたアル！」

「…俺が？」

「はい。銀さんが」

「ウン。銀ちゃんがヨ」

「……俺が、ねエ……」

不審げに口の端をひん曲げる男を、新八も神楽もただ見詰めていた。

——その男をなんと呼ぶのか、新八は知っていた。

いつか聞いた。たった一度だけ。そう、初めて桂と出会ったときのことである。白夜叉。桂は銀時をそう呼んだ。その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿は、まさしく夜叉。彼はそんな文句を諳んじた。

やしゃ。薬叉。夜叉。ひとくい鬼である半面、神としての一面も併せ持つ、それは護法の鬼神。——白夜叉、だって？ 新八はぎりりと拳を握る。常ならば頭ひとつ分も違う彼とは大分見上げなければ目を合わせることもできないのに、今では僅かに視線を上げるだけで容易くこと足りる。新八とさして歳の変わらぬ、少年とさえ呼称しても間違いではない、年若い男。殺しすぎて英雄とさえ

呼ばれた彼。完成された大人のそれではない、少年のおさない身体が十全のようにいくさ装束を着こなし、それを血泥に汚しているその姿が、やけに胸にせまった。

そう、新八とさして歳の変わらぬ少年なのである。死んだ魚のような目は変わらない。きつと性格だってちゃらんぽらんでだらしがなくって、甘味に目がない銀時のままであるだろう。だが彼は新八には想像もつかないような世界を生きているのである。新八の知らない彼。… だけど、

「… 銀さん」

確かめるように、新八はその名を唇に乗せた。貴方は、そうなんですよね。僕と、神楽ちゃんと、定春と、一緒に万事屋やってる、貴方はあなたなんですよね。

しろい少年は、そっぽを向いて頭をがしがしと掻き混ぜながら、面倒臭そうに、何、と小さく返した。

どこからが過去でどこからが現在なのか。どこからが偶然でどこからが運命なのか。

貴方のそのしろさは過去。僕らが一緒にいるのが現在。僕たちが出逢ったのは愛すべき偶然。貴方があなたであったことがクソつたれた運命。

*** 0 0 2 *** **どこからが過去でどこからが現在なのか。どこからが偶然でどこか**

白夜叉inかぶき町第2話をお読み頂きありがとうございました。
基本的にこの話は、一話一話が誰かしらの視点でもって進んでいきます。誰になるかは作者の趣味とか書きやすさ等、独断と偏見で決まるので、確率は一定ではありません。ローテーションですらありません。万事屋率は高いと断言できます。愛です。「アイツ出して」的な要望がありましたらご連絡ください。できる範囲でお応えしたいと思います。それではまた次の話でお目にかかりましょう。

*** 0 0 3 *** **陽だまりの血溜まり（前書き）**

10年バズーカ第3話です。感想・リクエスト等下さった皆様、ありがとうございます。今回やっとやつらが登場です。それではどうぞ。

* 0 0 3 * 陽だまりの血溜まり

ち、と土方は苦い顔で舌打ちした。雑踏の中で見たくない顔を見つけてしまった。歓楽街とはいえ日中でも人の絶えることのない通りの、そこだけ人が割れるようにして空間をつくってあればいやでも目立つ。ペアを組んで巡回していた沖田も土方に遅れてそれに気づき、あらら、と楽しそうに呟いた。

「おやおや、相変わらず賑やかな連中ですねイ」

「賑やか過ぎだつてンだろ…」

距離は大分開いているにも関わらずその喧騒が耳に飛び込んでくる。漫才じみた彼らのやりとりはいつものことだ。

「…あーあーあー、ハイハイハイ。わかりました。なんとなくですけど、理解しましたよ。…なんでこの人はこう面倒ごとばかり持つてくるかなア…」

「たまには面倒じゃなくて仕事持つてこいヨ。ったく、本当にマダオアルな。だからオメーはいつまでたつても天パなんだヨ、カイシヨナシ」

「…………俺は理解できてねんだけど。何？　なんか知んないけど、俺が悪いの？」

「「銀さん（ちゃん）が悪いです（アル）」」

「何それ酷くね?!」

「おい、その。漫才すんならどつか他所でやれや。公道のド真ん中で騒いでんじゃねえよ、一般市民の迷惑だろうが」

天下の往来で騒いでいる三人組に向けて、土方は嫌々ながら声をかけた。コイツら自分たちが通行の邪魔になってるとかマジで自覚してないのか。

あッ、チンピラ警察。それにいの一番に反応したのは色あざやかな異国の娘だった。こちらでも年頃の娘にはどうかと筋違いな心配をしてしまうほど、土方に負けず劣らず嫌そうな顔をしている。

「何アルかお前ら、何でこんなところにいるアル。ひょっとしてお前からストーリーカルか？」

「馬鹿云ってンじゃねエやチャイナ。ウチでストーリーカーなんてやってンのは近藤さんくらいのモンでイ」

「オイ総悟、お前フォローする気ねエだろ」

泣く子も黙る真選組の局長が懸想する女性ヘストーリーカー行為を働いているのは周知の事実だが、仮にも隊長自身が街中で堂々と公言しないで欲しい。形だけでもと窺ってみるが、当然のように沖田は聞く耳持たず好敵手である少女へ喧嘩をふっかける。

「それよりチャイナ、お前自意識過剰って日本語は知ってつかイ？
テ　メエのことだぜ」

「馬鹿にすんじゃねーヨ、そんなくらい知ってるに決まってるネ。テメーには傍若無人って言葉を贈ってやるネ。ぴったリアル」

「ハ、不自由な日本語喋ってる割りにやあよく知ってンじゃねーか。いい加減キヤラ作りにも無理が来てンじゃねーのかイ？」

剣呑な会話の末の肉体言語による生討論はこのふたりの恒例行事である。しかし今日に限っては、「やられたら倍返し」との銀時のいいつけを忠実に守っている神楽には珍しく、沖田が売った喧嘩を買うような真似はせずにフンと鼻を鳴らすにとどめた。

「こっちはお前ら汚職警官と違って忙しいんだヨ。構ってやるヒマはないネ。行こう銀ちゃん」

べいー、と思いきり小憎らしげに舌を突き出して、神楽は銀時の手を引っ張り踵を返した。オイ？　と戸惑ったような彼の声は軽く流される。

「はン、なんでイ、今日は随分とつれねーじゃねーか。…怖気づいたかイ？」

その背中に向けて沖田が安い挑発をくれてやれば、異国風の沓を

履いた足がぴたりと止まる。

「…あんだとコラ」

横目で睨みつける碧い瞳は、少女のものと思えぬほどに強い。沖田はその視線を受けてにやりと笑う。

「ほー、違うつてエのか？　こそこそ逃げ出そうとしてるようにか見えねエけどなア」

「サド野郎から逃げ出す必要なんてどこにもないアル。眼科行つてこいヨ」

「口ではなんとでも云えらアな」

「…上等じゃコラアアアア！」

怒声と共に重く鈍い音が響き、傘と刀が交差した。ぎりぎりとしたそれらの武器は弾けたように間合いを取ると、再度力の限りぶつかりあう。縦横無尽に軌跡を描く剣筋は最早常人の目に見えるレベルを超えている。ともに真選組一番隊隊長の肩書きを持つ少年であり、戦闘種族・夜兎の血を引く娘である。「こどものけんか」といえば微笑ましいが、周囲に及ぼされる被害を思うと決してそんな可愛らしいものではない。

「…仕事中だつつの…」

白熱したバトルを繰り広げる少年少女に、道の端に避難した土方はこめかみを指でぐりぐりと揉み解しながら嘆息する。声などかけずに無視して行ってしまうばよかったのだろうか。ちょっと、神楽ちゃん、沖田さんも！　制止をかける新八の声はむろん届かない。それどころか少女から邪魔といわんばかりの飛び蹴りを喰らってふっとんだ。それを見やる土方の視線は同情を含んでいたろう。互いに苦労してんだな。

嘆息しつつ隣に立つしろい男を横目で見ると、彼はどこか啞然としたようにこどもたちの遣り取りを眺めていた。

「何だア万事屋、落武者みてエな格好しやがって。今度の仕事はお化け屋敷のバイトか？」

苛立ち混じりにせいぜい皮肉げにそう云ってやれば、銀時は意外

にもただむつつりと眉を寄せただけだった。てつきりなんらかの皮肉が返ってくるものだと思っていた土方は拍子抜けする。そう云えばこの口の減らない男は今日はまだなんの悪態もついていない。珍しく一言も云ってこない銀時を訝ればなんだか妙な違和感が頭をもたげ、内心首を傾げつつ再度口を開く。不穏なばかりの会話が土方とこの男との唯一の交流手段である。

「つーかテメー、あのガキ止めるよ。どんな教育してやがんだ。そのうち周りにも被害出んぞあの暴れっぶりじゃ」

「…何で俺が？」

「あア？」

思わず隣に顔を向ける。銀時らしからぬ、突き放したようなものいいだった。眉間に皺を寄せて睨みつければ、どこかひややかな視線が返ってくる。まったくこの男らしくない。

「…おいテメ、」

流石に違和感どころでない不審を覚えて問いかけたそのとき、

「テメーマヨラー！！　銀ちゃんにちよっかいかけてんじゃねーぞオオオ！！」

少女の高い怒声と共に銃弾が雨と襲ってきた。

「うおおおオツ?!」

間一髪でそれを避ければ、ち、と舌打ちする娘。本気で悔しそうだったのは全力でスルーする。

「何しやがるテメエエエ！！　当たったらどうすんだ腐れガキ！！」

「寧ろ当たればよかったネ」

「そうですぜ土方さん、何やってんですかイ素直に喰らつとけよコノヤロー」

「総オー悟オオオオ！！」

血管がぶち切れそうな勢いで怒鳴りつける土方を鮮やかに無視し

て、ふと彼の隣に立つ銀時に目をやった沖田は、「…ん？」怪訝そうに首を傾げた。

「…旦那、アンタなんか縮んでねエですかイ？」

「……………は？」

呆れた声を漏らしたのは銀時ではなく土方だった。縮む？んな馬鹿な。しかし沖田にふざけた様子はない。オイ、少女が強い語調で制止をかけるように沖田を呼ぶが、とりあわずにじろじろと銀時を眺め回す。彼はそれに不快そうに眉を寄せたが、それだけだった。

「黙ってるイチャイナ。…ああ、やっぱりそうだ。ていうかその血糊、染料にしてはあんまりに…」

その言葉にはっとして土方は銀時を注視した。彼が身に纏うはいくさ装束。しろいしろいそれは、銀時をあまりに雑然とした街並みから浮かび上がらせていた。それを染め上げる赤茶けた液体。羽織からぼたりと滴が垂れる。その赤さ。今更気がついた自分を内心で罵倒する。時間的にはまだ早い酒や料理の仕込み、打ち捨てられたゴミやポリバケツの残飯、様々な匂いが入り混じった雑然とした街並みの中、日中の雑踏にはあまりにもそぐわない強い鉄のにおいは染料などでは有り得ない。

「…アンタ、その血、マジですかイ？」

すうと沖田のあどけなさを残す瞳が細められる。この男が何らかの騒動に首を突っ込み、あるいは巻き込まれるのはいつものことではあるが、これは。

「あ、あの、沖田さん。その…」

「おい、メガネ。何があった」

とりなすように沖田に弁明しようとする少年に土方が詰め寄ると彼はひっと小さく悲鳴を上げた。睨みつけたつもりも怖がらせるつもりもなかったのだが。ち、と舌を打つと少年はさらに震え上がる。…おのれはそんなに凶悪な顔をしているのだろうか。内心でこっそり傷つきつつもなお追求しようとしたとき、土方の背に薄氷が砕け散るような声が投げかけられた。

「……おいおい兄ちゃん、ガキ相手にそりや大人気ないんじゃないの」
振り向いた先には無彩色。ことごとく土方と馬が合わない男はいつもの飄々とした体であるのに、その視線も声もどこかつめたい。
「……じゃあテメエが説明しろや。その血イ、どうした。その分じゃその刀も真剣だな？」

「説明だア？ そんなもんしてやんなきゃいけねエ義理でもあんのかよ」

その喧嘩腰のいいように土方ははしと銀時を睨みつけた。しろい男は揺るがない。云われてみれば、確かに同じくらいの背格好であったはずであるのに少しばかり目線が下にある。白髪天パも赤い瞳も腹の立つものいいも何も変わらないのだが。

小さなことから端を発し、不本意ながらもいつの間にか妙な馴染みになってしまったしろい男。時に刃を合わせ、時に共通の相手を敵とし、大抵は喧嘩を売り買いしあう仲である。人となりのすべてを知っているわけでもないし知りたいとも思わないし死ねばいいとかなりの割合本気で思っているが、決して知らない間柄ではないのだ。それだというのに、まるで見知らぬ他人を——知らぬ生きものを相手にしているような、この感覚はいったい何だというのか。

（薄ッ気味悪イ）

常に飄々として捉えどころのない男である。少しばかり掴んでも見たかと思えばするりと抜けて形もない。まるでそのような彼自身の頭髪とあいまって、雲のような印象を与える男である。

（だが、なんだ？）

触れられぬものであるということとは常と変わらぬ。だがこの得体の知れぬ薄気味悪さはどうしたことか。今のこの男は雲ではない。両の足でこの地を踏みしめ立つたしかさと、闇夜に嗤うひとでなきモノがすうと陰に消えゆくふたしかさ。

（……そうだ、この眼は）

だしぬけに思い至り、土方は慄然とした。

眦に刃を宿した苛烈にして鮮麗なそれは、剣戟の中高らかに咆哮

をあげるあの瞳だ。普段の気だるさなど彼方に消え失せ、激情と冷徹が奇妙に同列に存在してひかる刃金の瞳。いつか刀を振るう男の鮮烈に、おのれは一体何を思った？ どれほどの傷を負っても決して戦うことをやめないこの男に、畏怖の念すら覚えなかったか。異常なまでの強さとけしてかたくなではない折れぬ信念でもってこの男は戦いに臨む。そうだ、そんな時、決まってこの男はこんな眼をしていた。冷たい、というにはあまりに色味のない、感情というものをどこかに置き忘れてきたかのような眼である。しかしどこまでも人間臭い激情を孕んだ、戦場を棲み処とするひとでなきモノの眼である。傷ついた野生の獣に似て、慈悲さえ許さぬ無情な神にも似て、磨いたやいばの切っ先にも似て、覗いたものを引きずり込む深淵にも似て、壊れ果てた狂人にも似た、血の色にかがやく瞳である。

—— あれは、夜叉の眼だ。

ぞくりと悪寒が背筋を走り、土方は知らず腰の得物に手を伸ばした。

それにすいと銀時が眼を細めれば、つうと背中冷たいものが伝う。動かば斬られる。何が死んだ魚の目だ、あの血色にひかる宝玉、古い異国の言葉で「赤」を意味する石の瞳、王冠めいたしろがねの髪、このうつくしい生きものは決して人の手によるものではない形のある死。まるでそんなものであるかのようなしろい男。

単独で行動している最中に複数人に斬りかかってこられたところで、その全員を笑って切り伏せてきた土方である。しかし今、たったひとりの男に感じるこれは、まさか恐怖だともいうのだろうか。視線をしろがねから、深紅から外せない。これがこの男の本性にして本質。ならばやはり彼はひとではない。これほどの鬼気を発するからには。

ぴりりと張り詰めるふたりに流石にふざけてもいられないと思っ
たか、こどもたちが銀時をおしとどめるようにいい募る。

「旦那ア、そのまんま土方さん斬っちまってもいいですぜイ。本当なら俺がやりてエところだが、他でもねエ旦那だったら仕方ねエ、譲ってあげまさら」

「銀ちゃん思いつきりやつちゃえばヨロシ。どうせ汚職警官ネ、気にすることないアル。後始末はこのサドに押し付けてやるから」

「え、このシリアスな場面でそういうこと云うのふたりとも？ 気にするのそっち？ 銀さん駄目ですよ、殺しは幾ら何でもマズいですって。せめて4分の3殺しくらいでお願いします」

「ブツた斬るぞクソガキ共オオオオ！！」

制止でもなかった。

あんまりといえはあんまりなコメントに土方の血管がブチ切れる。手をやっていた刀を抜いて沖田に向けて振りかぶり、

「…人の店の前で何ギャーギャー騒いでるンだアンタらアアア！！」

こちらら夜の蝶なんだよ真っ昼間ッから騒いでいるンじゃないよクソガキ共オ！！

丁度土方が沖田にやいばを振り下ろそうとしたとき、すぱんと勢いよく引き戸が開いて、鬼もかくやといった形相で老女が怒鳴りつけてきた。ついでに蹴り飛ばされた。薄情にも前にいた沖田がひらりと避けたものだからそのまま道路とお近づきになる。地面に手をついたまま土方が呆然と女を見上げれば、彼女は銀時に目を留め軽く目を見張り、騒いでいた一堂を見回すと諒解したように鼻を鳴らした。

「……ふん。随分とまア懐かしい顔があるじゃないのさ」

なんでもないようなそのものいいに、沖田が驚いたように問う。

「バーさん、アンタなんか知ってるんですかい？」

老女はいイヤと首を振る。

「何年か前に見たようなツラがあるってだけサネ。…お入り。今度

はいつたい何があつたツてンдай」

老女やこどもたちに促されて店の中へ入っていった銀時の、それまで立っていた場所には赤い滴が水溜りを作つて鈍くひかっていた。そういえばやけに薄汚れていたな、と思いつき、それでもしろいイメージしかない男であると、いまだ麻痺した思考のまま、ぼんやりとそんなことを考えた。

陽だまりの血溜まり

その白さと赤みの対比が、雑然とした街並みの中、やけに非現実めいて見えた。

* 0 0 3 * 陽だまりの血溜まり（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。今回登場キャラは真選組のおふたりでした。なんか土方の扱いがアレですが作者は土方大好きです。特に神楽に好き勝手云われてDSコンビにいじられてしまいいはトッシーで完全にキャラ崩壊を喫した彼が面白くてたまりません。・・・アレ？

もうひとつのリクエスト、ツラとエリーはこの話の時間で数日後に出てくる予定です。気長にお待ちください。

さて、私信ではありますがひとつ。もうひとつの小説「パラレルワールドに生きる君へ」を現在3話まで公開中ですが、せっかく舞台が現在なのでから他の作品ともクロスさせてみたいと思っております。現在2作品ほど執筆中です。「この作品のあのキャラとコイツを絡ませて」等要望・アイディアありましたら教えてください。ただし作者の趣味は微妙に斜め45度をアクロバットしています。作者の既知でしか書けない恐れがありますので、そのあたりはご了承ください。

それでは上記とあわせて感想・評価・リクエストお待ちしております。次の話で御目にかかりましょう。

*** 0 0 4 *** ほら、そこにも君がいる（前書き）

お待たせしました第4話をお届けします。ようやっと現状把握。グダグダ感満載ですがそれが銀魂だよネ！（ウザ）
それではどうぞお楽しみください。

* 0 0 4 * ほら、そこにも君がいる

とりあえず銀時アンタその汚ったない格好どうにかしてきな、それならお風呂そろそろ沸いてますから入ってきてください銀さん、世話焼きに口々にそう云われ、銀時は渋々といった体ではあったが新八に連れられて二階に上がっていった。それをなんとはなしに見送って、沖田はジューズをすすりながらも心配そうに銀時の背を見詰める神楽に訊ねる。

「…で、結局旦那はどうしたってんでイ」

知るかヨ、むくれたようにそっぽを向く娘にそうかい、とだけ返す。彼らにも事情はよくわかっていないのだろう。それに話を聞くならば拭くものだの着替えだのを世話しに行った少年を待つて、彼に聞いたほうがおそらくわかりやすい。土方も考えていることは沖田と同じであるのか、苛々と煙草を次々に消費していくばかりで無言である。沖田もそれ以上は何も云わず、老女が淹れた茶をひとくち含んだ。しばらく居心地の悪い沈黙が場に満ちる。

がらり、引き戸が滑る音がして新八が戻ってきた。登勢は新八の前にも茶を出し、彼は有難う御座いますと少しばかりぬるめのそれを一息に呷って、ふうと嘆息した。で、なにがあった。少年が落ちて着くのを待つて土方が先ほどと同じことを訊ねる。はたしてさアと首を傾げる新八の答えも曖昧なものであった。

「僕らにもわかんないんですよ。買い物に行く前は普通にいつもの銀さんで、ソファで昼寝してたんですけど、帰ってきたらなんか様子も変だし、よく見たら若返ってるみたいだし」

「あー、やっぱありやアそうなのか」

どおりで視線が近エと思った。暢気な感想を口にした沖田にじとりと土方の視線が寄せられる。それをすっぱり無視してあの旦那やっぱりいつもよりなんか若エよなあ小せエしと新八におのれの感想

を述べると彼も同意と頷いた。

「若返った、っていうのは確実みたいです。自分がどこにいるのかもわからないで混乱してるみたいでした。僕らのこともわからないみたいだったんですよ」

「……そりゃあまた」

それ以外に云うべきことばが見当たらないといった調子で土方がぼやいた。沖田も情情的には似たようなものである。

「でもねエ、原因もなしにありやないだろ。もう少しよく思い出しなよ。本当に何にもなかったのかイ」

登勢が煙草に火をつけて問うた。それもまた道理だ。新八と神樂は顔を見合わせ小首を傾げあったが、しかしすぐに両手を挙げた。ホールドアップ。

「……しゃーないですね、こりゃ御本人に訊いてみるしかないようにで……まったく期待もせずに沖田は云った。天人様様のこのご時世といえど、こんな非常識は流石にない。本人とて現状を理解できているかどうか。新八の話を聞く限りでは、とてもそうは思えない。」

おりよく会話が一段楽したタイミングを見計らったように、一風呂浴びてござっぱりした銀時が現れた。不精であるのは変わらないのか、濡れた髪からはまだ雫が滴っていてさつそく少年にちゃんと髪拭かないと風邪ひきますよと小言を呈される。

「風呂、どーもな」

「いいえ。ていうか、銀さんちのお風呂ですし」

新八のいらえに銀時はがしがしと素直に髪を拭きながら訝るように、少しだけ困ったように眉を寄せた。やはり彼にも事情は理解できていないのだ。これでは原因も何もないなと沖田は嘆息する。はてさて、まずはなにをどうするべきか。

水に濡れて透ける銀系の髪を持つ男を見やる。否、男というよりは少年、だろうか。目線も沖田とほぼ変わらず、顔立ちは見知ったそれよりわずかに幼い。おまけに彼はいつもの白い着流しを素肌に纏っていたが、その裾が地面についている。そのさまに新八が苦笑

した。

「ああ、やっぱりそれじゃちょっと大きいですね。後で僕の着物、大きなやつ持ってきますから、今はそれで我慢しててくださいい銀さん」

「うん。…悪いな」

いいですよ、そのくらい。簡単にそう云つてのける新八の気安さに銀時は戸惑っているようだった。それも仕方がないだろう、彼にとっては沖田も含めたここにいる全員が見知らぬ他人であるのだから。

銀時、アンタそれどうしたイ。唐突な登勢の声に沖田は銀時を注視した。彼の纏う着流しの白い生地に着染み、その染みがゆっくりと大きくなっていく。銀ちゃん血が、そう云った神楽の声はわずかばかり震えていた。あ、と銀時も気付いたようで、みずからを見下ろして白い着流しをためつすがめつし、すまなそうな顔をした。

「あー…、悪い。着物汚しちゃった」

「いや、それは別に…。どうせ銀さんのですし。っていつかそれよりも、銀さん怪我してたんですか?！」

や、たいした傷でもねーしもう血止まったと思つてただけ。なんでもないような銀時の言葉をすっぱり無視して新八が登勢を向く。お登勢さん、すいませんけど。彼女はみなまで待たずに煙草を灰皿に押し付けた。

キャサリン、救急箱持ってきておくれ。たまは包帯の新しいやつを出しておくれな。登勢は従業員にそう指示を出し、カウンターから出て奥のボックス席へゆくとまだ突っ立ったままの銀時を手招いた。

「ほら、こっちおいでな銀時。大きいだけにでも包帯巻いてやるから」

「いや、別に大したモンでもねーから」

彼はもごもごと遠慮らしきことを口にしていたが、登勢にがたが

たぬかしてないではやくしなとびしやりとやられ、ようよう低い長椅子に腰掛ける。上半身を肌蹴ておしぼりで血を拭われる銀時はものすごく居心地が悪そうだ。もしかしたら照れてさえいるのかもしれないと思いつき、沖田はこっそりと忍び笑った。あんたそんな可愛らしいタマじゃあないでしょうに。それとも今は、沖田とも歳の変わらぬこどもであつた頃の彼は、その年頃の少年らしい含羞のひとつやふたつ持ち合わせていたというのだろうか。それこそ似合わないように思えたけれど。

思ったよりもずつと薄い少年の身体は傷だらけだつた。胸に、肩に、肩甲骨に、脇腹に、腰に、腿に、二の腕に。登勢はひとつひとつを丁寧に消毒し軟膏をぬりこみ、大きい傷にはガーゼを当ててくると手際よく包帯を巻いていく。諦めたのか大人しく（むず痒そうに）登勢の手当てを受ける銀時の隣には少女が座り込み、怪我をしている本人よりも痛そうな顔をして老女がよく動く手元をじつと見詰める。

「……銀ちゃん、痛くないアルか？」

「あ？ あー、別に。こんくらいなら、いつものこつた。へーきだよ」

慰めの言葉もぎこちなく、どこか硬い。やはりいつもの旦那じゃあないようだ。と沖田は内心で断じた。彼はもつと上手に受け流す。ごく軽く笑い飛ばす。心配など無用の長物だと、時には道化にすらなつてみせて。こどもたちの顔が曇らぬように。――彼は心配されることに慣れていないのだ。

銀時様は一体どうなさつたのですか。知り合いが面白い状態に陥っているにも関わらず表情筋ひとつ動かさぬ女が平坦な声でそう訊ねた。否、女はおんなではない、絡繰である。それもつい先だつてクーデターを起こし廃棄処分された違法のからくりであるように見えるのは、うん、多分気のせいだ。面倒臭いし。

「指紋、虹彩、声紋等を確認したところ、銀時様のものと一致し本人であることが確認されました。しかし解析の結果、骨格、筋肉、

内臓、体毛等の全てが銀時様のそれらよりも年齢的に若いものに變化しております。銀時様はどんなされたのですか？」

抑揚すらない声で非常識なことを淡々と告げる女に新八は苦笑する。

「あー、やっぱりそうですか…」

理由は僕らにもわかんないんですけどねと云う新八に女は首を傾げた。もうひとりの従業員、獣の耳の異人が煙草をふかしながら特に興味もなさそうに悪者ガドラゴンボールニデモ才願イシタンジヤナイデス力などと片言でのたまった。作品が違いーよ。すばんと頭をはたいて登勢が突っ込む。

「でもたまさんが断言するからには、やっぱり銀さん本人なんですよね？なんかよくわかんないけど、若返っちゃった、って考えていいですよね」

確認するような新八の言葉に一同が無言で同意の意を示す。超科学技術の粋をもつてつくられた絡繰の言であるならば間違いはないだろう。しかし思わぬところからそれに異を唱える声が上がった。

「違うネ、そうじゃあないヨ」

違う、と断言したのは神楽である。

「ただ若返ってるって訳じゃないネ、新八」

「え、どういうこと神楽ちゃん？」

「だって、銀ちゃんの格好」

「…あ」

云われて沖田も矛盾に気付く。ただ若返っただけであるならば銀時はずっともの黒の上下に流水紋の着流しを身につけているはずだ。しかし彼はいくさ装束に太刀を佩き、下足まで履いていた。それが語る事実。

「…ってことはもしかして、昔の銀さんが、今に来ちゃったってこと…？」

「…マジでか」

沖田は思わず呆れかえって天井を仰いだ。若返りではなく、入替

わり。単に若返ったとかいう話よりもタチが悪い気がする。店の女たちはやれやれと溜め息し、土方はものすごく嫌そうな顔で煙草を灰皿に押し付けた。黙って好き勝手な推論があがるのを聞いていた銀時も土方に負けず劣らず嫌そうな顔をして嫌そうに口を開く。

「するつてーと、何かい？ 今の話聞いてつと、俺は未来に来ちまったとか、そーいう話なワケ？ マジで？」

「…なんですかね？」

「……………なんだそのSF設定…」

かつくりと少年は頂垂れた。あれー俺なんか悪いことかしたっけかでも饅頭黙って食っちまったくらいでこれはねえよ、いや確かに会合サボったけどさあまっさかそんなんで。ちよっぴり遠い目をしてひとりごちる銀時には、是非とも現実を見据えて強く生きてもらいたい。沖田は思わず合掌して、やめろム力つくからと銀時と神楽に怒られた。

そのいつそ和やかな様子を乾いた笑いでもって眺めていた新八が、ふと眉を寄せて呟いた。でもそうしたら。不安が眼鏡の奥の瞳に揺れる。

「…銀さん、どこ行っちゃったんだろう…」

囁きとさえいえるかすかなひとりごとは、小さな店内によくとおった。視線がいつせいに銀時に向けられ、彼はわずかに視線を落とす。

「…俺が、ここにくる前いたとこにいんなら。…多分、まあ、…そんな今すぐに死にかねえって状況じゃあねえはずだけど。大丈夫じゃね？」

軽い調子でさらりと物騒なことを云つてのけた。つまり彼にとつてそれは日常ということ。それがあたりまえの世界に生きているというのだ。常に生死の境に立っているというならば沖田とて同じである。しかし沖田と銀時は同じではない。その最たるものが、時代であった。

銀時の纏っていた赤茶けた白を思った。いくさ装束。血濡れの太

刀。刀傷。それらが示すことがわからぬほど土方も沖田も間抜けではない。同時に酷く得心する。彼の強さと、時折覗かせる表情の意味。

彼は確かに、侍であつたのだ。あの動乱の時代に、刃を握り振る生きてきたつわものであつたのだ。

「ダイジョーブネ！」

銀時の言葉に「心配」と顔中にでかどか書いた新八の背を神樂がどついた。結構な力のそれに一瞬息を詰まらせた少年の不安を神樂が明るく笑い飛ばす。彼らの保護者に似た不敵な笑みを浮かべた少女は何の問題もないといわんばかりに胸を張る。大丈夫アル、何の根拠もないくせして自信満々に断言する様が無駄に堂々としていて、沖田は微笑ましさに鼻を鳴らした。

「心配無用ネ、新八。銀ちゃんだったらどこであろつが適当に生き延びれるアル。オマエと違ってな」

「まあ、あの人無駄にそこらへん器用だから大丈夫だろうけど、っていうか悪かつたな弱くて」

絶対的な信頼。それは銀時の腕っ節によるものだけではなくて。（自分たちをおいていなくなるはずがないという、そんなこともじみた幻想をこのこどもたちはあまりにも信じている）

その親愛に銀時は少しだけ困つたような顔をする。随分と信用されてるものだと内心複雑であろうことは想像に難くない。愛されてますねえとからかうように云えば、そうねえと苦笑交じりの声が返ってきた。何、未来の俺そんなにいい人なわけ。おどけた調子の言葉にこたえたのは土方の皮肉げな声だった。ああいいやつだなあ。俺アテメーみてえなヤツは見たことねえよ。

「いい年こいて平日の昼間ツからプラプラしてるようなヤツでなア。従業員に給料は払わねえ家賃は貯める糖分摂取過多俺らにも迷惑ばつかかけてる「イイヤツ」だよ。そのまんま帰ってこなけりゃもっ

とイヤッだ」

ぴく、と銀時のこめかみがひきつる。

「……へーえそうかい、俺にしちゃあ真面目に生きてるようでないの。少なくとも昼間ッからスナックにいるような目つきの悪いニコチン中毒者よりやあマシみてーだな」

ひく、と土方の口許がひきつる。

「……」

「……」

数拍の沈黙は、嵐の前の静けさに似ていた。

「……あんだこの野郎」

同時にがっしと胸倉を掴み合う意外に息ぴったりなふたりに一同は嘆息する。これもまたいつもの光景である。やはりこのふたり、どうしたって仲が悪いらしい。しかもいつもならば多少の年の功がある銀時は、今は沖田とそう歳の変わらぬ少年である。つまり自分がひいてやるような大人気など欠片も持ち合わせないガキがふたり。そして現状、より大人気ないのは今の銀時より十近く年かさの土方である。何やってんですか大人気ないですぜ土方さん。土方は答えずぎりぎりと銀時の胸倉を締め上げる。沖田の揶揄は聞こえなかったらしい。つくづく大人気ない。

「あ？　だとコラ、思いっきり瞳孔の開いた目エしやがって。どこが悪役さんですかア？」

「あん？　テメエに云われたくねエよ、死んだ魚みてーな目エしてる野郎にはなア！」

「るっせエな今は充電中なんだよ！　いんだよいざってエ時にはキラめくから！」

「テメエのいざってエ時つーのは甘いモン食うときだけだろがア！」

「馬鹿云ってんじゃねエよ、ツラや高杉おちよくるときにもキラめかア！」

「なお性質悪イよ！！……って、あ？」

今なんだか聞き捨てならない名前を聞いたような気がした。彼が「ヅラ」と呼ばれる人物がかの攘夷浪士桂小太郎であることは沖田も土方も知っている。それでは桂の名と同列に彼の口から出た「高杉」が指す人物とは。土方も気付いたようでいっそう凶悪な顔になる。

「あーっ、銀さんストップストップ！」

慌てて新八が銀時の口を後ろから抱え込むように両手で塞ぎ、むぐ、と何かを云いたそうな彼を土方や沖田から少し離れたところまでずりずりと連行していった。桂さんたち今指名手配中なんですよそしてこの人たちはそれを捕まえる側なんです！ マジでアイツら何したの？！ 奴ら今現職テロリストやってるネ。…ヤバイ、何だろうなんか否定しきれない。あ、やっぱ昔っからそんなかんじなんですかあの人たち。奴らの馬鹿は遺伝子レベルアル、多少歳くつたくらいで治るはずもないネ。それについては全面的に同意するわ俺云々とくけど銀ちゃんも同類アルヨ。えええあの馬鹿共と類友とか冗談じゃねえよ！ いいえいい勝負ですよアンタら。マジでか。小声ではあるのだが隠しきれずに漏れ聴こえる会話は、これは聞かなかったことにしたほうがいいのだろうか。ちらと土方を伺うと彼は苦虫を噛み潰したような今にも怒鳴りだしそうな頭痛をこらえているような、なんともいえない顔で煙草をふかしていて、こらえきれずに小さく嘔き出す。

いつもどおりの喧騒である。いつも楽しそうだなと眺めていた彼らの日常である。

当初の緊迫感やらなにやらなど綺麗さっぱりどこかへやってしまったような彼らのコントを聞きながら沖田はやれやれと苦笑した。店の中にはいつもと同じテンポの良い会話が飛び交う。まったく同じそのノリに、ああ彼らはかわらないのだと知らず沖田の頬はゆるんでいた。

ほら、そこにも君がいる

なんのことはない、見たことのないらしくない知らない貴方だつて、ただ貴方であるというだけの話なのだ。

*** 0 0 4 *** ほら、そこにも君がいる（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。そして評価・感想くださった皆様、本当にありがとうございます。原動力です。遅筆ではありますががなんとか完結させたいと思っておりますのでどうか長い目でなまぬるく見守ってやってください。

出演者リクエストもまだまだ受付中です。パラレルのほうのクロス元も募集しております。どうか皆様の清き一票という名のネタを恵んでください。お願いします。マジで。

それではまた次の話でお目にかかりましょう。

*** 0 0 5 *** **すべてそうやって溶けてゆく（前書き）**

第5話をお届けします。思ったより早く更新できました。びっくり。感想・評価くださった皆様、本当にありがとうございます。想像以上にこんな駄文に目を通してくださる方が多いことに素直に驚きました。多謝。

それでは本編をお楽しみください。

* 0 0 5 * すべてそうやって溶けてゆく

それはおいといて、ですよ。コホンと空咳をして、新八は色々危険な話題を無理矢理軌道修正した。これ以上話がずればどんなボロが出てくるかわからない。主にウチのバカコンビから。

「それよりも銀さんですよ。何がどうなってこうなるんですか」

俺もそれ知りてエよ。投げ遣りに銀時が云い捨てた。その気持ちもわからなくもない。一番混乱しているのは（一見あまりそうは見えないが）銀時本人であるだろう。それも心当たりもないとくればなおさらである。もちろん真選組やスナックの面々も首を捻る。あまりにも情報がなさすぎるのだ。

さてまずはなにをどうするべきか。新八が重い溜め息を吐いたとき、隣からちよっぴり不気味な声が聞こえてきた。フッフッフッ、とどこぞの悪い魔法使いか何かのように含み笑う神楽に一堂の視線が集まる。どうしたイ、チャイナ。沖田が頼杖で訊ねた。

「何の脈絡もなしにいきなりヘンな顔で笑い出しやがって。とうとう頭イツちまったか？」

「ハ、馬鹿云ってンじゃねーヨ、ガキが。…私、原因わかってしまったアル」

「……は？」

図らずも一同の声が同じ一音を唱和する。神楽はにたりと顔を歪め右手を背に回すと大きくあげた。

「これネー!!」

ばんと掲げた神楽の手には、銀時愛読の週間少年ジャンプがあった。いや神楽ちゃん今それいったいどこから出したの。控えめな新八の突っ込みは黙殺される。ところでジャンプが一体何の関係があ

るというのか。どれと訝しみながらも皆は開かれたページを覗き込む。はたして安っぽい紙に描かれているのは某人気マフィア漫画であった。これがどうしたと首を捻る一同にここ見るヨロシと神楽が指したコマには鉄の総身の不思議武器。

「十年バズーカあ？」

なんだそりゃ。胡散臭げな土方の呟きに神楽はイエス！と力いっぱい答える。

「そうヨ！ これで撃たれたヤツは5分間だけ10年後の自分と入れ替わるっていうスグレモノアル！」

「優れものって……」

通販の便利グッズじゃないんだから。元々期待などはしていなかったがある意味で予想以上のボケに新八の頭がかくりと下がる。そういうえば彼女の月曜日の日課は銀時が読み終えたジャンプを眺めることだった。仮にそうだとしても、沖田がつまらなそうに矛盾点を指摘する。

「だがもうとつくに有効時間は過ぎてるんじゃないか？ あねーのかイ？ 確か5分くれエしか入れ替わらねーハズだろ、それ」

「きつと銀ちゃんは今から10年前から来た仲間と一緒に悪の組織と戦うことになるネ！」

「……それ、マンガの筋書きでしょ。モオ……」

そして悪の組織はもう倒したでしょ。新八は嘆息して神楽をたしなめた。しかも十年前の銀さんの仲間って多分洒落にならない人たちばっかな気がするから。でもどうせ馬鹿ばっかアル所詮銀ちゃんの類友ネ。それはそうだけどさア。……おい、マジでアイツら何してる訳？ そして別に友達じゃねーからあんなヤツら。

話がどんどん脱線していくが今度は新八もとめなかった。どうせズレてどうというほどの会話でもなかったし。自信満々の神楽の説をしかし女たちはいはいと聞き流し、銀時はジャンプを読み始め、沖田は馬鹿だテメエと吐き捨て、土方は聞かなかったことに決めたらしい。その反応に神楽は頬を膨らませてそのようにふくれたが、

フロローをする気はない。手がかりナシか。沖田が特に何も思ってもいないように呟いた。他人事だと思っているのが見え見えである。対して土方はもう少し真面目に考えてくれているようで、煙草を指に挟んだままの右手で額をおさえた。彼の上司が馬鹿なことをやらかした時に見せる呆れと諦観に近いものがあつた。

「しつかしなア……。また天人の仕業つて訳でもねエだろうし。原因も判んねエンじゃ流石にどうしようもねーな」

テメエはまた何ややつこしいことになってやがんだと云いがかりをつける土方に銀時は嘲るように鼻で笑う。先ほどの一幕ですっかり彼を敵と認定したようだった。

「ハ、ンだよ偉そうにしてる割にやあつつかえねーの。おたくらマジで警察なの？単なる給料泥棒じゃねーかよ」

「だとコラ。警察つてもなア、こんな非常識は管轄外なんだよ。つか仕事しろつつんなら廃刀令違反でしょっぴいてやつてもいいんだぞテメエ」

手エ出せオラ手錠かけてやらア、開いた瞳孔で吐かれた悪態に、しかし反応したのは銀時ではない。

「ッ！ やっぱりお前ら銀ちゃん連れてく気アルか！！」

さつと頭に血が上った様子で、神楽は銀時を庇うように傘を構えた。彼らが現れたあたりからころなしかぴりぴりしていた彼女は、それをずっと警戒していたのだ。碧い瞳が怒りに燃え上がる。

ちよつと待つてくださいと新八も神楽の隣に立つた。銀時は何も知らないのだ。今この国がどうなっているかということさえ。流石にそれはあんまりだろうと土方に云い募ろうとするも、彼は馬鹿狹エ中でそんなもん振り回すんじゃない、うつとおしそうにこどもたちを一瞥するだけだった。せつかくのコイツしょっぴく絶好の理由だが、残念ながら無駄なこととしてられる暇なんざねエンだよ。

へ、と毒気を抜かれてきよんとするふたりに土方はいかにも不本意といった体で眉間に皺を寄せる。

「連れてったとこで、なんもわかつちやいねーヤツ相手に事情聴取

もクソもねえよ」

そう吐き捨てて、オイお前とつと瞳を細め土方を見詰める銀時に声をかけた。その冷たさに怯むことはない。その刀、土方はぞんざいに銀時の腰の差料を顎で指す。

「捨てるまでは云わねエが、表歩くときは帯刀すんな。腰が軽いつつうんならいつもみてえに木刀でも差してろ」

問答無用で現行犯逮捕されっぞそうなたらいい気味だけどななとと嘯く男に、銀時はフンとつまらなそうに鼻を鳴らした。

新八はぱちぱちと数度またたいてそのやりとりを眺め、ついで黒装束の男を見る。

（このひとは彼を連行する気など端からないのだ）

今のは単なる売り言葉に買い言葉であるのだろつ。そうと理解し、新八は大きく息を吐いた。安堵とともに武装警察の副長を担う男の呼び名を思う。「鬼」と呼ばれる割に随分と甘い男だ。銀時のこの格好を見て推察できないほど愚かでもないだろうに。——彼は銀時をどうこうする気はない。

「土方さん、あの」

ありがとうございますと云うのもなにかおかしい感じで、云うべき言葉を見つけられず口籠もる新八をちらりと見下ろし、土方は鼻で溜め息する。

「ま、仕方ねエだろ。その代わり、その天パが元に戻ったらきちり話は聞かせてもらっからな」

オラ総悟戻るぞ、煙草を灰皿に押し付け彼は邪魔したなと店を出て行った。沖田はしょうがない子どもを眺める生ぬるい目でその背を見送ると、こちらもやれやれと席を立った。まったく、素直じゃねエ野郎だ。ぼやく口許はかすかに笑みを刻んでいる。そんじゃ旦那、お達者で。またなんかあったら連絡くだせエ。云い置いて彼も土方に続く。もう来るなどの神楽の罵声に少年はひらひらと手を振って返し雑踏に紛れて消えた。

「何アルかあれ。ツンデレ気取ってるつもりアルかあのマヨラー」

気に食わないとぶすくれる神楽をまアまアとなだめ、新八は仏頂面の銀時を振り返る。銀さん、あのですね。

「あの人たち、別に友達って訳じゃあないですけど、でも多分、敵にもなりませんよ」

洋装で刀を帯びる彼らに現在進行形で天人を排すためのいくさに参戦している銀時が何を思ったかは新八にも想像に難くない。けれど新八の知る銀時は彼らを（特に土方を）毛嫌いこそしていたものの、きつと本気で嫌ったり疎んだり、ましてや憎んだりなどしてはいなかった。銀時と同じく「護る」というただひとつの志を根底にした彼らの在りかたを銀時は認めていた。おのれとは違うその生き方を小気味よくさえ思っている節がある。ただ関わりたくないと思っただけであるならば銀時は全力で相手にしないよう努めるだろうから。故の犬猿の仲というポジション。どうにも割り切れない曖昧な関係ではあるが、そこに嫌悪や侮蔑はない。

何故なら彼らも等しくさむらいであったから。

ダチでも敵でもないってんなら、じゃあなんだッてんだよ。もつともな問いに新八は苦笑した。確か以前にもこんな問答をした気がする。水鳥の名を持った男は、新八の答えを聞いて苦く笑っていたけれど。

「さあ。…腐れ縁、ですかね」

「…そりやまた。クソつたれた縁もあつたモンだな、そろそろ腐りきって醗酵してンじゃねエの？」

皮肉げなものいいに新八は笑う。そんな納豆じゃないんですから。だから煮ても焼いても食えないでしょうね、これは」

「そりやあ、筋金入りだ」

くつくつと咽喉を鳴らして銀時はさも愉快そうに笑った。

出逢ってから始めて、しろい少年は声をたててわらった。

すべてそうやって溶けてゆく

不安も不審も不稽も不穩も不合もすべて、あなたがそうやって笑うから。

* 0 0 5 * すべてそうやって溶けてゆく（後書き）

終わんなか つ た ．．．！イントロもう1話くらい続きます。

神楽視点の話が書きたい。今までののは話的に彼女の視点からはできなかったのです。次は書くぞ．．．！このシリーズは新八目線の話が多そうです。なんか書きやすいので。突っ込みやすいし。神楽は一人称のほうが書きやすいですがこの話は三人称統一したいし。誰か文才をください。（マジ）他誰かコイツ視点でやってというキャラがおりましたら連絡ください。むしろネタをください。

ところでこんなグダグダな駄文に目を通してくださる方が想像以上に多く素直に驚きました。ありがとうございます。パソコンが使えないときはちまちまケータイで打つしかなく遅くなったりレイアウトがおかしかったりする場合もあると思いますが、どうか生ぬるい目で眺めてやってくださるとありがたいです。感想・リクエストまだまだお待ちしております。

それでは次の話でお目にかかりましょう。

*** 0 0 6 *** わかりあうことも、わかりあえないことも、（前書き）

第6話をお送りします。前回感想等下さった皆様、有難う御座います。とうとう遭遇編はこれで終了。．．．ところで先に云うときまま
長いよ。

* 0 0 6 * わかりあうことも、わかりあえないことも、

「万事屋銀ちゃん」

そう声に出して看板を読み上げ、銀時は傍らのこどもたちに声をかけた。よろずやって、要するになんでも屋みたいなモンか。なんでも屋っていうかなんにもやってない屋アルと少年の問いにあっさり云いきったのは神楽である。仕事なんてほとんどしてないネ。

「ぶつちやけ大人銀ちゃんはただのプー太郎アル」

「プー?! マジで? ハタチこえてて?」

流石にそれはどうかと思つたのか、銀時の頬にたらりと冷や汗が伝つた。幼さの分、まだあの駄目な大人ほどに腐つてはいないらしい。それでもどうせこのしろい少年も行く末はただのマダオなのだと神楽がうるんげな半眼で見上げると、彼はなんだよと顔をしかめた。別にイといかにも含んでますとばかりにそつぽを向けば、なんか云いたそうだなオイと声が降る。このあたり、すぐにムキになるこどもつぽいところは変わりはないなと神楽はくすんと笑つた。

そんな仲の良いふたりをハイハイと慣れた調子でとりなして、新八が銀時に補足説明を入れる。

「一事が万事、お金さえ貰えるんなら何でもやりますってのがモツトーの商売ですよ。仕事が少ないのは事実ですけどね。それでもなんやかやと依頼は来ますよ。それこそ色々」と

「へえ?」

銀時は面白げに片眉を上げた。ちなみにどんな仕事が来るのとの質問に、そうですねと新八が視線を上により考える素振りをする。家事手伝いとか浮気調査とかお店の助っ人とか迷子のペット探しながらが主ですかね。なんか地味だなと銀時が感想を云えばどんなのを想像してたんですかアンタと即座に返された。

「いやさ、なんでも屋つつーからにはやっぱアレだろ。駅の伝言板

にさア、なんか依頼が書いてあつてよ。そんで麻薬の密売人とのバトルとか、テロの阻止とか、爆弾危機一髪とかさ、なんかあんだろそういう依頼から騒動へっつー少年漫画的な展開の話が」

「どこのシティーハンターですかそれ！」

はいはいそんな冒険な依頼なんてウチは受け付けてませんから。ジャンルがそもそも違いますから。ていうかいち民間企業にそんな依頼は持ち込まれませんから。ウチはそりやまあ法律スレスレかも知れませんが一応タウンページにも電話番号が載ってる合法的な商売ですから。過去何度か巻き込まれたことのある似たような珍騒動の数々を新八は心の筆笥の引き出しの奥底に封印することに決めたらしい。神楽はあえて沈黙を守った。

賑やかなやりとりはいつものそれとまったく変わらない。かんかんかと音を立てる階段のリズムすら。だから大丈夫、神楽は根拠もなしにそう思う。以前記憶を失くしたときも、彼はまた戻ってきたくれたのだから。きっと今回だって。斜め前を歩く少年の袖を握る。継りつく行為に近かったかもしれない。彼は少しかだけ目を見張ってちらと神楽を見下ろし、しかし何も云わなかった。ちいさな手を振り払うことも。

がららと音を立てて先行した新八が玄関を開け放った。こどもたちには見慣れた、銀時には覚えのない、彼らの家。玄関口で立ち止まった新八はその場で振り返り、銀時と神楽が追いつくのを待つ。

「はい、ここがお店兼住居です。銀さんたちはここで寝泊りしてるんですよ」

「俺、たち？」

不思議そうにする銀時に僕は通いですけど神楽ちゃんに住み込みですよと新八が云った。え、と瞳をまんまるくして銀時が神楽を見る。マジでか。なんとなくその反応が気に入らずどいう意味だらなんか不満でもあんのかコラと下からしゃくりあげるようにねめつけば、彼はいやと煮え切らない返事をして新八の後に続き中へ入っていった。

さて、ひとまず室内に落ち着いた銀時と神楽の前に茶を置いて、時計を見やった新八が腕まくりをしながら云った。

「銀さんお腹すいたんじゃないですか。今日本当は夕食当番銀さんなんですけど、今回は僕作りますから。ちよつと待っててくださいね」

「あー、…悪いね、ホントになんか」

恐縮したような彼の言葉に新八はいいんですよと笑う。

「ていうか銀さんにマジにそういうこと云われると本気で気持ち悪いっていうか変な気分っていうか、気持ち悪いんでやめてください」「今気持ち悪いって二回云ったよこの子！」

「大事なことだから二回云ったアル。そういうところがテストに出るネ」

「どんだけ重要ポイント?!」

ああ、なんていつもと変わらぬくだらない会話。けれど神楽は怒鳴る銀時に辛辣な言葉を放りつつ心臓のあたりになにかどろりとしたものがまとわりついているような息苦しさを感じていた。

(変わらない、はずであるのに)

この感覚はどうしたことが。変わらないのだ、なにひとつ。銀時と新八と神楽と定春。三人と一匹の万事屋。何も変わらない。そうであるのに。

台所へと向かう新八の背をふたりして見送り、なんとなく会話が途切れる。息苦しい。銀時とふたりきり、何も喋らないでいたところで沈黙が耐えられないなんてことは一度もなかった。穏やかな静寂は寧ろ好ましいものであったのに。

「……俺は、夜兎と一緒に生活してんのか」

静かにひとりごちた銀時の声に神楽ははっと隣に座る銀時を見上げた。瞬間白けた脳がゆるゆると少年の台詞の意味を理解して息を

呑む。心臓が音を立てるのがやけに響いて聞こえた。知ってたの。囁くような声が自分の口から漏れるのを他人事のように聞いた。しろい少年は苦く笑う。そりゃあいくさしてりゃあな、話にはよく聞くよ。夜兎は戦闘種族だから。流石に出くわしたこたアねーがな、透き通る膚と日除けの傘は、こりゃ夜兎の特徴だ。

知っていた。

知られていた。

神楽は瞠目した。ただ銀時を見詰めた。死んでいない血色の瞳はしかし、やはりその心内を悟らせない。彼が何を思い彼女の血を口にしたのか判らず困惑する。——疎まれているのではと、憎まれているのではないかと恐怖する。

「銀ちゃん」

「本ッ当、俺は未来に来ちまったんだな」

呼びかける声には応えずに、彼は開き直ったように息を吐いて、天井を仰いだ。

「街には天人が歩いてて、天人の技術が溢れてて、あまつさえ俺は天人と一緒に暮らしてる」

細めた眼に揺らぐものは、切なさか、悲しみか、——絶望か。はたまたそれ以外の何かか。神楽にはわからない。

「本当、俺は遠いところに来ちまったんだなア」

なにもかもがまったく違う。そうささやく銀時は遠くを見ているようだった。時折見せるその表情。どこかいつかとおいところへ想いを馳せるように。

「侍が刀をすら持てねエ世の中なんて」

剣を捨てる？ そんなことして、今の俺はどうやって生きていたッていうんだ。それ以外の生き方など知らないのに。ただ刀を振るうことで生きてきたというのに。赤い瞳を伏せて自嘲するように吐き捨てる銀時に、神楽はでも、と言葉をかぶせる。

（かたななど持たなくても、貴方はたしかに侍だった）

確かに貴方は鋼の刃は持つてはいない。けれどそれに代わるものを、もつとつよくて素晴らしいやいばを持っていた。神楽は常の不遜さの見えぬ少年にそうと教えてやりたかった。未来を知ることが彼にとつていいことかどうかはわからなかったけれど、あなたはなにひとつかわつちやいないのだと云つてやりたかった。それがごどもの傲慢としても。

「銀ちゃんは真剣を使わないネ。でも刀は持つてたアル」

なんだそりやと銀時が眉を寄せる。どーいうことだよそれ。それを見上げて神楽は笑う。彼にそっくりだと同僚の少年によく指摘される、にたりと口の端を持ち上げる笑みで。

「銀ちゃんは木刀を持つてたアル。通販で11760円の胡散臭い妖刀ネ」

「……………この時代、通販で妖刀が買えんのか」

ちよつぱり冷や汗をたらしつつか呆れ返つたように突つ込む少年は華麗に無視る。

神楽は夜兎である自分を否定しない。神楽は戦うことが好きだ。そのために生きているとまでは云わないが、神楽という存在のかなりの部分を戦うことが占めていることは事実である。けれど神楽にはもうそればかりではない。いつか神楽は戦うことを生業とする。父親と同じように宙を駆け異形を狩るためにたたかう未来を夢にみる。いまや神楽にとつての戦いとは何かを護るためのものであったから。

——いつだってそんなふうなたたかうあなたをみてきたから、わたしはそうすることもできたのだと。

神楽は銀時の過去など知らない。ただ昔いくさに出ていたということと家族がいないということ以外には本当に何も知らない。だから現在進行形で天人といくさをしている銀時が天人と暮らしている

現在をどう思っているのかなどということとは知らない。もしかしたらこの少年にはそれは酷なことであるのだろうとも、思う。けれども知っても欲しいのだ。

「銀ちゃん」

ねえ、銀ちゃん。わたしたちの大好きなあなた。精一杯の親愛を込めて彼の名を呼ぶ。いい年こいたオツさんにちゃんづけなんておかしいかもしれないけれど、でも私たちは家族なのだから、それもまたいいでしょう？

「銀ちゃん、オメーバカだからいつくら考えたってムダネ。バカだから。アホだから」

考えるだけ時間とエネルギーの無駄ヨと云いければ彼はだとテーマとこめかみをひくつかせて低くうなった。くすくす笑いを隠しめせずに、でもね、神楽は少年を見詰める。少しばかり大人げのないしろい少年。銀ちゃん、でもね。

「でも、私たちの知ってる銀ちゃん、まるで駄目な大人で金もないし仕事もないしやる気もないし甲斐性もないけど」

それでも結構、楽しそうヨ。満面の笑みでそう告げた。

——神楽には銀時の本音などわからない。あの男はいつだって飄々としていて、単純でわかりやすい性格をしているくせに本音は人には見せようとしない。神楽の知る銀時という男は、潔いほどに大人気ないまるで駄目な大人である。だらしがなくて面倒くさがりでひねくれ者で、そのくせ甘いほどに底抜けのお人好し。神楽はそれでいいと思っている。神楽の知る銀時は、ただそれだけでいい。昔のことなど知ったこっちゃないのだ。もしもいつか彼がひた隠してきたそれを知るときがあるとしたら、ただ受け入れるだけでいい。神楽の隣に座っている少年はいつか神楽のよく知る彼になる。ゆつくりとそうなっていく。だからしろい少年の知らぬことだって、いつかしろい男になる過程で彼は知っていくだろう。神楽が何も云わなくても。もともと彼が選り歩き誇り持ち進んできた道である。

ただ、知つても欲しいのだ。

今。少しだけ哀しいこのしろい少年にこそ。

（あなたはこのまちで生きてきたのだ。あなたはこのまちに生きて
いるのだ）

この雑多で下品で騒がしくて冷たくて粹で人情味のある、やさしく心地の良い眠らぬ街で、貴方はこの上なく生きていた。何気なく他愛なく造作なく、たしかにしたたかに生きていたのだ。

だから貴方は貴方のままに。それでいいのだとそうしてにこりと笑む異邦の少女を、銀時はこどものように目をまるくして見詰めた。そしてふと吐息で笑い、少しだけ眼を眇めて（まるで眩しいものでも見たかのように）神楽の頭をくしゃりと混ぜる。

ありがとな、（そしてごめん）そう云う声も、手も、なにひとつとして神楽の知る銀時と変わらない。こどものような扱いに寧ろきやつきやとはしやぎながら神楽は銀時に抱きついた。

（彼が彼のままにあり、そうして私たちとともにいてくれるならば、私はそれで結構生きていける）

なんだこんなに容易いことだ。騒動には慣れていたつもりだが、今回の非常識には意外と自分も困惑していたらしい。こんなに簡単なことだった。大丈夫、私たち、またきつと家族になれる。私はずっと貴方のことを好きでいる。夕飯の仕度をしている少年だって。何も心配など要らないのだ。貴方には私たちがいるのだから。

だから大丈夫よと微笑めば、しろい少年は照れたようにぐしゃぐしゃとつよい力で明るい髪色の頭を掻き混ぜた。

わかりあうことも、わかりあえないことも、

ゆっくり知っていけばいい。知り得ぬならばそれはそれで。それでもいつしよに歩いてゆくくらいはできるから。

きやあきやあ騒ぐ少年と少女の声に気づいて料理の合間にひよつこりと様子をうかがいに顔を出した新八がその光景を見て苦笑した。なんだふたりともさっそく仲良くなっただんですか。羨ましいかと返されて彼の苦笑が深くなる。そこに少しだけ安堵の色があつたのを神樂は見逃さなかった。この少年も大概心配性だ。しかも甘い。

はいはいふたりとも、もうご飯できますからね、お椀運んでください。食卓の支配者に云われればふたりはのっそりと動き出すしかない。ものぐさなふたりにできばき指示を飛ばしながら、そういえばと新八が呟いた。

「明日つから万事屋どうしよう神樂ちゃん。銀さんいないのに」

ああと少し考えて、神樂は大丈夫アルと云いきった。

「あんなマダオがいなくなつて私たちだけでもやっていけるネ。なんならまた万事屋グラさん復活したっていいアル」

「まあそれはそうだけど」

「おーい、なんかお前ら、俺の扱い酷くね？」

「つていつても、やつぱりしばらくは万事屋、休業かなあ……」

無視かよオイ、銀時の訴えをさらりと流してやつぱり銀さんいないと何かとなあと嘆息する新八に、しよーがないネと神樂は肩をすくめた。銀ちゃんこんなじゃ、仕事なんてやってらんないネ。

「それにどうせ依頼なんてこないアル」

「まあね。開店休業はいつものことだもんね」

「……………いいよ」

「え？」

「やるよ、万事屋」

仕事しねえと食ってけねーんだろ？仕方ねエじゃねーか。やる気の欠片もない口調でそう云われても新八としては戸惑うだけだが、どうやら彼は本気らしい。

「…大丈夫ですか、銀さん？」

「おー」

ま、なんとかなんじゃね。あつさり云つてのける銀時に神樂がにかりと笑う。皿が置いてあるにもかかわらずテーブルの上にどんと仁王立ちし拳を突き上げた。

「ヨシ！ それじゃあまた明日から万屋銀ちゃん（仮）始動アル！」
かつこ仮かつことじつてなに。条件反射で突っ込んだが、やれやれとでも云いたげに口許のゆるんでいる銀時と眼が合えば新八も腹から笑いのこみ上げるままどちらともなく嘖き出して、オー！ とひとり盛り上がっている神樂に乗じて拳を掲げた。

それぞれ大きさの異なるみつつの拳が重なる。

大丈夫、明日はまたいつもの騒がしい朝だから。

* 0 0 6 * わかりあうことも、わかりあえないことも、（後書き）

ここまで（こんなクソ長い話を）お読み頂き有難う御座いました。解説はあんまりしたくないんだけどひとつだけ補足。銀時は天人憎しというより先生を奪っていった世界への怒りから戦争に参加してたんだと思います。だから天人にもそれぞれの生活があることは知ってますし（普段は考えないようにしてますが）おのれの所行がたとえどんな大義名分があろうとひとごろしであることを理解してます。だから神楽個人のことも夜兎だからどうというわけではありませんが、やっぱりそれでも天人なわけで、割り切れるほど彼は大人ではありません。まだまだ未成年のケツの青いガキだから。だから彼の夜兎云々の発言は予防線。ともすれば傷つけてしまうかもしれない少女にだから近づくなどの警告。だけど少女はそれがどうしたとかけるりといいきって隣にいることをやめないから、なんとなくそこに収まっちゃう。彼が臆病なのはかわらない。そんな感じ。さて次回からは今以上にグダグダ感満載の日常編をお送りします。かぶき町の皆様ほとんどオールスターのノリで行こうとは思ってますがやはし予定は未定です。「コイツ出して」的な要望ありましたらお手紙ください。感想・質問・評価お待ちしております。ネタと特にお待ちしてます。

ところで銀魂小説ふたつ程書いてますがひとつたりとも銀さん（n o t 銀八）が出ていないことに気づいて愕然としました。なんてこった。

それでは次の話でお目にかかりましょう。

*** 007 * 何食わぬ非日常（前書き）**

第七話をお届けします。感想・評価等下さった皆様、本当にありがとうございます。今回から日常編の始動です。かぶき町の人々との交流話となります。まずはまさかのあの方から。それでは本編をお楽しみください。

* 0 0 7 * 何食わぬ非日常

「苦労さん、と銀時は万事屋の玄関先で獣の耳を持つ（しかしそこに萌え要素は欠片もない）女に声をかけた。水商売に携わる人間としては早い時間帯に万事屋を訪れた女は、イイエソレヨリ才大事二などと返し階下に戻っていった。別に調子が悪いわけではないのだが。なんかちょっと未来に来ちゃったっていうだけで。

受け取ったファイルでほとんど肩を軽く叩きながら室内に戻ると、少年が洗濯籠を抱えてああ銀さんと振り向いた。通いの従業員だと云っていた彼は結局昨夜「なんか心配だから」と万事屋に泊り込み、早朝からてきぱきと駄目な大人予備軍ふたりの世話を焼いた。どうでもいいが割烹着と三角巾が無駄なまでによく似合っている。

十代後半に差し掛かって間もないだろう少年がこんなにも所帯じみているという事実が目頭が熱くもなりかけたが、彼はそんな銀時の内心など気づきもせず朗らかに来客の用向きを訊ねる。

「キャサリンさん、なんですって？」

「家賃の催促アルか？」

長椅子に寝っ転がってぱりぱりと酢昆布を齧りながら神楽が首だけで振り向いた。そんな金なんてどこにもないアルよと世知辛いことを云いきる少女にこっさり心の中で未来の俺が本当御免と頭を下げながら手に持ったものを掲げて見せる。

「回覧板だつてよ。次どこにまわせばいいの？」

瞬間、こどもたちの顔がさつと蒼冷めた。

え、何その反応。予想外もいいところな反応に流石に少したじろぐ。

「何、そのリアクションは」

まるで幽霊でもみたようなと思いかけて慌ててその思考を追いやった。まさかだ、まさか。一瞬怖い想像をしてしまったことを打ち消すように銀時はつとめて気楽な風を装って笑う。少しばかりひきつづけていたかもしれないが。なんでそんな怖がつてんだよ、お隣は魔女とか幽霊屋敷とか、そんなもんでもあるまいし。冗談めいた言葉に、新八ははは、と乾いたように笑って見せる。

「……あー……似たようなもんですかね」
え。

今度こそはつきりと銀時の笑顔がひきつった。え、なにそれ。冗談だよ。冗談ですよ。

「馬ッ鹿おめ、そんな、幽霊なんているわけねーだろ！スタンドなんだよそんなんは！……え、なに、隣の人、マジでスタンドとか云っちゃうの？ いや、信じてなんかないけどね？」

「いや、ちゃんと生きてますけど。ただの天人ですけど」

「……スタンドのほうがよくぽどマシネ」

「……ええええ？」

ぶるりと震えてみせることもたちの冷や汗は本物で、銀時の頬にも知らず冷たいものが伝う。それを見て新八がああエイとか煮え切らない声を出した。

「え、いえ大丈夫ですよ。無害ですから。寧ろいい人ですよ、ほんと。殺生とかすごく嫌う人で、ホント親切な人ですよ」

じゃあなんでそんなに怖がつてんだよとは訊けなかった。

「大丈夫アル銀ちゃん！ オマエはやればできる子ネ！ 私信じてるアル！」

「そうですよ、大丈夫ですって。案ずるより産むが易しですよ、心配いりませんって」

「ていうか、なんかいつの間に俺が行かなきゃなんない雰囲気？」

絶対嫌だぞと視線に乗せて訴えれば、こどもたちは白々しく忙しそうな体を繕う。

「いやホラ、僕まだ家事残ってますし」

「私定春のブラッシングしなきゃなんないネ」

と、いうわけをお願いします。

「嫌だ」

銀さん。銀ちゃん。いやーだー。なんかよくわかんないけどなんか嫌だー。生存本能が危険信号を嗅ぎ取ったのか、銀時はおつかいをかたくなに拒否する。勘が良い。往生際の悪い少年にこどもたちはさっと視線を交わすと、まったくおんなじふうの小首を傾げ無邪気な瞳で銀時を見上げた。銀さん、銀ちゃん、もしかして。

「……怖いんです（アル）か？」

「……………ンなわきゃねーだろコノヤロオオオオ！！」

手玉にとられたと気がついたのは玄関脇の階段を降りきってからで、当然時既に遅かった。

ヘドロの森、と看板のかかっているお隣は銀時の予想を裏切りー見ごく普通の商店に見えた。めっちゃ樹が生い茂っていたけどそれはそこまで問題じゃない。重要なのはいかにもおどろおどろしいお化け屋敷などではなかったということで、銀時は大きく安堵の息を吐く。なんだよただの花屋じゃねえか。胸中で銀時は毒づいた。アイツら俺をからかってやがったな、チクシヨウ手の込んだ真似しやがって。

「すいませーん、回覧版でーす」

云いながら店内を覗き込む。反応はない。あれ、とひとつ小首を傾げて再度すみませんと先ほどより声を張り上げた。応答なし。少し考えて、銀時は店に足を踏み入れる。小奇麗な店内は花で溢れていて、とてもスタンドなどが出てくる雰囲気ではない。こうなればとりどりの色と香りが飽和する空間を楽しむ余裕も出てくるというものである。鉢植えの白い花を覗き込めば、ふと甘い香りが鼻腔をくすぐる。花の名前などは知らないが、これはちょっとしたものだ。

銀時は少しだけ微笑んで、三度おとないの声をあげる。

「すいませーん、誰かいませんか？」

今度こそハイたたいまと男の声が店の奥から聞こえてきた。銀時はやれやれとその場にたたずんで待つが、ふと足元の小さな花に目が行きしやがみこんだ。ほのかに薄紅がかった小菊に似たその花は、銀時がおさなごであった頃、同じ学び舎に通う少女たちがよく髪に飾っていた花である。まったく名前のとおりの花簪。そういえば銀時自身も寝ている間に髪に花を編みこまれて閉口した記憶がある。桂などそのうざったい髪を女どもの玩具にされてよく花など飾られていた。

その無然とした顔のこともを思い出しひとりにやにやしていた銀時の後ろから足音がした。すいません、奥にいたもので、気づかなくつて。恐縮したような男の声を真後ろに聞いて銀時も立ち上がる。「ああ、すんません。回覧版持つてきました……」

銀時はそう云いながら何気なく振り向いて、

そこに本物の鬼を見た。

ぴきんと音が聞こえるほどのものの見事に凍結^{フリーズ}したが、回覧版を取り落とさなかった分だけ上出来である。

鬼である。まったくもって鬼である。疑いようないほどに鬼である。

隆々たる巨軀は銀時よりも頭二つ分以上はゆうに大きい。ひとならざる色の膚は硬く、下手な刃物など逆に折れてしまいそうなほど。獅子の鬣と水牛の角、ヤクザ傷のある般若もかくやというご面相のうえにはなぜだか可愛らしい一輪の花。そしてこれまた可愛らしいエプロン。一見裸エプロンっぽく見えるのにこの上なくおぞましいのはなぜだろう。

何この怖い生き物。…生き物？ え、こいつ俺と同じ生物だっていうの？ マジで？

恐怖のあまり硬直する銀時に、鬼はあくまでにこやかに（多分きつと恐らくは）わざわざ有難う御座いますと礼を述べる。イイエと片言ではあったが反応できたのは我ながら拍手喝采ものだ。

間接部の錆びたからくりのようにぎこちない動きで回覧板を差し出す銀時からそれを受け取った鬼は、ふいに目を瞬いて銀時を見詰めた。すわ喰われるかと再度固まる少年を上から下まで何度か視線を往復させて眺めると、鬼はぱちりとまばたきする。

「あれ？ 坂田さんどうしたんですか。失礼ですけど、なんだかいつもとより小さくありません？」

鬼がそう首を傾げたが、マヒヤドクラスの冷気をもろに受けた銀時に答えられようはずもない。坂田さん？ 再度声をかけられて、いやその、なんとか声を絞り出す。若干震えているのは仕方がない。ないっतरらない。ここに高杉とかヅラとか辰馬とかいなくてホント良かった。助かった。

「そのー、…なんか原因不明の奇病でちよつと若返っちゃったみたいでー…」

記憶とかも外見相当の分までしかないんですよなんか失礼とかしちゃってたらホントすんませんホント勘弁してください。きつちりと直角90度に頭を下げる銀時に顔を上げてくださいと云って鬼は気遣わしげな顔をした（多分きつと恐らくは）。

「そうなんですか。それは大変でしたね。何か僕でも力になれるようなことがあるば、何でもおっしゃってください」

「……………はい。ありがとウゴザイマス」

あたたかみのある言葉にかるうじてそれだけ述べると銀時は一目散に花屋を辞した。

生きているって素晴らしい。

「お前らアアアアアー！」

壊れるほどに力いっぱい引き戸を開けて、銀時は万事屋の店内へ怒鳴り込んだ。あ、お帰りなさい。お帰りヨー。のほほんといえ

るこどもたちを見てどつと安全な場所にやってこれたことへの安堵からくる疲労が襲う。ちよっぴり目の端が冷たい感じがするのは心の汗だ。断じて怖くて涙目になっている訳ではない。ごまかすようにお帰りじゃねえよ馬鹿野郎とあんな危険なミッションを押しつけやがったこどもふたりに噛みついた。

「お前らなア、隣のヘドロあんなに恐エんなら先云つとけよ！ 心臓止まるかと思ったじゃねーかよ！ 鼻水噴いちまったよコノヤロ

ー！！」
「……あー……」

心底同情を含んだ眼差しにやっぱこいつらわかつてやがったと怒りを込めてねめつけた。その目に光るものを見つけこどもたちが囁きあう。あ、やっぱヘドロは怖いんだ。白夜叉でも屁怒組さんは怖いんだ。うるさいなんて呼ばれてようと俺は人間なんだよ本物の鬼なんて怖いに決まってるだろうがいや怖くなんてないけどさ！ 素直に怖いと認めないのは生来の天邪鬼が若さゆえの意地か。なまぬるく見詰めるこどもたちに一発ずつぐーでくれてやって、銀時は長椅子に倒れるようにして座り込んだ。怒りが一段楽した今、麻痺していた恐怖が代わりのようにやってくる。なんか夢に出てきそう

だ。
「……なんか俺、もうアレ以上の恐怖ってないような気がしてきたわ……。うん、アレを思えば俺空くらい飛べそうな気がする」

「多分普通に死ねますからやめてくださいね」
遠くを見詰めて黄昏る銀時に温度のない突っ込みが入った。オイオイ冷てエなと絡めば止めてもらえるだけマシと思ってくださいなんて返ってくる。少女は既にこのやりとりに興味が失せたのか犬とじゃれていた。

こんな日々がデフォルトなのかと銀時は嘆息する。くだらない騒ぎとアホな会話が織り成す日常。未来の俺、よくこんな中で生活してたよな。先行き不安というかこれからこの毎日が続くのかとなん

かシニカルな笑みを浮かべてもみたくなったのは、これは仕方のないことだと思うのだ。

何食わぬ非日常

そのくせこのホームコメディが嫌ではない自分が一番不可解だったりもするのである。

*** 0 0 7 *** 何食わぬ非日常（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。こんな感じでしばらくグダグダにやっています。9割方コメディになると思われますので気楽に呼んで頂けたらと思います。感想・評価・リクエストお待ちしております。それではまた次の話でお目にかかりましょう。

*** 0 0 8 *** **大丈夫？瞳が薔薇色だよ（前書き）**

お待たせしました第八話をお届けします。今回登場するのは彼女。需要があるかどうかわからないひとが続くのは仕様です。

今回後書きに本編にはまったく出番のない主人公がでばってきております。よろしければそちらも是非ご覧ください。

* 0 0 8 * 大丈夫？ 瞳が薔薇色だよ

ちよつと着るもの取りに行きませんかと新八が云つたのは午も過ぎた頃のことだった。ちんと受話器を置きソファで手持ち無沙汰にジャンプをめぐっている銀時を振り向いた彼は、姉上に仕舞い込んでいる着物出しといってもらふようお願いしときましたからと云つて笑った。

「いつまでもその格好じゃあんまりですもんね」

裾が地面についてしまっている彼の着流し姿をみて神楽も同意する。確かにその格好はないだろう。それについてだ、妙にも事情を話して協力を仰げばいい。なにかとよく気の回る彼女はきつと何かあつたときに力になってくれるはずである。銀時も特に異論はないようで、軽く首肯した。

「悪いね、頼むわ」

「いいえ、じゃ、ちよつと行って取ってきましょうか。少しだけならお店空けちゃつたつて構いませんから」

「どうせ客なんてこないアル」

「…そうね」

ハハ、と少々ひきつった顔で笑う新八の背ををオラ行くぞとどついて、神楽は先頭だつて万事屋を飛び出した。早く早くと大きく手を振つて急かせば少年たちは苦笑交じりに笑んで神楽に続く。地理を知らぬ銀時にあればどこだこれがどうだと手振りを交えて説明しつつ賑やかに通りを歩いていたが、万事屋からそう離れぬところでやにわに銀時が立ち止まった。

「…お前ら、ちよつと先行つとけ」

へ、と銀時を見上げ神楽は首を傾げる。唐突になんだというのだろつ、この少年は。

「どうしたアルか銀ちゃん。野グソでもしたくなつたか？」

「神楽ちゃん女の子が野グソとか云わない」

嘆息しつつ窘めて新八も何かありましたかと少年を見たが、んー、ちよつとシヨンベン、とぼけた言葉を返された。

「ちよつとそこらでしてくるわ。それとも何、連れシヨン行く？」

「遠慮します」

ちえー、つれねーの。銀時は唇を尖らせるがまったく感情がこもっていない。神楽は新八んちそんな遠くないアルヨと云ってはみたが、他人んちの便所借りんの嫌いだからとあっさり拒否された。

「つーワケで、先行つてくれや。すぐ追いつくからよ」

ホラ行け行けと犬猫を追いやるかのようにしつしと払われて神楽はその扱いにむっとしたが、いいからとやや強引に追い払われこどもたちは不承不承恒道館道場への道のりを歩き出した。しかし気になるものは気になるもので、ふたりはすぐその角を曲がったところで立ち止まり顔を見合わせる。やはり唐突に過ぎる彼の言動は不可解だ。いつもの飄々とした体に変わりはなかったが、隠し事のあまりに上手い彼のことである。自分たちを追い払ったところを見るとなにかあるのかもしれない。どうするべきか神楽は少しだけ悩んだが、ふいに聞こえた新八の呟きに顔を上げた。

「…先行つてろつたつて、銀さん僕んちまでの道知らないよね」

神楽はにたりと笑う。乗った。やっぱアホアルなあのマダオ三歩手前。仕方ないねあのひと。うなずきあつて踵を返す。はたして彼は来た道をゆっくり戻つてゆくところだった。器用に人ごみを縫いするりと路地裏へ入つていった銀時の後を追う。銀ちゃん、神楽が声をかけようとした時、銀時がぴたりと足を止めた。さては気づかれたかと反射的にささつと隠れるふたりだったが、彼はこどもたちのことなど気にもせぬ様子でぼつりと、しかしよく通る声で呟いた。

「…俺になんか用なんだろ？」

相手してやる。出てこいよ。

暢氣とさえ云える口調で彼がそう云った途端、空気がぴんと張り詰めた。膚がぴりぴりと粟立つ。この感覚は覚えがある、昨日はじめて彼と出逢ったときに向けられたあの空気だ。神楽はごくりと生唾を呑み込んだ。違う、これは昨日のものとは違う。まさしく殺氣、相手を殺さんとする意思である。相手の喉笛に喰らいつき血を啜り、爪を立てて肉を切り裂かんとする獣の意思である。

——尾行けられていた、なんて。まったく気づかなかったことに神楽は内心舌打ちする。いったいいつからだ。誰が何のために？宇宙最強の血をひく神楽にさえわからなかった尾行に彼だけが気づいていた。だからこそそのあの行動。それが彼のこどもたちを巻き込むまいとするやさしさか、はたまた足手纏いと断じたのかはわからない。神楽の方向からは背を向けている彼の表情は見えない。だがきつとその眼はぎらぎらと強く光っている。あたかも鬼神であるかのように。いくさを愛する阿修羅の仔であるかのように。

ざ、わななくかのように世界が揺れた。腰に差した木刀に手をする銀時は彼こそが一振りの刀であるかのような鋭さで薄汚れた路地裏に佇む。抜き身の刃のような危うさ。ぴいんと張った空気が、意図が、最高潮にまで達した。ざり、と銀時が軽く右足を引いた、その瞬間。

「銀さああああああんっ！！」

うおお？！ 焦っている割に間拔けな声が路地裏に響いた。聞こえた女の声になんとなく想像のついたこどもたちはとたんにしょっぱい顔になる。ねエ、新八。そうだね、神楽ちゃん。声と同時に現れた影は迷わず銀時に突進して体当たりにより限りなく近い抱擁をぶちかました。馬鹿正直にそれを受け止めてしまった銀時は唐突に抱きつかれたことに驚いたのか軽くパニックっている。

「ちよっ、オイ、何コイツ！ 何コイツ？！」

「あ、さっちゃん」

「お前ら何、コイツ知り合い?! 何なのこの女ア?!」

予想通りの光景が目に入ってやっぱりなとなまぬるい顔をするふたりに銀時が叫んだ。彼はおんなに思い切り抱きつかれていて、それを必死に引き剥がそうと奮闘している。その頬にわずか朱が差しているのを見つけて神楽はおやと首を捻った。この男は女に抱きつかれた程度で赤くなるような可愛らしい神経の持ち主であつただろうか。いやない。反語。

ええまア、知り合いというか。新八が視線を逸らしつつ微妙な返答をした。寧ろ彼らの関係は加害者と被害者だ。ドSとドMにも変換可能。ドM、もとい猿飛あやめはドン引きしている銀時には欠片も気づかず自分ワールド全力展開中である。

「ああ銀さんっ!」「相手してやる」だなんてそんな、まだこんなに明るいうちからのお誘いだなんてしかも野外プレイだなんてっ! 本当なんてことごとく私のツボを心得てるのかしら興奮しちゃうじゃないのやつぱり私には銀さんしかないんだわアアアア!」

「ちょ、こっち寄ンじゃねエエエ!」

お、さっちゃんにうるたえてる銀ちゃんとか珍しいもの見た。青いなと鼻で笑えば若いねえと隣から苦笑が返る。お前らフザけんなよこの女どうにかしてください頼みます! 途中から丁寧語へと移行した銀時の叫びはどうやらマジだ。もうしばらくその騒ぎを眺めていたい誘惑に駆られたがそうもいくまい。新八と神楽は笑いを噛み殺しつつしろい男にベタ惚れのくノ一を引き剥がしにかかった。

それなりの時間をかけてどうにかこうにかふたりを分離することに成功した新八はあやめに事情を話して聞かせていた。銀時は彼女に事情を明かすことに渋い顔をしていたが、情報収集という点においては彼女ほど頼りになる輩はそういない。

「ふん?」

話を聞いたあやめは怪訝そうに顔を眉根を寄せる。

「じゃあ何？ この銀さんは私たちと会うよりもずっと前の銀さんで、私たちの知ってる銀さんがどこにいるのかはわからない、そういうことね？」

「そういうことです」

「確かになんだか若いみたいね。ああでも、そんな銀さんも素敵」

そう云ってうつとりと頬に手をやるあやめの妄言を聞き流し、神楽はさっちゃん何か知らないアルかと訊ねた。暗殺よりも戦場を疾るよりも、情報収集に特化しているのが忍びである。敵陣深くまで入り込み得た情報を主のところまで持ち帰るのが忍びの技にして本領。この際噂話でも都市伝説でも構わない、今回のような事態に似た話を聞いたことがないだろうか。駄目もとよりかは多少期待して問うた神楽に、しかし彼女はかぶりを振った。流石にそんな話は聞いたことがないわね。困ったように小首を傾げるあやめに思わず溜め息が漏れる。あやめは眼鏡の奥の瞳を少しだけすまなそうに細めたが、やおら不敵に口許だけで笑んで見せた。

「いいわ、私も少し調べてみる。だけど期待はしないで頂戴ね、私も長いこと裏社会に身をおいているし、天人が来てからは多少の物理法則の無視っぷりには慣れっこになっていたつもりだったけれど、さすがにこんなことではじめてだもの」

「すみません、お願いしますさっちゃんさん」

「いいのよ、他ならぬ銀さんのためだもの」

茶目つ気たつぷりに片目を閉じてみせるあやめに新八と神楽は微笑みを返し、銀時は右手で軽く手刀を切る。

「悪いな、頼むわ」

途端、あやめが眼をかつ開いた。

「ぎっ…銀さんが…私に、悪いな、…ですって…?! 銀さんが、私に頼みごとを…ッ?!」

よろりらと貧血を起こしたかのように額に手をやってふらついた彼女はそのまま崩れ落ち、悲劇のヒロインのポーズで座り込む。

「…銀さんが、私に謝るなんて。頼むだなんて。そんな、本当に私

の知ってる銀さんじゃないのね。銀さんは私にそんなこと云わないもの。なんなの、ムチの時代は去ったというの、アメを与える時が来たというの。だけど、ああだけど駄目よ私はアメなんて要らないの、いいえ欲しくないわけじゃないのよだけど銀さんのムチなら私にとって極上のアメなんだもの。アメしかくれないだなんて、そんな銀さんは銀さんじゃないわ。ああでもそれも意味放置プレイとか云うのかしら。いいえ騙されちゃ駄目よさっちゃん、甘いだけの男なんて何の刺激もないじゃない。そうなのに、それなのに銀さんがこんな…ッ！」

これが舞台であるならば左斜め上からスポットライトが彼女を照らしていただろう。がくりとうなだれ泣き崩れるあやめはシンデレラはだしの酔いつぶりだった。

マジでなんなのこの女。ドン引く銀時を他所にこどもたちは顔を見合わせる。あれ、罵られないことに本気でシヨック受けてるよこの人。もしかしてSじゃない銀さんは好みじゃない？ ストーカーがいなくなるんらしいんじゃない？ つまなくなるけど。おい、俺がストーカー被害に遭ってるのは問題じゃねーの？ だって銀ちゃんだし。さっちゃんさんですしねえ。ええええ。どこかへいってしまったあやめを軽く無視してああだこうだと云い合っていたが、唐突にトリップしていたあやめががばあつと顔をあげた。一体彼女の中でいかような結論がはじき出されたのか、少女マンガであったなら確実に点描が散っていたほどにきらきらとした顔で銀時に飛びつく。

「いいのよ銀さん、あのDSっぷりが見られなくなっちゃってやっぱり私には銀さんが一番なんだわっ！ 年下だって多少Sが軽くなっちゃって関係ないわ、だってそう、愛が二人の間にあるんだものッ！ だからいいの、気にしないで、今の銀さんのままでもっと虐げてくれたらそれでいいのよオオオ！」

「だアアッ！！ くつつくんじゃねエエエエ！！」

あーあまたはじまった。今度はもう助けるってかもう関わりたく

ないな疲れるし。冷めた目をするこどもふたりだったが、その耳にぷつりと軽い音が聞こえた。

「……ッいい加減に……ッ」

音の発生地は抱きつかれている少年からしかつた。こめかみにしつかりと浮いた青筋がひくついている。あ、銀ちゃんキレた。神樂がそう思ったと同時に、銀時はすらりと得物を抜いた。彼が持ち込んだ太刀でもなければ「洞爺湖」でもない、ただの木刀（新八のおさがり）である。しかしだからと侮ることもできまい、木刀であっても十分ひとを殺傷し得る武器になる。おまけに使い手が坂田銀時とあれば。

「しろオオオオオオオッ！！」

「ぐほオオッ？！」

怒声と共に野球の打者よろしくフルスイングされた木刀はたがわずあやめの腹をとらえた。女としてはちよつとどころじゃなくアレな悲鳴をあげた彼女はそのまま星になりそうな勢いで宙を舞い、べしやりと顔面で着地する。それを冷え冷えとした瞳で見下ろす銀時はまったく神樂の見覚えのある銀時であった。具体的に云うと沖田と共に土方をおちよくるときとかさっちゃんをあしらうときとかによく見覚えのある彼であった。

「あんまり気持ちワリーこと抜かしてんじゃないよこのアマ。いい加減にしねーとマジで屠殺めんぞ雌豚」

吐き捨てられた罵声にしかしあやめはうつとりとそれでこそ銀さんだわ、と云い残してことくれたように地に伏せた。

で、なんだったんだアレ。歩きながらそう訪ねる銀時はあきらかに万事屋を出る前に比べげっそりとしていた。ちなみに恍惚とした表情で気絶したあやめはそのまま放置プレイをかまされている。死にはしないだろうから構わないだろう、たぶん。

「さっちゃんアル。銀ちゃんのストーカーヨ」

「元御庭番のくノーで、現始末屋やってるひとです」

「ド近眼で眼鏡がないと明日も見えない眼鏡っ娘ネ」

「裸眼だと普通に銀さんと定春間違えるくらい目が悪いみたいです
ね」

「……………どんな女だよ」

頭痛と歯痛と腹痛がいつぺんにきたような顔をする銀時に、神楽はこんなんでヘタレてたらこのかぶき町じゃあ生きてけないアルよ銀ちゃんとにんまり笑う。

「さっちゃんなんて序の口アル。このかぶき町がどんだけキャラの宝庫か、かぶき町の女王みずからが教えてやるヨ！」

「……………。なんか、聞きたくないなー、俺……」

「諦めてください、銀さん。結構自業自得っていうか、類友です。ちなみに銀さんが類で」

「…マジでか」

心底疲れ果てた顔の少年に神楽はくすくすと笑った。そう、教えてあげる。登勢をして「江戸中に根を張っている」と云わしめた貴方にはたくさん友人がいることを。笑いついでに銀時の後ろに回りその背を押して、神楽は走り出した。うお、こぼれた声に咎める色は混じっていない。姐御が待つてるアル早く行くヨ、ちょ、押すな押すな、はいはいじゃあ行きましようか。こどもたちはそうして昼の繁華街を駆けてゆく。

大丈夫？瞳が薔薇色だよ

ところで新八さえもさっちゃんの心配をしていないことに気づいて軽く同情したけれど、彼女ならそれこそが快感なのだろうから、

まあいいか。

* 0 0 8 * 大丈夫？腫が薔薇色だよ（後書き）

あとがきっぽいもの

万事屋の店内にて、男と少女が並んで座っていた。

「はいこんにちは、本編にまったく出番のない銀さんです。本気で出番がなさそうっぽいんでこんなところにまでやってきましたーハイ拍手ー」

「本編にも出番はあるけど銀ちゃん一人じゃグダグダになりそうなのでやってきました神楽アルヨ」

「あ、なにお前も来たの」

「だって銀ちゃんだけじゃ心配アル」

「・・・そーですか。新八は？」

「買い物行ったネ。今日大江戸マート特売日だって張り切ってたヨ」

「あつそ。つーかさ、やー、なんてゆーかア、アレだね、ヤンチャだった頃の自分を今の知り合いに見られるとか、大分恥ずかしいよね。あん時や俺も若かったからさア、結構とんがってたっていうか、ギザギザハートの子守唄っていうか。なんてーの、盗んだバイクで走り出したいお年頃だったワケですよ。こう、格好つけてみたい時代ってあるじゃん？アレよアレ。わかる？」

「心配しなくても銀ちゃん今でも結構恥ずかしいネ。良い年こいてジャンプ毎週買ってる時点で痛いアル」

「いんだよ心はいつでも少年だから」

「少年っていうか中二アル」

「え、俺そんな一番ヤベー時期で止まってんの？マジで？」

「はい慢性中二病を患ってるマダオは無視して本題いくアルヨ」

「おい、コラ神楽？怒るよ？」

「それじゃお便りコーナーいくアルー」

「無視かよオイ！」

「えーと作者が溜めに溜めまくってた感想・評価・質問・リクエストなんかの返信アル。ちなみに作者はこんなかんじのあとがきを書きたいがためにいちいち返信して感謝の言葉を云いたいのを我慢してたアホネ」

「あー。某掲示板みてーなアレをしたかったんだな。そのために返信しなかったって、本当にアホだな。えー、感想くれたひと、お待たせしました。マジですんません、作者がアホで」

「てゆーか、ここで名前出していいアルか？」

「ペンネームだし良いんじゃないやね？文句が来たら即行削除する方向でいとけいとけ」

「ルージャ！そんなじゃあひとりずついくアルヨー」

「えー、まずは「シノ」さん。こんな駄文に面白そうなんて云っていただき有難うございます。えー、そうですねー、白夜叉銀さんのカルチャーショックは大分イイカンジに本人の脳みそ痛めつけてます。本編とちよつと違う風に見えるのは、やっぱり十年という年月は人格形成には結構な影響を与えると作者は思っているからで、そこらへんのビフォーアフターの違いもだせていけたらなと考えてます。多分。んで、万事屋銀さんがどこに行っちゃったかってエのは、最後の最後あたりで出て来・・・のか？・・・えー、気長にお待ちください。ツラとエリザベスももう少しあとに出て来る予定ですー」

「ありがとアルヨー。じゃー次、「紗穂」さん。結構毎回更新するたび感想くれてどーもネ。作者もそれなりに頑張って更新してるみたいだから、適当になまあったかく見ててやるヨロシ。これからもよろしくアル。それから真選組の連中出してくれてコトだったけど、どうだったヨ？ゴリラとジミーはもうちよつと待ってくれって

ことアル・・・げ、アイツらまた出てくんのかヨ。あのサド王子も？」

「そりゃ出てくんじゃね？お前とあいつが仲良く喧嘩してんのが好きだって云ってたぞ作者の野郎。・・・えーと次な、「さとみ」さん。この人も結構常連だな。こんなアホ話にハマったなんて云ってくれて有難うございます。作者もできる限りでなんとか仕上げて更新していきたいって思ってるみたいなんで、亀でも見捨てずにつきあってやってください。基本、作者遅筆だから。亀つつかナメケモノつつか、もうナメケジもいいとこだから。そんな人間にしては割かし早く更新できてんのはもう、奇跡以外のなにものでもないから。まあマイペースもいいとこだけど、とりあえず完結させようって気はあるみてエだから、これからヨロシクね」

「よろしくヨー。次、「暁生」さん。続きが早く読みたいなんて云ってくれてありがとアル。面白いて云ってもらえるのが原動力だって、感想が来るたび作者が気持ちの悪い顔でパソコンやらケータイやら見詰めてにへにへしてるアル。これからもこんな駄文でいいんなら読んでやってくれヨ」

「どーもでしたー。えー次。「次郎」さん、感想有難うございます。白夜叉銀さんはキャラの濃すぎる連中相手に日々ビビったりツッコんだりしながら頑張って生きています。結構必死です。あとヘドロは7話をお読み頂けたらわかりのとおり、めっちゃビビってます。恐いです。アレは恐いです。何が恐いって、顔はまあ勿論ですが、茶吉尼が自分の家の隣で花屋やってるって事実がめっちゃ恐いです。そのあたりまた後で触れるかも知れません。ネタ提供ありがとうございます。またお願いします」

「次ネ、「*白夜叉*」さん・・・ゴメンヨパソコンからだとな前ちゃんと表記できなかったネ。えーと、めっちゃ凄いとかが早く次が読みたいとか、ありがとネ。作者パソコンの前で敬礼して了解しましたとかほざいてたアル。今のところ結構必死で早めにあげてるけど基本アホだから更新頻度遅くなるかもしれないアル。気長に付き合

つてやるヨロシ。また次も読んでネ。ありがとヨー」

「そんじゃ次ー、」NANACO「さん。このひと「パラレルワールド」に生きる君へ」のほうにも感想送ってくれてるな。どーもありがとうございます。作者の作品が大好きなんて云ってくれて、あの野郎布団の上転げまわってたからな。気持ち悪かった……。いや、感想はホント感謝なんだけど。その度気持ち悪イんだよなあいつ。

えーと、銀さん視点の話もそのうち書きます。その際にはぜひお付き合ってください」

「次ヨ！「泉ススム」さん、めちやくちや面白いとか最高の褒め言葉ネ。こんなんにハマってくれるっーか読んでくれる奇特な人が何人いるかってハナシだったから本当にアリガトヨ」

「どーもね。はい次、「たば」さん。感想どうもありがとうございます。つていうか作者、たばさんからの感想読んで、「あ、心温まる話だったんだ、コレ」とか呟いてやがったからね。本人ほのぼのホームコメディ（ところによりギャグ）書いてるつもりだったらしいです。アホだ……。神楽目線の話は本人も気に入ってたみたいです。擬似とはいえ家族がまたはじまるっー話だったんで、他より丁寧っーか、なかんじで書こうとしてっからまあ長くなっちゃまったんだけど。ツラはまた後日に出て来る予定なんで、気長に待っててください」

「これで最後ネ！「輝」さん、なんか思いつきり褒めちぎられて作者が気持ち悪いことになってたアル。もともとキシヨイけど。ともかくありがとヨ。もっと満足してもらえような話書かせるからこれから読んでネ。あと銀ちゃんが好きって云ってたけど、万事屋銀ちゃんがつてことだったら銀ちゃん多分出てこないアル。出てきても最後のほうにほんのちょびつとネ。こんなアホ企画で勘弁してやってくれとは云わないけどでも出てこないアル」

「……え、マジで俺このまんま出番ないの？」

「ないアル」

「……や、でも俺主役だよ？主役が出番ないって、そんな」

「ないアル。本紙でも何度かあつたネ」

「・・・・・・え、・・・・え？マジで？マジでないの？」

「ないアル」

「・・・・・・。ええええええ？！」

「そんじやーまたネー。次の話で会いマシヨウー。銀ちゃんはいないけどな」

「えええ？！マジで？！マジなのか？！マジで俺の出番ないのオオオ？！」

「さよならヨー」

「えええええええええ？！」

声がだんだんフェードアウトしてゆき、暗転。

*** 0 0 9 *** **しかしこれが人類の繁栄上避けて通れない男女関係（前書き）**

お待たせしました、第九話をお届けします。いつにも増してグダグダですので心してお読みください。そして感想・評価を下さった皆様、ありがとうございます。とうとうPV10000・ユニーク2000を突破しました。まさかこんなに目を通してくださる方々がおられるとは思っていませんでした。これから頑張りたいと思っていますのでよろしく願います。

ところで頂いたリクエストなのですが、最近やけに「高杉を出して」というものが多いです。個人的にはあれだけ喧嘩別れした彼がそうそう江戸まで出張ってくるもんかなあと出そうか出すまいか悩んでいます。そこで質問ですが、高杉は出したほうがいいか出さないほうがいいか、皆さんの意見を聞いてみたいです。よろしければYESかNOだけで結構ですので、感想のほうに書き込んでいただけたらと思います。ついでに既出キャラでもこいつとこんな絡みを出してほしいなどリクエストありましたらお願いします。

前書きで長々と失礼いたしました。それでは本編をお楽しみください。

* 0 0 9 * しかしこれが人類の繁栄上避けて通れない男女関係

「あら本当。銀さん若返っちゃってるのね」

いらつしゃいと玄関で三人を出迎えた女は普段と違う銀時を見ても驚いた様子はまったく見せずに、寧ろ楽しそうに笑ってみせた。新ちゃんが電話でおかしなことを云うものだからどうしたのかと思っていたのだけれど。穏やかに微笑む彼女の顔立ちは、なるほどここ新八と似通ったところがある。

「お前のねーちゃん？　へー」

なかなか別嬪じゃねーの、揶揄するようにやりと笑う銀時に、新八はハアだのいやあだの訳の解らないことをもごもごと呟く。銀時はその反応に首を捻ったが、身内が褒められて照れくさかったかそこらへんだらうと解釈し、それ以上を云わなかった。

「姐御こんにちは！」

「はいこんにちは、いらつしゃい神楽ちゃん。上がって待っていて頂戴ね、貰い物の羊羹があるのよ。今切ってきてあげるわね」

「キャツホオオオオイー！」

銀時の後ろからひよつこりと顔を出し元気よく挨拶した神楽は彼女の言葉に歓声をあげた。勝手知ったる他人の家と云わんばかりに沓を脱ぎ捨て足音高く廊下を走る。神楽ちゃん履物ちゃんと揃えなきゃと新八が彼女の背に声をかけたが当然のようにはしゃぐ彼女から返事は返らなかった。まったくもオ、新八は丁寧に神楽の下足を直しみずからもきちんとそろえて脱いで小走りに少女の後を追う。微かに苦笑してそれを眺めていた銀時に女が銀さんもどうぞ上がってくださいなと手振りで促した。

「銀さんに変に遠慮なんかされても困っちゃうわ」

「そんじゃ、遠慮なく」

お邪魔しますと頭を下げる少年に女はくすくす笑い、あばら家で

すがと真面目ぶって辞儀を返した。

ふわりと香ばしい香りが座敷を充たす。供された玄米茶と芋羊羹に舌鼓を打ちながら、銀時は新八が語るおのれの事情（これまでのあらまし）を他人事のように聞き流していた。なにせ少しでも気を抜こうものなら隣に座っている少女におのれの取り分をかつさらわれかねないのである。そうそうに分厚く切り分けてもらった菓子をたிரげた神楽は獲物を狩る肉食獣の眼で銀時の羊羹を見つめていた。これはとつと腹に納めたが勝ちと銀時は大口を開けて最後の一切れを口に入れる。途端に項垂れる少女はできる限り無視の方向で。

そうすると必然志村姉弟の方に顔が向く。妙は弟の荒唐無稽な話を否定も茶化しもせずに聞いていたが、銀時が恐らく十年ほど過去から来たのかもしれないと聞くと流石に少しばかり目を見張った。

「まあ、それじゃあ驚いたんじゃないありませんか。ここ数年の江戸の変わりようは凄かったから」

「まあなあ。まるで浦島太郎にでもなつたみてエな気分だ」

氣遣わしげな言葉にそう返して肩をすくめる。浦島太郎と口にした瞬間、場が微妙な空気になったがどうせ碌なことではないだろうから突っ込まない。ええ突っ込みませんとも。

氣を取り直すように妙がお茶の御変わりはどうですかと訊ねたので、銀時は礼を云って湯飲みを差し出した。それを受け取り新しい茶を注ぐ妙の楚々とした立ち居振る舞いは、確かに武家の娘の名に恥じぬ。器量好しの上に気性もよさそうであるし、これでは嫁の貰い手もさぞ多かるうとからかい混じりにそう云ってやれば、妙はそんなことないんですよと苦笑する。ちなみにこの時、実の弟が非常に微妙な顔をしていたのを銀時は見逃した。

「そうヨ、姐御結構モテるアル。姐御が仕事してるお店じゃ姐御目当てに来る客だっているネ」

「まあ神楽ちゃん、そんなこと本当にないんだってば」

その微笑ましいやりとりはまるで姉妹のようである。姐御と呼ん

でまとわりついていいるところを見ると、神楽も随分とこの女を慕っているようだ。しかし彼女は「アネゴ」というよりはもつと上品な印象であるのだが、この呼び名にはどんな謂れがあるのだろうか。そんなことを思いつつ銀時は茶をすすっていたが、ふと目線をあげると妙の笑い顔が目に入った。何が面白いのか銀時をじつと見詰めてにこにこしている。

「……なんだイおねーさん。俺の顔そんなに面白い？」

ふざけ半分にそう問えば、銀さんがなんだか可愛くってなどと本気が冗談でわからぬ調子で云つてのけられ、銀時は丁度飲み下そうとしていた茶を器官のほうへ入れてしまつて盛大に咽た。

大の男に可愛いつて。げほげほと苦しそうに咳をしながら銀時は文句をつけたが、でも私の知ってる銀さんに比べて随分と可愛いらしいんだものと妙は悪びれもしない。

「だって私の知ってる銀さんって、変に大人ぶったりオツサン臭かったりひねくれてたり馬鹿な真似ばかりしたりで、可愛げってものが全然ないんですもの。そこいくと貴方は若い分可愛いみたいだわ」

いやでもそれ、いい年こいた野郎が可愛かったら逆にイヤだろ。ひりつく咽喉に涙目になりながらなんとか反論すれば、あらそうかしらと妙は頬に手をやりそう呟く。それがあまりにも大真面目で、銀時は咄嗟に返す言葉を思いつかなかった。絶句する少年の隣からさらりと神楽が口を挟む。

「さつきさっちゃんに会ったけど、抱きつかれてテンパってたアルよこの性少年」

誤字に非ず。

「まあ。ほら、やっぱり可愛いじゃない」

「いや知らねえ女にいきなり抱きつかれたらビビるだろ普通?!」

「そうやって反応してくれるのが可愛いのよ」

おのれと歳の変わらぬ女に可愛いなどと連呼されて喜ぶ趣味はない。なんとか撤回させようと口を開いた銀時は、声を発する前にそ

の機会を失った。

「こんなヤツよりも俺のほうが可愛いですよお妙さアアアアア
！！」

「うわアツ?!」

作り付けの茶箆筥からゆうと何の前触れもなく出てきた男に驚いたのはどうやら銀時だけのようであった。こどもたちはまたかとはかりに半眼で闖入者を眺めている。妙はといえば浮かべた笑みをいつそう深くしたが、その際、ぶちつと何かがブチ切れた音が聞こえたのは幻聴ではない。

「…何さらしとんじゃこのゴリラアアアアアア!!」
「げぶらアアツツ?!」

瞬間的に般若もかくやの形相となった妙は、怒声と共に無駄に綺麗なシャイニングウイザードをきめた。

卓袱台がひっくり返り、茶碗が宙を舞う。ぐしゃつという人間の頭部が出すべきでない擬音と共に畳に沈んだ男に妙は容赦も遠慮もなくさらに追い打つ。オラオラとチンピラのようにマウントポジションで男の顔面をフルボッコする彼女に先程までの娘らしさは欠片もない。

目の前で展開する残虐劇に銀時は顔をひきつらせた。もしかしたら少しくらい蒼冷めていたかもしれない。テレビや雑誌であれば確実にモザイク処理されそうな物体に変化しつつある元・人間とそう加工している女にドン引きつつこっそりと新八に問いかける。

「…何、オメーの姉ちゃん、ゴリラにでも育てられたワケ?」

「…いえ、父上は普通に武士でした。母上も一般人です」

「…じゃああれはナニユエ?」

「…本人の資質じゃないですか?」

ああ、なるほど。先程の新八の反応の意味に思い至り、銀時はぬるい表情で頷いた。そして確かにこれは神楽が姐御と呼ばびたくなる

のも頷ける。たいした女傑振りだ。ちなみに大分控えめな表現である。

妙はもうぴくりともしなくなった男の頭をぐりぐりと丁寧に踏み蹴りながら慈母のような表情で微笑みかける。

「ウフフ近藤さんったらこんなところで何をしていたのかしら？
っていつからそこにいやがったコノヤロー」

女の笑顔は時として怒りの表情よりも恐ろしい。銀時は妙の背後に三面九手の鬼を見た。

……ていうか、アレ生きてんの。あのくらいで死ぬような上等な身体構造してないアルあのゴリラ。つかアレ、過剰防衛っていうんじゃないね。訴えられることはないでしょうからいいんじゃないですか。こどもたちはこそこそと囁きあっていたが（触らぬ神にんたとやら、だ）、折檻というにはかなり無理のある暴力行為に及んでいた妙がふいに振り向き、三人にもものっそいイイ笑顔を向けたので銀時は思わず慄いた。妙はそんな少年の態度に頓着せずに、先程とまったく変わらぬ清楚な微笑みを浮かべる。

「まったく、近藤さんの所為で銀さんたちが何しに來たのか忘れちゃったわね。ちょっと待っててくださいね銀さん、今着物取つてきますから」

「……あー、お願いします」

笑みを返し奥の間へ消えた妙を見送り、銀時は新八に顔を向ける。
「……奉行所かどつか相談行ったほうがいいんじゃない？ ストーカー被害受けてますって」

お互いのためにも、という言葉は飲み込んだ。新八はごくまっとうな銀時の言葉にしかし苦笑する。

「いえ、あの人自身が警察の偉いさんなんですよ」

「……え？ あのストーカー警察なの？！」

大小を差していたのだからそれは武士であろうとは思ったが、まさか役人とは。流石に啞然とする銀時に新八はそうですよとごく軽く肯定した。

「昨日会ったふたりがいたでしょう。土方さん、銀さんと喧嘩してたのが副長さんと、神楽ちゃんと喧嘩してた沖田さんが一番隊の隊長さんです」

「……世も末だなアオイ……」

僕の知ってる銀さんもおんなじこと云ってましたよ。呆然と、あるいは感嘆したような呟きに少年はさらりと返して、お茶零れちゃいましたね新しいの持ってきますと畳と仲良くしている男をひよいとまたぎ、転がっている茶碗を回収して勝手へ向かった。大概こなれているふうな言動に、ああこれもまた日常風景なのかと悟る。ならば相手にしないほうがいいだろうとも。そう思った次の瞬間、唐突に近場で聞こえた男の朗らかな声に銀時はのけぞった。

「しかしお妙さんの恥ずかしがりにも困ったものだなあ。いいやそういう初々しいところもまた素晴らしいんだが！」

つい今までただの屍であった男がなんでもなかったような（しかし3倍ほどには面積が膨れ上がった）顔で安座している。しかも台詞を聞くにあの仕置きがまったく堪えていない。アレ復活した、そう呟いた少女は胡乱げに男をねめつけるが、彼は快活に笑うだけである。

「ていうかいつの間にレギュラーみたいな顔して座ってるアルかゴリラ」

「フーかマジで人類かよアンタ」

ギャグ補正がかかっているといつても復活が早過ぎる。本当に人間なのかを疑う銀時に、彼は未だ顔を愛と勇気しか友達のいないヒーローの如く腫らせたままはじめて気づきましたとばかりにきょとんとして銀時を見た。

「あれ銀時。なんだ、お前なんかよく見たら……アレだ、いつもどっか違ってないか？」

こいつとも俺は知り合いなのかよ。いい加減うんざりしてきた銀時の横で、新しい茶と茶菓子を持って戻ってきた新八が眼鏡の奥の瞳をぱちりと瞬いて首を傾げる。

「あれ？ 近藤さん、土方さんや沖田さんから聞いてないんですか？」

土方ならば些事であるとはいえこんな異常事態を報告しない訳がないし、沖田であるならばこのような面白事を云い触らさないはずがない。どちらにしろ彼らの総大将であるこの男の耳に入らぬ道理がないのである。近藤はいいや聞いていないなと首を振る。

「俺は昨日からお妙さんの護衛で忙しかったから屯所には戻っていないんだ。なんせ昨夜からずっとお妙さんの傍に控えていたからな！」

そして堂々ストーカーしてました宣言。

大丈夫なのかこの国とか。銀時が突っ込むより先に、丁度着物を手に戻ってきた妙がその台詞に再びキレる。穏やかな笑みを憤怒の表情に切り替えた彼女はいつそ感心するほど美しくドロップキックをブチかました。

「デメエはよオ、ストーカーなんぞしてる暇があったら仕事しろやこの税金泥棒オオオオオ！！」

「ぎゃアアアア——ッッ？！」

あーあ。またしても始まった惨劇に万事屋一同は溜め息する。なんか驚きが過ぎてもう飽きてきた。そんな銀時の胸の内を読んだのか、はたまた偶然同じような心境であったのか、神楽がつまらなさそうに頬杖でぼやく。

「オチがついたから今回はこのへんで終わらせていいんじゃないアルか」

「死にオチかよ。…いいのかな？ …いいか」

「つーか、アレに関わりたくねーわ俺」

視線をやった先にはR15の残虐シーンがリアルタイムでオンエア中である。

「ちよつ、お妙さ、その愛情表現はちよつと激しすぎ…！！」

「誰アレが愛情表現じゃボケエエエエエエエ！！」

犬に喰われても馬に蹴られても馬鹿らしい。こどもたちは怒声と

断末魔をBGMに、ハツ時の茶を楽しむことにした。

しかしこれが人類の繁栄上避けて通れない男女関係

とは云えこれ続けてたら、想いが届く前にこの男死ぬんじゃないかな
ろうか。

* 0 0 9 * しかしこれが人類の繁栄上避けて通れない男女関係（後書き）

というわけでストーカーと被害者の関係その2でした。個人的には近藤好きです。碌な扱いをしませんしする気もありますが大好きです。おそらく土方と同じベクトルでの「好き」なのかと。彼もまたそのうち書きたいなあ。そしてイジりたい。そう素で思ってしまう作者はSかMかで言えば、どちらかというトドSです（byB型の説明書）。

さて次回はミントンとカバディしか個性のない、割に結構黒かったりもする某監察が出てくるかもしれません。でもほら、なんせあのひと地味なんで、もしかしたら空気になる可能性もあるのですが。そんな彼を誰か応援してあげてください、作者は彼も大好きです。軍手の次くらいに。

それではまた次の話でお目にかかりましょう。

*** 010 * 同じ呼吸で生きるなら（前書き）**

こんにちは、アニメ原作で立て続けにやりかったことをされてしま
いちよっぴり悲しい銀猫ですいや確かにベタっちゃベタですけど。
確かに面白かったですけど。これ以上ソラチとネタ被らないように
とっととプロローグだけでものつけちまおうかとか不穏なことを考
えています。来週のジャンプが楽しみだ。

ところで前回アンケート解答・評価下さった皆様、ありがとうございます
した。今後の参考にさせていただきます。

実は今回も高杉に続いて要望の高い某長髪についてアンケートがあ
るのです。彼は出ることは確定なのですが、出るとしたら皆さんぶ
っちゃけ、ツラとツラ子とどっちがいいですか。お願いします。

そしてお待たせしました、第10話をお届けします。前回予告した
とおり、未だ表紙にもならない地味ーの登場です。どうぞお楽しみ
ください。

* 010 * 同じ呼吸で生きるなら

にぎやかな怒声と打撃音が閑静な住宅街に響くのを聞いて、山崎はビンゴ、と大して嬉しくもなさそうに呟いた。

土方より近藤を見つけて連れ帰って来いと命令を受けいつものようにこちらに足を運んだが、どうやらここで正解である。恒道館道場と看板のかかった門をくぐり縁側に回るとすぐに庭に打ち捨てられている見慣れた男を発見し、毎度のことながらの溜め息を漏らした。それで気づいたか、縁側で手を払っていた妙があら山崎さんご苦労様と笑顔を向ける。山崎もへらりと笑い返し頭を下げた。

「すいません姐さん、ウチの局長^{バカ}回収しに来ました」

いいえおつとめご苦労様ですとやわらかに笑む妙は、とてものこと大の男を殴り飛ばす女丈夫には見えぬ。

「どうぞあがつていつて下さいな。今お茶お持ちしますね」

「すみません、お邪魔します」

玄関に回り下足を揃えて廊下に行くと、丁度新八と鉢合った。

あ、山崎さんこんにちは。てらいなく笑いかけられる。

「近藤さんのお迎えですか？ご苦労様です」

「こんにちは新八君。悪いね、局長が毎度毎度」

「いいえ。それはこちらこそなんです」

姉上のエルボーがちよつとイトコロに入っちゃったみたいなん
で流石に今回は再生するのに少し時間がかかると思います、申し訳
なさそうに笑う新八に山崎も苦笑を返す。この少年もまったくお人
好しである。彼が謝らなければならぬ筋合いなどどこにもなく、彼
の姉にしてもものびているストーカーの目が覚めるまでその迎えをも
てなしてやる義理もないだろう。結局のところこの姉弟は迷惑極ま
らないと云いつつもストーカーを受け入れてしまっているのである。
それがこの姉弟の人の良さ故かストーカーの人柄故かはわからない

が。なんとはなしに両方であるのだろうなと思いつつ新八に続き座敷に入ると、正面に座っていた色鮮やかな娘が山崎の姿をみとめ、あ、と声を上げた。

「よオチンピラ警察24時。今日もゴリラの保護アルか？」

「あはは…」

可愛らしい外見に似合わぬ毒舌は今日も絶好調のようである。開口一番の辛口トークに乾いた笑いを返した山崎は、ふと少女の隣に座る銀時を見てぱちぱちと瞬いた。

「あれ、ホントだ。なんか若いっすね旦那。沖田隊長と同じくらいかなあ」

沖田が楽しそうに吹聴していたアホ話を山崎は話半分に聞いていたのだが、どうやらかの奇譚はマジであつたらしい。土方よりもやや年上に見えた男は、今は少年の幼さが残る面持ちで山崎を見た。アンタは、問いかける銀時はいつもの死んだ魚の目ながらどこか胡散臭そうである。そういえば彼にしてみれば初対面なのだと遅ればせながら気がつき、すいません自己紹介もまだでしたと慌てて頭を下げる。

「はじめまして、俺山崎つていいいます。万事屋の旦那にはそれなりにお世話になることもありまして」

「…ふーん？」

小首を傾げた銀時は平生の感情の読めない顔でうん、と頷き片手をひらひらと振った。

「うんじゃあはじめましてジミー」

「ジミーってなんだよ山崎だつったでしょこのやりとり前にもやったよ畜生本当変わんねえなアンタ!!」

ほとんど条件反射の領域ですぱんと突っ込んでやれば、山崎の知る銀時とまったく変わらぬ無駄に人をおちよくった少年は、少々大袈裟に過ぎる山崎のリアクションにくつりとわずかに笑みをこぼした。大抵がやる気なさげなポーカークフェイスの彼らしからぬその表情がいささか新鮮で、物珍しさに見詰めてしまう。うわあやっぱり

旦那もこのくらいの年頃は歳相応のこどもだったんだなあ。軽く感心していると、いてて、軽く呻きながら近藤が縁側から上がったきた。

「お、復活したアル。死の呪文ザキが来たのに」

「ウチ復活の呪文ザオリクさんいないんで。大丈夫ですか局長？」

「おお、山崎か」

そこかしこから噴水のように流れ出る血潮を垂れ流しにしたまま近藤はよいせと座敷に座った。どうぞと新八に座布団を出され礼を云ってそれを受け取る。近藤はそうして一息つく、そんでなあ万事屋、何事もなかったかのように、登場シーンから暴行を受けるところまでばっちり目撃してしまいちよつと引き気味な少年に問いかけた。

「さつき聞きそびれたがどうした。なんか若返ってないかお前」

「若返ったつーか、俺らの知ってる旦那と昔の旦那が入替わったらしいですよ」

「え？ 何そうなの？」

銀時の代わりに山崎が答えると、近藤は訝しそくに首を捻る。

「ていうかなんだザキ、お前なんだってそんなこと知ってたんだ？」

「沖田さんが屯所で触れ回ってたんで」

なにやってんだあのひと。予想通りのことしやがってあのサド。半眼で呟いた新八と神楽から意図して視線を逸らす。いや本っ当、ウチの隊長がホントすんません。ごまかすように横から補足を入れられながら仔細を述べれば、近藤はふうむと難しげな顔をして顎を撫でた。

「…成る程なあ。しかしまた厄介なことになってるじゃないか。事態の原因に心当たりはあるのか？」

「いいや、さっぱりだな」

「ま、そうだろうな。流石にこんな非常識は俺も聞いたことがない」呆れたような近藤はしかし氣遣わしげな声音でお前も大変だなあと彼を労わった。厳つい面相の割に人の良い近藤に銀時も苦笑を返

す。そこへ急須と湯飲みをのせた盆を手にささげた妙が入ってきて、お話が弾んでいるようですわねと微笑んだ。

「そうそう山崎さん、ごめんなさいね、ちょっと今お茶菓子きらしてしまっただです。今プリンを作っているんですよ。冷やすのに少し時間がかかってしまいますから、ゆっくりしてらして下さいね」

途端、約3名分の時が止まった。一拍後解凍した山崎は声が多少裏返っているのを自覚しながら必死に遠慮する。ていうか遠慮しなかったらそれこそ必ず死ぬ。アレの凄まじさは身をもって知っている。触れただけで目が焼けたのだ、食らえば文字通りの「必死」である。

「いや姐さんお構いなく！！　ちょ、もう帰りますんで！！だからもうお構いなく！！」

「あら、ちよっとくらい良いじゃありませんか。ああ、他の皆さんの分もちやんとありますから、遠慮なさらないで」

恐ろしい宣言に今度は新八と神楽が両側から妙の腕を取った。彼らの顔色も大概蒼い。

「あああ姉上、それ僕が！　僕がやりますから！　っていうかやらせてくださいお願いします！！」

「姐御私も手伝うアル！　姐御は総大将として監督して欲しいヨ！！」

妙はふたりの剣幕に小首を傾げたが、ハイハイと困った子供をあやすように頷く。

「あらそオ？　じゃあ本当に作ってもらっちゃおうかしら」

「はい任せてください！　だから姉上は何にもしなくていいですからね！！」

「この万事屋グラさんに任せるアル！　だから姐御は後ろで見守ってるヨロシ！！」

「はいはい、じゃあお願いねふたりとも」

「お任せくださいお妙さん！　この俺が必ずや世界一美味いプリンを作り上げてみせます！！」

「あらやだ近藤さんにはひとつことも何つにも云っていませんよ？」
じゃあちよつと失礼しますと勝手へ向かう妙に近藤と神楽が続く。
最後尾でちらと振り返った新八に山崎はぐつと親指を突き上げた。
グッジョブ。新八も真剣な顔で親指を突き返し、ぱたぱたと軽い足音を立てながら先に行った彼らを追った。賑やかな声に新八が加わり、さらに騒がしいどつき漫才が繰り広げられる。アイツらなんであんな必死になってたの。ひとり事情がわからず疑問符を散らす銀時に山崎は知らぬが仏という諺を見た。旦那とウチとこの局長、以前姐さんの卵焼き食べて記憶喪失になったことあるんですよ。マジで？！ うわあと冷や汗混じりに呟いて新八らが行った先を向いた銀時はそちらに向かってサムズアップした。グッジョブ。気持ちはとてもよくわかる。

途端に静かになった座敷で、山崎は仲の良い彼らのやりとりを聞くともなしに聞いている銀時を、そうと悟られぬようさりげなく監察した。苦笑する彼の横顔は、意外とあどけない幼さが目立つ。歳の割りにはやや小柄であるものの体格はしっかりしており、しかし頸筋や肩幅、頬から顎にかけての線を見るにそれは未だ少年の域を出ない。

そう、歳若い少年なのである。ややもすればこどもとさえ呼べる、しろい少年。しかし彼は紛うことなきさむらいである。沖田の言を信じれば（血塗れの戦装束に、土方をも圧倒する鬼気を持つ）、彼はこの歳で相当な修羅場を潜ってきたつわものである。国の行く末を憂い来し方を重んじ空の彼方より来訪した脅威と戦ったものたち。

——そして、山崎の属する真選組はそんな攘夷浪士共を狩るがお役目である。

山崎自身、以前銀時を探った折彼はシロと判断した。それは過去においてどうこうということではなく、今現在の銀時が攘夷活動に携わっているかということでの調査であり、結果、答えは否であった。

では、いまは？

（十中八九、このひとは攘夷戦争に参加していた）

それはおそらく間違いない。見え隠れする桂との繋がりも当時共に戦ったことによるものだろう。それはいい。過去いくさに参戦していたことはそれほどたいした問題ではない。今現在攘夷に加担しているのだから、無駄に過去をほじくろうとは思わない。そして彼は攘夷には関係ない。…彼がこどもたちと暮らしていることが隠れ蓑であるとは思わないし、思えないし、思いたくない。だからそれはいいのだ。

問題は、今現在攘夷戦争に参加しているこの少年が、かつての戦友と共にその刃を握る可能性があるかどうかである。好感や親しみさえ覚えている人物を疑う自分に嫌気もさすが、しかしそれがおのれのお役目なのだと云い聞かせる。割り切ることはできなかったが（監察なんてそんなもんだろうけどさ）

まったくもって嫌な仕事である。知り合いでさえ——同じ釜の飯を食った仲間ですえ疑わなくてはならぬ。けれどそれが山崎の為すべきにして為さねばならぬ仕事だった。それに膿むことなど赦されない。

（見定めなくてはならない）

このしろい少年が、真選組の敵か否かを。

ふいに少年の赤い瞳が山崎を捉え、ぱつちりと目が合った。やべつと内心焦ったが今更目を逸らすのも不自然極まりなく、日本民族固有技必殺ジャパニーズスマイルでごまかそうとしたとき、それを赦さぬとばかりに銀時がついと合わせたままの瞳を細めた。

その瞳のあまりの紅さに山崎は思わず息を呑む。その眼。ある意味銀時のトレードマークとも云える、死んだような濁った瞳。

死んだ魚の目？

違う。あれは、

虚^{ウソ}

だ。

理解した瞬間、ざつと血の気が下がる音を聞いた。…そうだ、おのれが深淵を覗くとき、深淵とてこちらを覗いている——！

ぞつと背筋を何かが這い登り、山崎はおのれの心の臓がどくどくと煩いほどに悲鳴を上げるのを聞いていた。これは、この目の前にいるいきものは、山崎の知る坂田銀時などでは決してない。なんだこの得体の知れぬ化け物を前にしたような感覚は。とらえられれば逃げられぬ。仮にも刀を帯びる役職に就いている山崎である、刃を目の前に突きつけられたとてこんなにも恐怖することはないだろう。…そうであるというのに、この戦慄はどういうことだ。

山崎の知る普段の銀時は雲である。風であり水である。とらえどころがなく流れるままに、けれどどこかしなやかに強い、時折はつとするほどに美しい姿を見せるもの。

しかし今の銀時は月である。冴え冴えとした凍れる月。——

否、そのようにやさしいものではない。雲でも風でも水でも月でもない少年は、ひたりと山崎に視線を合わせたままである。倭人にしては色素の薄い沖田よりも更に赤みの強いその瞳の、あまりの空虚抜き身のやいばのように苛烈で危ういしらかなひかり。唐突に山崎はこの少年を形容するに相応しい単語を思いつき、その瞬間腹の底から痛いほどに冷えた何かがぞわりと膚を伝い身体中に廻ってゆく感覚を覚え、それをどこか醒めた一部分で他人事のように感じていた。

（彼は、これは、——鬼だ）

山崎はおのれの直感というものを信じている。監察という忍び働きにも似た仕事を生業とする彼にとって、それはれっきとした武器

である。その直感が云っているのだ、これは鬼であるのだと。攘夷志士だとか浪人だとか、もしか人斬りでさえない。そんなものではないのだ、これは。このいきものを見定める？　なんて傲慢。狗だ狼だ呼ばれたところで所詮ひとの身でしかない山崎に、このいきものを押し量ることなどできるものか。ましてやそのこころ内など、理解できようはずもなし。

石のように重い身体は身じろぎすらできず、それ以前に彼の瞳が蛇の髪を持つ魔女のそのように山崎を縛り付ける。けれど、ああけれど、何よりも恐ろしいことには、彼はまったく殺気の類を発してはいないのだ。瞳をやや細めて山崎を見詰めている、ただそれだけのことで彼は山崎を心胆寒からしめている。

山崎が相対するは坂田銀時ではなしに一匹の夜叉。その重圧にただ気圧されるばかりの山崎が喘ぐような呼吸を漏らした時、――
――ふつと彼が息を吐いた。

それと同時に山崎を縛り付けていた空気はまるで白昼夢であったかのように掻き消える。

「……少しだけ、話は聞いた」

「……………ふへ？」

唐突に変わった空気についていけず間抜けに目をぱちくりさせる山崎に苦笑して、しろい少年は瞳を細める。今度はやわらかく。

「安心しな兄ちゃん。アイツらに迷惑かけるようなこたアしねエからよ」

あいつら。それはまるで家族のようなふたりのこどもたちのことだろうか。山崎はゆるゆると頬がゆるむのを自覚する。それは、その言葉の意味するところは、山崎が心配するような事態にはならないという。

「……はい」

そうしてくれると助かります。屈託なく笑う山崎に銀時は意地が悪く笑ってみせる。じろじろ値踏みしてた割にやあ簡単に信じんな。ああやっぱバレてたよと笑いながらも表情筋がひきつっている

のを自覚した。この場合はおのれが甘いのか銀時が鋭すぎるのか、恐らく後者だと思いたい。自分のプライドと副長に怒られないために。

「だって、さつきも云ったじゃないですか。万事屋の旦那にはお世話になることもあるって。前にね、組織内で内輪もめというか、そんなんがあつて。旦那がそれに手エ貸してくれたんです。恩人なんですよ、ほんと。旦那はそんな風に云われるの嫌そうだしウチの上司も絶対世話になったなんて認めませんけどね。でもだから、そんなお人を逮捕するとか、そんなのは俺らもちよつと嫌ですから」それに旦那とやりあつても勝てる気しませんからねとダメ押しすれば銀時はまるで少年のように快活に笑った。

——彼は鬼であるのだと、笑いあいながら山崎はそう思う。鬼というにはこの少年の磨いだ刃にも似たかがやきはあまりにもうつくしいが、それはきつとなればこそ。ひとでなしが持つうつくしさである。あまねく焼き尽くす大火に、古くは竜と考えられた雷光に、すべてを呑み込む大水に、人では決して防ぎようもない災害、しかしどうしようもなくひとを惹きつけるそれらにどこか似た、彼は疑いようもなく鬼神である。

それでも彼は坂田銀時という名のひとである。なんのかのとさんざ悪態を吐きつつも、義理人情に厚くお人好しな万事屋の店主である。

（なんだ、それだけだ）

ああそうだ、この少年のみならず、万事屋の銀時にも夜叉は息づいている。死んだ魚のような目でも、一瞬だけ煌いてみせる瞳でもないときの、ぎらぎらとした獣めいたあの瞳。あれがきつと銀時に潜む夜叉である。けれどそれがいったいどうした。あのひとはあんなにも自由に朗らかに生きているじゃあないか。正直な話、先程垣間見た鬼を恐れぬ自信はないのだが、なんのこともない。どうせ山崎の周囲とて、剣に魅入られた鬼ばかりである。真選組などまったき鬼の棲処。ならばなんの問題があろう。

坂田銀時の攘夷活動に関わる疑惑について「事実なし」と脳内メモに油性ペンで書き付けた山崎は、台所から響いてくる爆発音と打撃音、それから賑やかなやりとりが一段落つくまで、少年と他愛ない雑談に興じることにした。いつもと同じように。

同じ呼吸で生きるなら

鬼か人かなど些細な問題だ。こんなふうにアホなやりとりとか喧嘩したりとかできるんなら、ひとまずはそれで善しとしようじゃないか。

* 010 * 同じ呼吸で生きるなら（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます。さて少しばかり補足を。・・・本当は作中で説明できれば言いのですが生憎とそんな文才を持ち合わせてはおりません。なのでここで失礼を。

さてなんか今回意思と反して似非シリアスになってしまいました。ザキがえらい銀さんにビビってましたが、彼は今回新八や土方に向けたように殺気とか怒気とかそういう分かりやすいものをザキに対してぶつけてません。観察されてるのはわかってましたが「なんだコイツ」くらいなモンです。それも仕方ないとは思ってましたし、彼がザキを敵と思う理由はないのです。新八の時は混乱していたせいもあり、土方の時は洋装で刀を帯びる彼に思うところがあつたからです。

だからこれはきつとザキが鋭すぎるということなんだと思います。鋭いというか、匂いに敏感というか、なんか本能で本質をぱっと見抜いてしまうみたい。数学の問題で途中式は分からないけど答えだけぱっと頭に浮かんでくるみたい。飯にも土方直属の監察である彼なのですから、そんな直感めいたものも重要なのだというまあつまりは勝手な妄想なのですけどね！

さて長々と語ってしまいました。ここまでお読み頂きありがとうございます。また次話でお目にかかりましょう。

* 0 1 1 * 優しさの成れの果て（前書き）

こんにちは、意外と早く第11話をお届けできてびっくりしてる銀猫です。今回は少し短めで、ほとんど銀さんと姐御の会話に終始しています。同年くらいの男の子と女の子ってなんでか女の子のほうが大人だよねという話。それからアンケート回答下さった方々、ありがとうございます。もう少し皆さんの意見が聞きたいです。出て来るならばツラとツラ子のどちらが良いか。よろしければ答えのみで結構です。お答え頂ければ幸いです。前書きで長々と失礼いたしました。それでは本編をお楽しみください。

* 011 * 優しさの成れの果て

「じゃあな銀時、何かあったらいつでも云えよ。俺らのほうも何か判ったら連絡するから」

「それじゃあ旦那方、失礼します。お大事に」

めいめいそう云い置いて道場を辞した黒服の男たちは、その肩書きに似合う颯爽さで通りへ消えていった。

「幕臣の割にやあ、アイツら結構愉快な連中な」

それを見送り誰にもなくこぼしたしろい少年に、神楽がとんでもないと噛み付く。何甘いこと云ってるアルか銀ちゃん、騙されちゃ駄目ネ。

「違うアルアイツら敵ネ。決して相容れない不倶戴天の天敵アル。

私たちと奴らに共存の道はないネ。やって殺れアル」

「神楽ちゃん、あの人たち嫌いなのはわかるけど、なんにも知らない銀さんにそういう危険なこと吹き込むのやめようね」

憤然と物騒なことを口走る神楽とお義理のようにそれを嗜める新八に苦笑を漏らして、さアと妙は銀時に向き直る。

「ばたばたして忘れちゃってましたけど、銀さん、着物出してきましたよ。ちよつと着てみてもらえませんか？」

妙が差出した着物を彼は礼と共に受け取った。そういえば今日ここに寄った本題はこれだったつけとちよつぴり遠い眼差しで呟いた少年は、いかにもこの江戸の街の騒がしい様に物慣れていないふうで、それがさらに微笑を誘う。隣の部屋を使ってくださいと指せば銀時はあんがとよと片手を上げてそちらに移った。しばしごそそと衣擦れがしていたが、ふいに音がやむ。さては着替え終わったかと襖を見るが、しかしいつかな開く様子もない。妙は小首を傾げた。丈はあれで合っていると思っただが、何か不備でもあっただろうか。

「銀さん、着物どうですか？」

入りますよと一声かけて襖を開ければ、銀時は既に着替え終わっていて、じつと隅に据えられた仏壇を見詰めていた。妙はああと少年に微笑みかける。

「父と母です」

「…そうか」

答える声は平坦で、何の感慨もなさそうに見えた。肚の内はわからない。このひとは良くも悪くも大人であつたから。ところで丈は大丈夫でしたかと妙がつとめて朗らかに訊ねると、彼はああと答えて少しだけ笑った。このとおり、ぴったし。くるりとポーズを決めてみせるその子供のじみた様に妙はくすりと笑う。

「なんだかおかしい感じだわ。私と同年くらいの銀さんだなんて」
「そうか？」

「そうですね。だって私が銀さんにはじめて会つた時には、銀さんとつくに駄目な大人でしたから」

「……そーかよ」

白い小袖に薄縹の袴姿の銀時は、あまり見慣れぬ格好だけに新鮮さよりも別の人間のように見えた。年恰好が違うというのも大きいのだろう、いつもの銀時を知っている分違和感が大きい、決して見るに耐えないわけではない。涼やかな色合いの衣装は色味の乏しい少年を清明に見せた。ああこれなら大丈夫そうね。妙は満足げに頷く。

「良かった。新ちゃんのじゃちよつと丈が足りないみたいだったから。これならぴったりね」

そう笑えば彼はふいに声を低めた。もしかしてこれ、裾を軽く持ち上げて妙を見る。目線の高さは、ほとんど変わらない。

「…親父さんのだろ？ …俺が借りて良いのか？」

「ええ、勿論」

なんの気負いもなく妙は頷いた。少しばかりデザインが古いかも知れないけれど、でも生地はいいものですよと云ってやれば、少年はわずかに表情を歪める。困惑したような途方に暮れたような表情

に、少し似ていた。

「…俺が誰だか、知ってんだろ。…良いのか？」

その表情に、声に、妙は一瞬笑顔を浮かべることを忘れた。

まるで銀時らしくない表情。声。云い様。少年期特有の潔癖と正義感。——あの嫌な大人ではない、彼は自分と歳の変わらぬ少年なのだとあらためて思い知る。

妙は銀時のことをさほど知らない。新八や神楽ならば妙よりも幾らか知ってはいるのだろうが、妙は知らない。例えば彼のその強さはどこによるものなのかとか。家族はどうしているのかとか。生まれや育ちはどこなのかとか。妙は何も知らない。

——けれど。

妙はふわりと笑んだ。春先に蓄がほころぶような笑みだった。

「知っていますよ。…私たちは銀さんを知っているから、着物くらいいつだって貸し出してあげるんです」

妙は銀時のことをよく知っている。新八や神楽と同レベルで騒いでいる銀時を見てきたから、妙は知っている。例えば彼が甘いもの依存症で糖尿病寸前だとか。パチンコや酒が好きだけどあまり強くないとか。実はホラーが駄目だとか。妙はよく知っている。

傷ついてなお何かを守ろうとする、そんな馬鹿な男の背中を知っているから。

「本当に気になさらないで、銀さん。仕舞いつ放しじゃ虫がつくから、たまには虫干しでもしなきゃと思っていたところですし、丁度よかったわ。結構たくさんあるんです、できれば全部お願いしたいんですけれど」

茶目っ気交じりにそう云えば、きょとんとしていた銀時は軽く苦笑する。

「……お人好しばつかなのな、この街は」

昨日つから、会う奴会う奴みんなそんな調子だ。いいえ、妙は銀時の言葉に首を振る。いいえ、それはちょっとだけ違います。

「勿論江戸の人情は捨てたものじゃないですよ。でもそれ以上に、あなただつたから」

他でもない、坂田銀時だから。

「私が、銀さんとはじめて会ったとき。銀さんは、初対面の私たちを助けてくれたんですよ。…最初はホント、滅茶苦茶な人だと思つたんですけどね」

パトカーを無断拝借（というか強盗）してまで乗り込んできて、台風の如く暴れまわり、船ひとつ叩き落した、ぎんいろの侍。それでも結局、妙と新八は彼の男に助けられた。あの時の彼の静かな声は、今も耳に残っている。この手には何もなければ、零れそうなものがあれば拾ってやりたいと云っていたその表情は、どこかこの少年に通じるところがあった。

「情けは人のためならず、ですよ。…だから気になさらないで」
助けられたことがあつたから。借りとか貸しとか、そんなものではないけれど。

妙はしろい少年に微笑みかける。

「もつとふてぶてしいのが銀さんですよ。戸惑う気持ちもわかりますけど、そんなにしおらしくされたら調子が狂っちゃうわ」

さらりと暴言を吐かれた銀時は堪えきれないといったふうに吹き出した。喉で笑いながら楽しそうに妙を見る。

「…お前さ、俺と同じ年頃って、嘘だろ？」

「まあ酷い。それはどういう意味なのかしら」

それによつては許しませんよと軽くねめつけてやれば彼はイヤイヤと笑い含みに片手を振る。

「ホント、大人の女だなって思つてよ」

あらそんなのあたりまえだわ。妙はころころと笑う。

「女は幾つだつて女なんだっていうことですよ。貴方が男は幾つに

なつても少年だなんて云つてるとおんなじように」

「…なるほど」

くつくつ笑う銀時につられ、妙も肩を揺らして笑い出す。しばらくふたりで、そうして笑っていた。

「…あー！ 銀ちゃんテメツ、何姐御となんかいいムード作り出してんじゃコラアアアア！！」

突然の怒声にそちらを向けば、いつの間にやら開け放たれた襖から少女がこちらを指して仁王立ちしていた。その後ろで少年が苦笑している。

「姐御は渡さないアルヨ！ どうしても云うなら、私の屍を越えていくがヨロシ！！」

「神楽ちゃん、それ娘が初彼連れてきたときの父親の反応だよ…」

「姐御をこんなマダオに渡すくらいなら、地震雷火事オヤジ！ なんだってなつてみせるアル！ ふおおオオオッ！！」

「いやなんの気合だよ」

唐突に賑やかになつた室内に銀時と妙は呆氣に取られ、次いで同時に吹き出す。そう、こんな騒がしいやりとりが日常である。

だから何も気に病む必要はないのだと、妙は神楽のマジ蹴りをそれなりに必死でいなしている少年を見やる。ちゃらんぼらんあなたでいいんです。一瞬の輝きを、護るものを背にしたときの背中を、私たちは知っているから。そうして馬鹿な毎日を送っていけばいいんです。しろいあなたに鮮やかな緋色はあまりに似合いすぎるから。さて、呟いて妙はこれ以上部屋を散らかされぬうちにこどものじやれあいを止めなければと、笑顔で拳を握り締めた。

優しさの成れの果て

貴方の不器用なそれが私たちをつなぎ、こうして笑いあっているんです。貴方がそれをわかっているのかは知らないけれど。

* 0 1 1 * 優しさの成れの果て（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。

ちよびつと補足入れると、銀さんの「俺が誰か知っているのか」発言は、新八が白夜叉を知っていたから、姉であるお妙も知っているだろうと銀さんは考えたからです。そんな野郎に大事な形見を貸してやっても良いのかと。姐御はもちろん白夜叉のことを知りませんが、まさか銀さんがまっとうなというか碌なというか、世間一般並の生き方をしてきたとは思ってません。でも今の銀さんのことは結構知っているんです。実はお人好しだとか、面倒見が良いとか。だから構わないとさりと云ってしまえます。氣遣いも完璧。まさに大人の女です。

まさかの似非シリ阿斯モドキが連続してしまいました。次からまたアホ話に戻るかと。相変わらずの不定期更新ですが、見捨てずお付き合ひ頂けたら幸いです。

それではまた次話でお目にかかりましょう。

* 0 1 2 * 白銀がナイフである理由（前書き）

ものっそいお待たせいたしました、第12話をお届けします。

感想、評価、アンケート回答下さった方々、ありがとうございます。

それからたばさん、メールで感想頂いたのでここでお礼申しあげます。ありがとうございます。

ところですいません、前回の次回予告大嘘ぶっこきました。ぬるい似非シリアスです。しかも主人公欠片も出番ありません。今回は真選組の皆さん勢ぞろいです。ムサイですけどよろしければ本編をお楽しみください。

* 0 1 2 * 白銀がナイフである理由

「副長、局長連れて参りましたア」

「ただいまトシ。悪いな、俺を探してたって？」

「おう近藤さん。…って、アンタまたあの女のとこ行ってたのかよ」
山崎を伴い土方のところへと顔を出した近藤を見て、自室で書類仕事を片づけていた土方は深い溜め息を吐き出した。顔がものすげー勢いで膨れてンゼつつか既に原型ねエじゃねーかよ、半眼で呆れたように云いやる土方ヘジャガイモのような輪郭をした近藤はからからと笑ってみせる。

「いやあ、お妙さんは相変わらずの恥ずかしがりやでなあ！」

「恥ずかしがりとは他人にグレートサスケばりの飛び蹴りかましたりしねエってことにいい加減気づこうや」

云うだけ無駄は承知の上であるのだろうが、云わずにおれぬが土方がこの武装警察真選組の副長たる所以であろう。色々と頭が痛いらしい女房役を不思議そうに見る近藤だったが、まあいいかとばかりにとつかと土方の前に腰を下ろす。ところでなアトシ、お妙さんのところで万事屋に会ったんだが、なんかアイツまーた厄介なことになってるなあ。向けられた話に、ああ会ったのかと啜っていた煙草を灰皿に押し付け、土方は近藤に向き直った。

「それについても一応報告しようとは思っていたんだが、それだったら話は早エ」

どこまで聞いたと問われ、とりあえず大体のことはと答える近藤に、彼は少し考え込むように眼を伏せ、すぐに近藤へ視線を戻す。

「……で、アンタ、どう思った」

「どうって？」

「アイツだよ。万事屋がアホなことしてんのはいつものことだろうが、…アレはそういう話じゃなかったらうが」

あれは、鬼だ。

断言するその語調の静かではあれどはつきりした強さに近藤が返答に迷ったとき、土方さアんと暢気な声が場の雰囲気をつち壊した。闖入者は三人の視線を受けて、中の近藤に目を止める。おや近藤さんお帰りなせエ。薄い色の髪をさらりと揺らして、黒服の少年がおとないも告げずに遠慮会釈もなく入ってきた。土方は顔をしかめるが、近藤はああ総悟と笑みを浮かべる。

「ただいま、今帰った。そうだ、お前もあいつに会ったんだって云ってたっけな」

「会ったって、誰にです？　…ああ、もしかして万事屋の旦那ですか？それだったら、昨日お会いしやしたよ」

「お前から見て、あいつどんな感じだった？」

沖田は唐突な問いに眉根を寄せたが、そうですねエと思い返すように思索した。

「…やっぱなんかいつもの旦那とは違う様でしたぜ。なんつーか、いつもみてエなちゃらんぼらんさ加減が、もっと薄いつつーか。刀を収めてんのが、鉄の鞘じゃあなしに薄布で簡単にくるんでるみてエな感じで」

沖田の説明は抽象的で比喩的だったが、なんとなしに近藤はその喩えが理解できる気がした。銀時の普段のあの駄目人間っぷりは演技なんかである訳がないが、確かにあの男はどこかそのように周りに見せたがっている感があった。なんだそんなにヤンチャだったかと笑い含みに云えば、沖田もまた悪戯げに表情を輝かせそりやあもう、と答える。

「俺らが会った時、旦那すげエカッコでしたからねエ。白い戦装束がもう返り血だか自分のだかわかんねーけど元の色が見えねエツてくれエに真っ赤に染まってて、眼なんて鬼か獣みてエにギラギラさせて。土方さんなんてビビって動けませんでしたからねイザマーミロ」

「ひとつこと余計なんだよテメーはよオ！！」

仲の良いやりとりを繰り広げるふたりに笑みをこぼした近藤は、ふと障子の前に正座して小難しい顔をしている山崎に目をやった。

「あれ、いたのか山崎」

「いましたよッ?! 局長と一緒に来てずっとここにいましたよッ?!」

結構酷いことをまったく悪意の無い眼で云われて山崎は絶叫した。その声に土方と沖田もあいたのかなどと口走り、山崎は内心本気で傷ついた。ダメージで云うと967ポイントくらい、ちなみにクリティカルで。まあまあと上司に食って掛かる山崎をなだめて、それで、と話題を転換する。小難しい顔をしていたみたいだが、どうした山崎。あーいや、しどもどする彼に沖田がうっとおしいなと云いたそうな視線を向ける。

「どしたイ、山崎。云いてエことがあんならキリキリ吐きやがれ」

「え、いや、その…」

口ごもる山崎をんだよはつきりしねエなと土方がどやしつけ、彼はかつかつ口を開くが、どこか据わりが悪そうだった。

「さきの戦争の時分、戸籍とかそういう資料やなんか、結構な量が焼失とか紛失とかしてしまっただんですがね。それで、まあ、以前副長に言われて旦那のこと調べたんですが、そんなふうだったんで、この町に来るまでのこととか全然わかんなかったんですけど」

でも、旦那は多分、攘夷戦争の参加者です。

おふたりは旦那の格好見たからわかったでしょうけれど山崎が土方と沖田を見たのでふたりは頷く。約十年前、血濡れの戦装束、太刀を佩いている——こうまであからさまなキーワードで、察せられないはずもない。ふうむ、近藤は思案顔で腕を組んだ。

「…そうか。万事屋がなあ…。とはいえ、俺たちくらいの歳の男なら、そう珍しくはないだろう?」

あの時代の熱は、一種流行のように若者を戦場へと駆り立てた。

熱に浮かされたかのように、皆刃を握ってそれぞれの想いのもと立ったのだ。彼がそのひとりだったとて、なんらおかしいことはない。

——あのちゃんばらんが幕府だ国だ唱えて戦う姿など、想像はできかねたが。

俺たちはその頃田舎で芋侍やってたがな、笑う近藤に土方は眉間に皺を寄せ呟く。

「そついやあ桂や高杉とも繋がりがあつた感じがなんだよな、あの野郎。それ絡みか……」

「戦争の頃に知り合つたつていうことか？　まあ、ありえんことじゃないか」

「それでも、今日那は攘夷には関係ねえだろい。そんな今更なこつた。それがどうしたつて云うんでい」

考え込む大人二人とは裏腹に沖田の言葉はさばけていて、銀時が攘夷志士かもしれないという話もそれがどうしたと云わんばかりにいつもどおり飄々とした体である。実際云つた。問われた山崎は少し云い難そうに、もしくは言葉を探して云いよんどから、間違えた解を答えて叱責されることを恐れる子供に似た上目遣いで口を開く。

「……その、……ですね。——白夜叉、という名をご存知ですか？」

「白夜叉ア？」

思いがけない、どこかで聞いたことのあるような単語に三人の声が揃う。それぞれ首を捻り考えるが、思い出すためには数秒の時間を要した。いくらかの沈黙の末、そりゃあ確か、土方が首を捻りながら正解を呟く。

「……確か、アレだろ。攘夷戦争時代の英雄」

おおと近藤が次いで手を打った。そうだそうだ、聞いたことがあるぞ。

「桂一派の仲間だつて話もあつたんだよな。有名な割に死んだつて話もなく戦争後の足取りも掴めず、ありや都市伝説の類だつてこと

「じゃなかったか？」

「——その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿、まさしく夜叉」

何かの宣伝文句キャッチコピーのようなような仰々しい一節を諳んじる山崎に、土方の眉間の皺が寄る。

「……なんだそりゃ？」

「そんな謳い文句があるんです。そのとおり、白夜叉は銀髪で、いつも白尽くめの戦装束だったって話です。白夜叉の名は、そこから来たんでしょう」

近藤と土方は同時にあつと声をあげた。何故山崎が唐突に白夜叉なんて話題を振ったのかようやく理解し、次いで驚愕する。そして反射的に嘘だーと考えついてしまったことを否定した。沖田はまだ首を捻っている。

「……おいおい、山崎。……テメエの云いたいことはわかったが……、……笑えねエぞ、そりゃ」

「そうですね。確証はありません。白夜叉の本名なんて、どこ探してもどんな資料にもありませんでしたから。俺の直感に過ぎません……でも」

あアまさか、思い至ったか沖田が感嘆の声をあげた。それだけですます沖田の神経が今は心底うらやましく思いながら、しかしふたり（特に土方）にはまるで信じられない、というか信じたくない。けれどそうと納得することだって実は容易いことなのだ。何故なら彼らは不本意ながら坂田銀時という男を知っている。

「天人はもとより、味方からも恐れられた武神。白夜叉」

山崎はそこで躊躇うように目を伏せていったん言葉を切る。しかし一拍後、きつと顔を上げると、睨みつけるかのような真剣な面差しで、宣告した。

「おそらく、旦那が白夜叉です」

「…………マジかよオイ……」

呆れ果てたように額を押さえ土方が呻いた。それを横目で見やり、沖田も感心したのか呆氣にとられたかわからぬ息を吐く。

「……まあでも、銀髪の日本人が何人いるかって話ですからねエ……」

旦那の腕っ節だったら、あながちありえねエとも云い切れねエ」

「…………ありえねエ……」

心底そんな嫌だと云いたそうな土方に近藤は苦笑する。気持ちはいわからないでもない。あの社会不適合者がそんなに御大層な過去持ちであるとは流石に想像の埒外であった。無論近藤とて白夜叉の名は知っていたし、山崎は細かくも風体まで知っていた。あれだけ目立つなりをした男であるのに白夜叉がイクオール銀時であると連想できなかったのは、ひとえに彼らが坂田銀時を知っていたからだろう。良きにしろ悪しきにしろ。

確かか、山崎。確認までに問う。近藤は既にそれを事実と信じていた。

「いえ、俺の推論です。だけど個人的な意見を云わせてもらえば、間違つてとは思いません」

「……そうか」

きつぱりとした言葉に近藤は深く息を吐いた。先程会った銀時を思い出す。近藤の知る彼ほど達観しても諦観してもいない少年は、けれど絶望し果てていた。いったいどれほどの地獄を見てくればあのような修羅になれるのだろうか。この真選組とて剣鬼の吹き溜まりである。近藤自身、剣に生き剣に死ぬおのれの人生に疑いを抱いたことは無い。しかし彼らと彼とでは同じ鬼にしてもまったく違う種類のいきものだった。なんとなれば、近藤は戦場を知らぬ。

近藤には妙の道場で相見した齡二十歳に届かぬほどの少年が、彼らの知る坂田銀時であるようにとはとてもではないが思えなかった。やわからかにひかりを弾く銀髪も、いつもの翻る白い着物も、そのす

べてが硬質な刃金のかがやきであるかのようで、正直少し気圧された。いつもの彼の白さは雲や風や水や、そんなとらえどころのないものを象徴するものであったから。

（あの男の厭世的で飄々とした体は棺であるのだ）

近藤はなんとなくそんなことを考えた。あれは荒ぶる夜叉を眠らせておくための棺桶であるのだ。夜叉はあまりに荒々しく、狂おしいほど熱情的で、その白みは雪や氷のそれではなく一等星のような高熱で生命を灼き死を振り撒くものだったから、糖尿患者の手足のような低温で抑え込んだが良策なのだ。しかし氷点下にしてはいけない、何故ならばその冷たさは逆に眠れる夜叉を呼び起こす。そうさせないためには彼らの送る日常のような、ぬるま湯い温度が丁度良い。まさしくあの男は、「万事屋銀ちゃん」という名で「白夜叉」という銘を殺し続けてきたのだから。

——しろいおとこが脳裏を舞う。いつか見たその男の雄叫びをあげ刀を振るう姿が、しろい少年に重なった。

白い衣の翻るさまはまったく戦場には不似合いであっただろう。しかし重苦しい鈍色の世界で、その白さはことのほか輝いていたように思えた。モノクロオムにところどころ朱を流し込んだ水墨画の世界の中、ひときわ目を引く白い衣が翻る。刃の銀色がきらめいて見るものの瞳を刺す。ひとたび出陣すれば屍の山を築いてのける、白い夜叉。

——しかし、彼は少年であった。

沖田とあまり歳の変わらぬ、こどもとさえ云っても間違いではないだろう少年であったのだ。触れれば切れそうな刃にも似た彼は戦って——理由はわからないが——敗けた。そしてどんな経過によってか、この江戸で、生きて、彼らの知るしろい男になったのだ。

「アイツは、今の世を見て、なんて思っただろうかなあ…」

ひとりごちた呟きに、無論、いらえは返らない。

白銀がナイフである理由

そういえば何も知らないのだ、あれだけ甘い男が夜叉たる所以も、あれだけ腕が立つくせに何でも屋など営んでいるわけも。

* 0 1 2 * 白銀がナイフである理由（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。

あれーなんていつの間にこんな意思とは違う話になったんだろう。おかしい、あほなシティアドベンチャーにする予定だったのに一体どこで狂った。次は多分そうなります。マダオくらいでてくるかもしれない。ツラ（またはヅラ子）はどうだろう。その次の次くらいでしょうか。完結までの道は長い、つか経路が予測できない。切実にネタ募集です。

それではまた次話でお目にかかりましょう。ありがとうございました。

*** 0 1 3 *** 人は信じたくない事象を前にして、**まず神を責める（前書き）**

お待たせしました、第13話をお届けします。前話までとは違って
かわったアホテイストでお送りします。今回登場キャラは彼。実は
初書きです。

それでは本編をどうぞお楽しみください。

* 0 1 3 * 人は信じたくない事象を前にして、まず神を責める

「あ、銀さん神楽ちゃん、お帰りなさい。特売のお肉まだ残ってましたか？」

ただいまーと声を揃えたふたりを新八が笑って迎えた。銀時モにやりと笑んで買い物袋をがさりとテーブルの上に置き、中からパツクの豚肉を取り出す。

「まかしとけよ。見ろ、特売に値引きのコンボだ」

「思ったよりおつり貰えたからアイスも買ってきたアル！ ちなみに全品3割引ネ！」

どうだと戦利品を掲げ誇らしげなふたりをお疲れ様でしたとねぎらって、新八は買ったものを片づけ始める。それを尻目に銀時と神楽がさつそくアイスに取り掛かるうとしていたので、ちよつとふたりとも手洗いうがいとぴしゃりと云いつけた。はーいと良い子の返事をして我先に水道へ向かう騒がしいこどもらに仲が良いなあと苦笑する。銀時が若返って数日経ったが、彼の仕草が多少子供っぽいこと以外は、万事屋の日常とそう変わらない。ていうか、あの男はとことん大人気なかったから結構いつもどおりなのかもしれない。

馬鹿さ加減が熟成しきっていない分こっちのほうが扱いやすいかなあとか結構非道なことを考えながら冷蔵庫の扉を開けた新八は、アイスアイスと賑やかなこどもたちのにこやかな笑顔を向ける。

「駄目です。今食べたからお昼ご飯入らなくなるでしょ」

もうすぐお昼できますからアイスはおやつかデザートにしてください。なんとなく彼の姉に通ずるところのある笑顔に逆らえる度胸はふたりとも持ち合わせていなかったらしい。割合素直に引き下がりに、云われるまま昼食の準備を手伝い始めた。新八なんか最近マミーに似てきたネ。つーか既にベテランのオカンだろ。こそこそ云い合っていたその会話は全力で聞かなかったことに決めた。

てゆーか誰のせいだ今畜生。

そうそう、いつもより若干穏やかな昼食を終え食後のアイスまで食べ終わり、その片づけをしていた新八は思い出したように声をあげた。

「銀さんたち出かけてる間に仕事の依頼が来ましたよ」

「マジでか」

綺麗に揃ったふたりの声に軽く笑って、なんでもペットを探して欲しいとか、つい先ほど来店した依頼について説明する。迷子のペット探しねえ。銀時がフンと鼻を鳴らした。ペットくらいテメエで面倒見とけよと毒づく彼を、割烹着で手を拭きつつ居間へ入ってきた新八は苦笑してまあまあと宥める。

「いいじゃないですか。それで僕らご飯食べられるんですから」

「そうヨ、仕事のあるうちが花ネ。一月に一回も依頼がなかった時なんて、三食豆パンどころか塩水だけってこともあったアル」

「……うわー」

銀時はちよっぴり冷や汗を流しつつ視線を逸らせた。あの男もこれくらい悪びれてくれればいいのに。無駄と知りつつ新八はそんな淡い期待をしたが、どうせ本当に無駄に終わるのは目に見えている。だってそれが坂田銀時なのである。今だからぶっちゃけるが、記憶喪失時の常識的な彼はちよつとどころじゃない違和感があり、とても気持ち悪かった。つまりそれは非常識な彼の言動にイイカンジで諦めとか慣れとかが出てきたということなのだろうが、それってはたしてどんなもんなんだろうと思わないでもない志村新八十六歳と数ヶ月である。

「で、そのペットって？」

「あ、ハイ。「ぼち」君っていうらしいです。あとえーと、写真を預かって…ああ、これだ」

あからさまに話題を変えた銀時に突っ込みはせず、新八は銀時専用デスクの上に置いておいた写真を手渡した。サンキュと云って受

け取った銀時とそれを覗き込んだ神楽は数秒の沈黙の後、怪訝、というか微妙な顔になる。ぼちって名前さア、云いながらなまぬるい笑みで銀時は写真を指す。

「……普通、犬に付けね？ 百歩譲って、猫とかじゃね？」

「そのこは違うみたいですね」

「……てゆーか、これ、マジでペットアルか……？」

「ペットってよりかは、家族扱いされてるみたいだよ」

ふたりの気持ちは気持ちはとてもよくわかるが、あえて無視して外出の支度をする。新八とて最初依頼人に写真を渡された時、間拔けな顔をしていた自覚はある。

だってコレどう見ても、

「ぼちってコレ……ぼち？ ……え、何、これがぼち？」

「それがぼちです。……さー、はりきって探しましょ」

「……えー？」

——こいのぼり、だった。

で、なんでこいのぼりよ。ぶらぶら歩きつついまだにうるんげな半眼で写真を眺めている銀時に、えーと、と新八は依頼人の話を聞きながら取ったメモを開いて読み上げる。なんでも依頼人がですね、宇宙に出張に行った際に、息子さんへのお土産ってことで買ってきたらしいです。

写真には十に届かぬ子どもが30センチくらいのこいのぼりと遊んでいる姿が写っている。これは相当可愛がっていたのだろう、子どもは満面の笑みでこいのぼりにじゃれついていた。

「ぼち君はなんかどっかの星に生息してる宇宙生物らしいんです。ペットとして結構人気みたいで、他の星から来た観光客向けとかに売ってんですね。それで依頼人のお宅がマンションで、こいのぼりを飾るところがなかったから、お父さんがその代わりにってことで買って帰って。息子さんも随分喜んで世話してたんですけどね、散

歩に行つたときに強い風が吹いてきて、つないでいた糸が切れてどつか飛ばされてっちゃったって話です」

「……へえ」

なんかもう、何でもアリだなスゲーな多分十年後。呆れを通り越してちよっぴりひきつってる顔で呟く少年に新八は苦笑した。やはりワンダーランド・江戸に馴染むにはまだまだ時間がかかりそうである。まあ宇宙は広いですから、こんなえいりあんがいたっていいでしょ。そう新八がとりなす横で、生きてるこいのぼりかあと神樂が顔を輝かせた。

「こいのぼりがいるんならどっかにおひなさまもないアルか。銀ちゃん、私おひなさま欲しいアル」

「あー、俺じゃなくてお母さんに頼んでみなさい。財布握ってんのお母さんだから」

「マミー私おひなさま欲しいアル。いい子にするからー」

「誰がお母さん?! うーん、おひなさまだったら姉上のが押入れにしまいっぱなしだったと思うよ、今度頼んで出してもらおう?」

「やーヨ、そんな動きもしないのつまないアル。動くやつが欲しいネ」

「いや、それは俺が断固として反対する。動く人形なんて認めない」

「えー。動いたっていいじゃないアルか。銀ちゃんが怖くないように夜銀ちゃんの枕元で踊らせたりとかしてあげるからー」

「だから嫌だっつってんだよ! 嫌がらせかよコノヤロー!!」

「はいはい、銀さんうるさいですよ。そんなのがいいばいいね神樂ちゃん。でも夜は寝させてあげようね、おひなさま」

「…あれ、俺に対してのフォローはなし?」

賑やかしくダベリながら迷子のぼち探しもきっちり並行して行っている三人と一匹だったが、いかんせん犬や猫と違い行動半径が予測できない上、風に飛ばされてったとあればはたしてどこまで行ってしまったのかまるで検討がつかない。空を行つたのでは定春の鼻もお手上げである。

とりあえず飛ばされた場所からしらみつぶし作戦か、とややうんざりして公園までやってきた万事屋一行の背に、あれえと明るい声がかけられた。

「よお銀さん、久し振り。最近パチンコでも飲み屋でも顔見ないからどうしたのかと思ってたけど、元気そうじゃないの」

気安げに片手を挙げてこちらにやってきたのは遮光眼鏡の中年男である。

あ、マダオアル。神楽が呟く。

「オメーこんな昼間から何してるネ。また仕事クビになったアルか？」

「うん、あんまり傷口抉んでくれるかなお嬢ちゃん。オジさん泣いちゃうから」

情けなく眉尻を下げる男と少女の遣り取りを眺めて、銀時は神楽の耳元に口を寄せた。この人誰。少女はまるい瞳をくりんと動かし、同じように銀時の耳元に囁く。マダオヨ。銀ちゃんの飲み友達っていうか、オヤジ仲間ネ。ふーん？ 小首を傾げた彼はどーも、と取り合えずといった調子で頭を下げた。

「えーと、マダオさん？」

「ちよつと銀さんまで何それ嫌がらせ？！」

思い切り突っ込まれて、え、と銀時は軽く目を見張る。ひでえよ銀さんとわめく男と吹き込んだ隣の少女をばちばちとまたたきながら見比べた。

「え、マダオって名前じゃねーの？」

「違うからそれ！ 全力で違うからね？！」

全力で否定する男の必死さに困惑する銀時の着物の裾を引っ張る。銀さん銀さん、面と向かってマダオなんて云ったら駄目ですよ。こつそりと囁く新八に銀時は耳を寄せる。だってこいつがマダオって違いますこのひとは長谷川さんです、マダオって云っちゃ駄目ですよ気にしてるんですから。え、もしかして悪口だった？ ええそりやもつものすごい勢いで。マダオって「まるで駄目なオッさん」の

略なんですよ。えッマジで？　おいコラ、お前何吹き込んでんだよ。だってコイツマジでマダオアル、コイツからマダオをとつたらグラサンしか残らないネ。ナチュにひでエなお前。も少しあんだろ何か。あとは無職くらいなもんですかね。大人しそうに見えてお前も大概非道なのな？　三人してごちゃごちゃ云い合っていたが、放置されて心なし寂しそうな長谷川に気づいた銀時が申し訳なさそうに頭を下げる。

「あー、その、すみませんでした」

「…なんかそう真面目に謝られるほうが傷つくんですけど…」

とほーと頂垂れる長谷川の肩を神楽が慰めるように軽く叩いていたけれど、多分それ追い討ちだ。背景に夕テ線背負った彼はどうせ俺はまるで駄目なオツさんさんなんて自虐に走っていたが、やがて開き直ったかいつものことと割り切ったか、それはともかくと物を横に避けるジェスチャー付きで復活した。普段あれだけイジられていればそりゃあ打たれ強くもなるよなあなんてこっそり思ってしまったことは内緒である。

「そんで、銀さん今度は何したの。また記憶喪失かなんか？」

今度はって何、俺いつも何やらかしてた訳。ちょびつと顔をひきつらせる少年に長谷川は首を捻ったが、新八と神楽から話を聞いてうえつと変な声をあげて驚いたように銀時を見た。

「十年前エ？」

はー、といっそ感心したように腕を組んでじろじろと少年を眺める。銀時はもう慣れたのか諦めたのか、少しだけ居心地が悪そうではあるが不躰な視線にも特に何の言葉もない。

「へー。銀さん今とあんまり変わんねーなー。あーでも、ちょっと背エ低いかな？　髪も今より長いな。へー、十年前かー。やっぱ若いなー」

これがあんなオツさんになるんだなー、云いながら長谷川は楽しそうに笑って見せた。あんなって、どんなだよ。投げやりに突っ込む少年に彼はにやりと人の悪い笑みを向ける。

「昼間っからパチンコに入り浸った拳句有り金全部スツちまうようなオツさんさ」

「……うわあ……」

なんか俺もー、歳取んの恐くなってきた。遠い眼差しで少年はどっかを見詰めた。それに対して馬鹿野郎と銀時を張ったのは神楽である。彼女は拳を握って啞然とする少年を怒鳴りつけた。男は幾つになっても心は少年なんだよ、いつもナイフを隠しているもんだよ！ 少年がオツさんになっちまうのは心のナイフを忘れた時だ！ お前はそれを忘れちまったのか！ ……ッ！ 忘れていた……。そうだ、俺はなんでこんな大切なことを忘れていたんだ。たとえオツさんになろうと心は少年なんだ、友情・努力・勝利でできているんだ……！ わかってくれたか……。ならば俺からお前に教えてやれることはもう何もない。おやつさん……！ そしてふたりはひしりと抱き合う。

「ところで長谷川さん、こんなえいりあん見かけませんでした？」

「あん？」

即席コントを繰り広げる父娘（兄妹）をさっくり無視して、新八は長谷川にぼちの写っている写真を取り出して見せた。

「……………」

「……………」

後ろでなんか寂しそうな空気をまといながら物云いたげにこつちを見ている馬鹿コンビは完全スルー。銀時がまだハジけきれていないのが原因なのかボケかたが甘い。そんな半端なボケで突っ込んでもらえると思うなよ。

そんなシビアなことを考えている新八からどれどれと写真を受け取った長谷川は気楽げな調子から一転、ぴしりと音を立てて石化した。

「……え、長谷川さん？ どうしました？ 長谷川さーん？」

その様子に銀時と神楽も顔を見合わせ、小首を傾げながら長谷川に声をかける。どうしたの、もしかしてこいつ知ってんの。知って

んなら素直に吐くヨロシ。神楽に恫喝されてなんとか動き出した長谷川はなんともいえない表情で写真を銀時に返す。

「……あー、銀さん」

訝しげな顔をする少年に、長谷川はなんといったもんかなあと頭をがしがし掻きながら、云いづらそうに目の前に並んだこどもたちを伺う。

「こいつさア、俺前取り扱ったことあんだけどさあ……」

「え？ 何そうなの？ じゃあコイツが行きそうなことかわかんねエ？」

「あー…、うん。…銀さん。……死ぬな」

「………は？」

健闘を祈るとでもいうように肩を軽く叩いてそんじやあなと手を振り背中を見せる長谷川を銀時と新八は慌てて引き止める。

「ちよつと待つてくください長谷川さん！ 何すつこい不吉なこと云い残して去つていこうとしてんですか！」

「いや、俺これからバイトあつから。店長厳しいんだよ、遅刻は即行減給に繋がつからさあ、早めに行つとかないといけねーんだよ」

「じゃあせめて何に気をつけたらいいかくらい喋つてから行つてくれ！ 何その可哀相なものを見るような目エ！」

必死に食い下がる少年二人に長谷川は大きく溜め息を吐いた。関わりたくねーと思つているのがまるわかりだった。バイトとはいえせつかく職にありつけたのだ、少しばかり巻き込むのが気の毒に思えるが、生命の危機つばいことを匂わされてはせめてその意味を知るまで逃がしたくない。こつちだつて自分の身は可愛いのだ。あー、その、な。どう説明すればいいのか考えているふうだった長谷川は、真剣に詰め寄る銀時と新八にやれやれと向き直る。

「……いやあ、こいつな、」

長谷川がすつげえ嫌そうに語ろうとしたそのとき、ふいに空が翳

った。雲が太陽にかかったときのような大きな影が落ちる。それに
つられて上を向いた一同の、思考が止まる。

「……アレ。ねえ、何アレ。何アレ」

「……いや、そんな僕が知りたいです」

「……ゴールデンウィークあたりでよく見かけるアルな。大きさは
違うけど」

違いすぎた。ていうか、つい今まで写真で見ていたそれととても
よく似ていたが、模様や色合いまでまったく一緒だったが、

ただ、サイズだけが違いすぎた。

「……やつベエ……」

以前取り扱ったことのあるという長谷川の呟きに嫌な汗が背中を
伝う。今でこそこんだが、彼は以前入国管理局の局長を勤めてい
た男である。ならば異星人やえいりあんに関しても新八らなどより
もよほど詳しいだろう。その彼が、「ヤバイ」とか云っている。
嫌な予感しかしなかった。

新八の視線は上を向いたまま動かせない。昨今の江戸には天人の
船が飛び交う空は既に見慣れたものである。しかしこれはなんとし
たものだろう。

蒼穹には悠々と、体長10メートルは超えていそうなこいのぼり
が身体をくねらせて泳いでいた。

人は信じたくない事象を前にして、まず神を責める

いやだって、いくらなんでもこれはないでしょ、神様？

*** 0 1 3 *** 人は信じたくない事象を前にして、まず神を責める（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。また評価、感想くださった方、本当にありがとうございます。動力元です。また叱咤激励をお願いします。…更新速度についてはこれ以上なんとも出来ないのですが。

さて今回前後編となっております。続きもきつと馬鹿騒ぎしてますが、よろしければお付き合いください。

それではまた次話でお目にかかりましょう。

*** 014 * 足元に転がるものを蹴飛ばして（前書き）**

ごっさお久し振りです、ペット搜索後編をお届けします。

すんごい時間がかかったちゃってごめんなさい。お待たせした割りに大したもんじゃなくてごめんなさい。定春が空気でごめんなさい。世界中の皆様には謝ります。ごめんなさい。

そんなウザさ前回の作者なんぞさくつと無視して、どうぞ本編をお楽しみください。

014 足元に転がるものを蹴飛ばして

それは蒼い空をまるでその主のように悠々と泳ぐ。流れるような線を描く身体は薄っぺらく、しかし紙よりもしなやかにその身をくねらせて躍る。

そのさまはまったく堂々としていて、確かに百瀬の滝を登りきったならば忽ちのうちに竜にもなるだろうと見るものに思わせた。

「……サイズ、大分違わねエ？」

「サイズっていうか、話が違うアル」

「なんなんですかね、この騙された感……」

万事屋一行はひくりと頬をひきつらせた。なんていうか、え、依頼内容ってなんだったつけ。なんかアレを捕まえてみたいなこと云われてなかったつけ。…アレを？ どうやって？

三人は各々の手に持つ迷子のペット捕獲用の装備品を確かめる。

虫取り網にロープに麻袋、依頼主から借り受けたばち愛用のオモチヤと餌。

——いやムリだろ。

即行下した判断はまったく同時で同様だった。

だってアレ定春よりずっとデカイアル、定春五匹分はあるネ。ムリムリムリ、コイツでさえ手に負えねえってのに、あんなデカイのは流石にムリ。ちょっと僕らには荷が勝ちすぎますよ、機動隊か地球防衛軍あたりの仕事ですよアレ。つか俺、関係ないしマジ逃げていい？

なるべく刺激しないようにこそそ云い合っていた彼らであるが、ふと知りたくなかった事実に気づいた新八がさつと顔から血の気を引かせた。ねえ、銀さん、神楽ちゃん。背中に冷たいものが流れるのを自覚しつつ、おそろおそろ思ったことを口に出す。

「…なんか、こつち見てないスカアレ。僕らガン見してんじやないスカアレ」

新八に云われるまでもなくそれは全員が感じていたことだった。魚類の感情の読めない漆黒の真円はまったく逸れることなく、何故か彼らをじつと見詰めている。じりじりと後ずさりながら、話しかけられたふたりはちよっぴり遠い目でそれぞればやく。

「俺アレに似たの昨日見たわ。散歩中いつくら引っ張っても肉屋の前から全く動かねー時の定春の目だわアレ」^{コイツ}

「銀ちゃんがパフェ前にした時の目にも似てるアル」
沈黙。

両者見詰めあつたまましばしの時が流れる。奇妙な緊張は次の瞬間、少年の叫びに爆ぜた。

「——とりあえず回れ右！ 転進ッ！！」

間違うなよ撤退じゃねーぞ！！ 銀時の号令一下、一同揃ってくると反転したと同時に、もののすごい勢いでぼちが標準定めて滑空してきた。その様はまさしく王者、空の支配者たる竜の眷属の姿である。

「だアアアアア？！」

大絶叫して彼らは公園から飛び出した。全力で逃走するその背をぼちが追う。

「何で追いかけてくんの？！ 何で追いかけてくんのアレエエエ？！」

「知りませんよ、ていうかなんとかしてくださいよ銀さアアアアん！！」

「できるかアアアア！！」

結構必死である銀時らに対して定春の背に乗った神楽は暢気にも、特撮映画の怪獣じみたこいのぼりの暴れっぷりにうわあと嬉しそうな歓声を上げる。

「すごいアル、こいのぼりって自力飛行可能だったアルか！ 全国のお子様に大人気アルな！」

「じゃれつかれただけで死んじゃうってーのオオ！！」

しかもなんで俺らロツクオンだよあのこいのぼり、銀さんなんかしたんじゃないの、ちよつと待って何その俺が悪いみたいな云い方ホント十年後の俺って何やってんの、ああもうつるせーな黙って走れ！ 新八にやや八つ当たり気味に怒鳴られて、それでも色々納得がいけないのか銀時は賑やかしく騒ぐことを止めない。そのくせ全力疾走とか、どんな肺活量してんだこのひと。

「つーかマジでなんなんだよコイツ？！ なんかしたか、俺たちなんかしたっけかア？！」

「大丈夫ですまだ何にもしてません！ 強いて云うなら目があっちゃったくらいです！」

「目が合ったから因縁つけてみるってどんなギャングエイジだよあのこいのぼり！ どんなギザギザハートだアアア！！」

銀時の心からの叫びは、全員の心内の代弁でもであった。ぼちは周囲には目もくれず、何故か万事屋一行プラス長谷川だけに狙いを定めて追い詰めてくる。他人に被害が出ないだけマシなのかなと無理矢理思い込み、つい振り返り追跡者を確かめてしまった新八は、おのれのその行動をものっそい後悔した。

「ちよ、なんか吸い込んでますよ銀さんんん！！」

新八の悲鳴に思わず振り返った面々も、それを見た途端げつと顔を青くする。

「どこのバキュームだよアレエー！！」

「すげー、私よりも大食いアル！」

「つか、え、…嘘オオ？！」

ぼちは大きく開いた口から掃除機よろしく、のべつまくなしにこれらのものを吸い込んでいた。ぼちが通った後はまるで台風でも通過したかのような惨状になっている。新八はこないだの夕食時、三人揃って見ていたテレビ番組を思い出す。衝撃映像特集と銘打った

様々なデンジャラス映像のうちのひとつ、竜巻に家の壁や瓦がばりばり剥がれてつて呑み込まれる様に良く似たその光景は、ブラウン管越しのそれなどよりよほど臨場感があり、とても心臓に悪かった。

「死ぬ！ マジ死ぬってコレ！！」

髪や着物が引つ張られる感覚がダイレクトに恐怖を刺激する。ヤバイマジヤバイ、本気で死ぬ。ともすれば浮かび上がりそうになる身体を前屈みの姿勢になることでやりすごし、前へ進め続けた。気を抜けばすぐにでも食われてしまいそうだ。この吸引力は多分、どつかのププランド在住のピンクい球体にも匹敵する。

アレだよアレ、何故だか一緒に必死こいて逃げてる長谷川が汗だくで喚いた。

「俺が云いかけてたのアレ！ あんななることがあるから取り扱い注意って云いたかったのオ！！」

あアン？！ 銀時は既に年長者に対する敬いなどがなくなり捨てて長谷川にガンつけた。何それどーいうこと、問われて彼は息を切らしながらいや良くわかんないんだけどと前置きして怒鳴り返す。

「あの種族普段はちっせーんだけど、感情が高ぶったり身の危険が迫ったりすると巨大化して凶暴化すんだよ！ 輸入リストの注意書きに赤で書いてあった！！」

「ええええなにそのどつかの怪獣みたいな設定イイイ？！」

期せずして銀時と新八の声が揃った。

「ちよ、なんかないんスか？！ アレなだめる方法とかなんかないんスか？！」

「知らねーよそんなん！！ つーか覚えてねーよ！！」

「使えねーなチクシヨオオオオ！！」

初対面の人間を「使えない」とか云い切つてしまえるあたり、やはり彼は坂田銀時なのだなあと新八は変に感心してしまったが、そんな現実逃避に他ならない。そんな色々切羽詰っている男どもを他所に、ひとりぼちの吸引力に感嘆していた神楽がでも、と首を傾

げる。

「てゆーかアレ、食われてもケツから抜けてくだけじゃないアルか？」

「女の子がケツとか云っちゃ駄目だよ神楽ちゃん！　…あれ、でも冷静に考えるとそうなるのかな」

反射的に突っ込んだ新八は彼女の言葉にちよつと気が楽になった。しかし銀時の怒鳴り声がそれを一蹴する。

「そんなオチならいいけどな！　後ろ見ろオ！」

「へ？　……うおオオ？！」

振り向いた新八は驚愕の事実に見を剥いた。ぼちの外見はそこらのこいのぼりと変わりなく、胴体は大きく開けた口から尾までトンネルのように素通しになっている。まったくどういう原理で生命活動を行っているのか聞いてみたいものである。いやいや問題はそこじゃない、今ここで気にすべきことは、円筒形の胴からは向こうの景色が見えているくせして、吸い込まれたものは尾鰭から出ていくこともなく、ことごとく空洞の内側で消滅したかのごとく消え失せているということである。

「…なんつですかアレエエエエ！！」

信じられない、もしくは信じたくない不思議現象から新八は即行で視線を逸らした。なんだアレ、本当に何だアレ。江戸はとつくの昔にワンダーランドだが、物理法則とかそこらへんのものを放棄した訳じゃあなかったはずなのだが。

「異次元ですか？　異空間ですか？　それともブラックホール直結ですかア？！」

「知るかアアアア！！」

だいぶテンパってる新八の叫びに、ほとんどやけっぱちな銀時の怒鳴り声が律儀に返ってきた。

「…そこだアアア！！」

ふいに、きらんと長谷川のサングラスが光る。飛び込め、酸素不足の一同の脳は素直にその声に従う。どどどと雪崩れ込むようにして、一同は橋の下ダンボールハウスに滑り込んだ。

吸い込まれる感覚は襲ってこない。ぼちは突然物陰に隠れた彼らを見失ってしまったようである。

掃除をいったんやめて空をゆつくりと泳ぐこいのぼりは、一行を諦める気はないらしい。眼光は鋭く、逃げた獲物を探している。

彼らのいるダンボールハウス周辺から動く気配のないぼちを伺い、一同は大きく息を吐いた。

「…この依頼は失敗だな」

「つーかムリアルあんなん…」

「どっかのバカのペスよりヤバイですよ…」

「…ゴメン、それ思い出させないでくれるかな」

はああ。重い溜め息が狭苦しい室内に響く。

「…ったく、なんかもー、この時代来てからロクなことねーよ俺…」
ふうと疲れたように一息吐いて、おもむろに銀時が立ち上がった。
なんなのかなー、俺厄年じゃあねエはずなんだけどなー。ぶつぶつ
云いながら腰に下げた木刀をすらりと抜き、軽く振ってその感触を
確かめている。

銀さん？ 銀ちゃん？ 口々に呼びかけられ、少年はついと新八と神楽に瞳を向けた。

死んでいるわけでも、一瞬だけ煌くでもないその瞳。

けれど黙めてぎらぎらとひかっているのでもないそれは、ふたりの知らない、ひとりの少年の瞳だった。

「いつまでも逃げ回ってる訳にも行くめえよ。…俺があこのいのぼりひきつける」

「…え?!」

その言葉に新八は思わず声をあげた。駄目ですそんなの、危ないですよと制止すれば、銀時はなアになんとかなるサと軽い調子でうそぶいた。

「アイツだつて暴れたくて暴れてる訳でもねエンだろ。母ちゃんとはぐれツちまつて癪癪起こしてるガキとおんなしさ。だつたら母ちゃんと会わせてやりや、あのやんちゃも止めんじゃねエか？」

彼の云わんとしていることを理解して、新八は彼を見上げる。今の状況からすると、確かにそれが最善策に思える。しかし云うまでもないことだが、囹の役割を引き受ける彼が一番危険であるのだ。依頼人は江戸の住人ではあるがここからは少々遠い。往復で数十分あるいはそれ以上。彼が強いということは重々知っているつもりだが、依頼内容は捕獲であつて退治ではない。下手に手を出して傷つけるわけにはいかないのである。ただ倒せば良いだけの戦いとは勝手も違おう。

云い出した彼とてその辺りのことは承知済みであるのだろう、心配げに見上げることもたちを安心させるように、にやりと不敵に笑んで見せた。

「暴れても差し支えのねえ場所までアイツ誘導すつから、お前らその間に飼い主のガキ連れて来い。そうすりゃアイツも落ち着くだろう。いいな？」

「……わかりました」

「了解アル！」

「え、俺も？」

「——来やがれボロ布エ！俺が相手してやんよ——！」

雄叫びと共に河川敷へ飛び出した銀時と同時、新八と神楽と定春、ついでに長谷川は少年とは逆方向に走り出した。

銀さん無事で、心の中で呟いて、新八は走る足に力を込める。信頼していないなんてことがあるはずない、けどやはり心配なものは心配なのである。ちらと彼の様子を伺おうと振り向いた新八は、思わず肺の中の空気を使い切る勢いで喚いてしまった。

「……ちよ、なんでこつちついてくんのオオオオオ？！」

ぼちは銀時の頭上を飛び越えて、一直線に新八らに向かって迫ってきていた。それによかったアルな新八と暢気とも云える声で揶揄したのは神楽である。

「お前えいりあんに大モテアルな。女にはモテないけど」

「嬉しくねエエエエ！」

ていうか何、悪いのは僕なのか。追いかけてる原因、僕なのか。

こんな状況でも毒吐くことを忘れない少女に、いつもの習性で突っ込んだのが悪かった。

「ぶっ?!」

逃げることに必死であつたのと、隣を走る神楽に顔を向けていたのと。そのため新八は前方の障害物に気づかず、思いつきり顔面を打ちつけた拳句尻餅をついてしまった。新八君、長谷川の焦った声が聞こえる。いててと鼻面を押さえる彼に、大きな手が差し出された。大丈夫ですか、気遣わしげな声におのれが衝突したのが人であつたことを知り、新八は慌ててハイ平気ですいませんと顔を上げる。そしてその声の主を確認し、——ぴきんとそのまま固まつた。

「へ、ヘドロさん!!」

思わず悲鳴に似た声が出てしまったが、それは完璧不可抗力だ。なんせ傍若無人を地でいく神楽でさえ、このお人の前では冷や汗を流す。

——2メートルを超える巨軀、凶悪なまでの御面相、頭に咲いた一輪の花がトレードマークの彼は間違えようもない、隣のヘドロさんだった。

「すすすすイマセン!! 僕前よく見てなくて!! すんまつせん、ホントすんまつせエエん!!」

スライディング土下座で命を乞う新八に、顔を上げてくださいと屁怒組はあたたかな言葉をかける。

「いやいや、こちらこそすいませんでした。怪我はなかったですか

新八君」

「は、はい！ 大丈夫です！ ホントっ失礼致しましたヘドロ様アア！！」

「いやヘドロでいいですよ」

出会えば必ずやつてる恒例行事を繰り返す彼らに、銀時の鋭い声が飛ぶ。

「お前ら何やってる！ 早く逃げろ！」

突然のヘドロ登場に隣で凍っていた神楽が、背後を見てうげっと女の子らしからぬうめきを漏らした。

「新八早く立つアル！ 来たア！」

「え？ うわア？！」

巨大な空洞がそこにぼっかりと開いているのを見つけて、新八は悲鳴を上げた。彼我の距離はもう幾らもない。

あたふたと立ち上がる新八と彼らへ向けて走ってくる銀時、そしてそれを追うぼちをみて、屁怒組はひとり合点したようにうなずいた。

「ああ、おいかけてこしてたんですか。でもちゃんと周囲に注意しないと危ないですよ。何かにぶつかって怪我でもしてしまったらいけないですから」

「……スンマセンっしたヘドロ様アア！！……」

「いやヘドロでいいですよ」

くわっと顔の陰影を濃くした屁怒組大統領の顔の恐さに、一同全員五体投地。

そんな愉快なやりとりを繰り返している間にも獣の如く口を開けたぼちが迫り来る。優雅に動く尾鰭は電柱を破壊し、ばりばり叫んでいる電線に触れてもまったく意に介さない。あんな化け物どうやって捕まえろって。現実逃避に似た思考。あとほんの数尺。吸い込む風は感じない。それでもこれっぽちの距離ならば、もう逃げることさえままならないだろう。なんせ彼の口は大きくて、新八ら全員を一息に飲み込んでしまうことなど簡単なのだ。

食われる、最早悲鳴を上げる間すらなく、新八は覚悟を決めて目を閉じた。

「駄目だよ君も。元気に遊ぶのはいいけど、周りの人に迷惑かけちゃあいけない」

屁怒組の声が静かに響く。

声が聞こえるってことは、まだ生きてるってことだ。覚悟していた痛みも何もないことに気づいて、新八はそつと目を開けた。

「……………へ？」

そして間抜けな声を零す。

—— ぼちは大きな真円の瞳を波打たせて、傍目にもわかるほどがたぶると震えていた。

説明を求めるように銀時らを見ると、彼らは一様に青い顔をしている。… なんかわかった。

そうだよね、ヘドロさん怖いもんね。同情を含んだ眼差しを向けられたぼちは、あまりの恐怖ゆえかしゅるしゅるぽんつと間抜けな音を立て、スーパーのおまけで貰えるくらいのミニチュアサイズまで縮まった。すかさず神樂がわしづかみ、用意していた麻袋の中に放り込む。

捕獲完了。

後刻連絡を受けてやってきた依頼主とそのお子さんは、ペットの無事な姿に大喜びし、依頼料も大分弾んでくれた。頭を下げつつ帰っていくその後ろ姿に手を振って、さてじゃあ僕らも帰りましょうかと話もまとまった時、こつりと新八の足に当たったもの。

あ、オモチャとか餌とか返しそびれてた。いつの間にか落としてしまっていたそれらを拾い上げて呟いたが、依頼人の姿は既に見えない。後で返せばいいだろそんなもん。面倒臭そうな銀時の言葉に新八もそうですねと返す。それじゃ長谷川さん、さようなら。すっ

かりバイトに遅刻するハメになってしまった男に声をかけると、彼は何故か難しい顔をしていた。

どうしたネマダオ。小首を傾げて神楽が問えば、それには答えずまったく関係のないことを口走る。

「……あの種族ってさア、結構、鼻、いいらしいよ」

ぼつりと漏れた呟きに、あれのどこに鼻があんだと突っ込む輩はいなかった。

匂いがついてたとかお腹減ってたとか、そういうオチアルか。そういうオモチャとか餌とか預かってましたもんね、出番なかったですけど。なんだ、もしかして俺の予想が大当たりか。

沈黙。

すっげーくだらねえ理由で追っかけられてたのだと理解して、疲労が何倍にも増して襲ってくる。

「……………帰りましょうか」

「……………おー」

「……………腹減ったアル」

「ワン」

からすがなくから、かーえろ。なんかいろいろとやるせない気分
で、一行は家路についた。

足元に転がるものを蹴飛ばして

かんと甲高い音を立てて八つ当たりを受けたスチール缶は、まる

で明後日の方向に飛んでいった。

*** 0 1 4 *** 足元に転がるものを蹴飛ばして（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました。また感想送ってください皆様、本当にありがとうございます。機動力となっております。こんなザマですが。

さて次回、いよいよ狂乱の奇行子の登場とあいなる予定です。あまり期待しないでお待ち下さい。

それではまた次話にてお目にかかりましょう。ありがとうございます。でした。

*** 015 *** 突拍子もない願いだとは理解しているけれど、（前書き）

お待たせしました、第15話をお届けします。

ようやくリクエスト第二位の男が登場です。ご期待に添えられていますかどうか、とりあえず本編をお楽しみください。

* 015 * 突拍子もない願いだとは理解しているけれど、

さんざ見飽きた、好き勝手な方向へと跳ねる銀髪。

数えるのも馬鹿らしいほど長い付き合いの幼馴染の姿を雑踏に見つけ、エリザベスと連れ立って歩いていた桂はその背に声をかけようとした。

しかし音を発しようとした瞬間、ふいに感じた違和感に口をつぐむ。柳眉を寄せてしろい背中を凝視するが、胸中に沸いた疑問の正体はわからない。なんだこれは。あれはおのれの腐れ縁であるのは間違いないのに、妙な感覚がそう断言するのを赦さない。

「……銀時、か？」

結局短い逡巡の後零れた声は、多大に疑問符を巻き散らかす間抜けなものとなっていた。

「——ッラ？」

振り返った深紅の瞳は、人ごみの中で迷うことなく桂を射抜いた。きょとんと見張ったそれは死んでいない。桂はそれにはっと息を呑む。何の冗談だこれは。何故今更になつて。帰ってきてくれたのか。帰ってきてしまったのか。刹那にそんな思考が過ぎた。おのれは歡ぶべきなのだろうか、それとも哀しむべきなのだろうか。眼前には色味のないその瞳。男。——少年。

振り向いた人間はまったく坂田銀時でしかなかったが、それは桂の記憶の中の坂田銀時であった。否、これではまるで、——白夜叉、だ。

すうとひとつ深呼吸をする。意識して落ち着こうとする自分をいささか滑稽にも感じたが、致し方あるまい。狼狽し取り乱すような醜態を晒さずにすんだことは寧ろ上出来である。一瞬だけ目を閉じて、すぐに目蓋を開けた桂は、既にいつもの彼であった。

「ッラじゃない桂だ。……しかしまた、随分と懐かしい姿だな。何が

あつた」

『なんか若返ったりとかしてないコイツ?』と看板出してるエリザベスを伴い、足早に追いつき隣り合う桂を見る銀時は、やはり視線がだいぶ低い位置にある。何があつたかなんて、そんな俺のほうがりてーよ。ばやく彼は平素よりも子どもっぽい。その姿は桂の知る、現在の彼よりもまだ生き方を知らない少年そのものであつた。

「つかお前さ、その少年はじろじろと桂を値踏みするように眺めまわす。

「…なんか、フケた?」

その言葉に彼はまさしくあの頃の少年なのだと理解する。「この銀時」はこれから起こった様々なことを知らない。湧き上がる哀れみに似た感情を押し殺し、桂は精々心外そうにふんと鼻を鳴らしてやる。

「当たり前だ、俺が今幾つだと思っている貴様」

先の戦争が終結してはや数年。二十やそこらだった自分たちも大概いい年になった。というか、おのれよりもほど所作が親父臭いこいつにだけはフケたとか云われたくはなかった。マジで。

ますます説教ジジイに近づいてらア。銀時は暴言に渋い顔をする桂をけらけら笑い飛ばす。いっそうの渋面を作る旧友を、それはともかくとさらりと流し、少年はにやにやと意地の悪い笑みを桂に向けた。

「そっぴやお前、何? 指名手配食らってんだって?」

知っているのかと問えばメガネとチャイナに聞いたとの答えが返ってくる。ああ、新八君とリーダーか。得心して相槌する桂に、銀時は妙なものでも見たような顔をした。

「…リーダーって何? お前いつの間にあんな年下の女に忠誠誓ったの」

「俺はイエローだからリーダーの命令には従う義務があるのだ」

「イエローって何。何の戦隊モノだよ」

「戦隊モノじゃない、いや戦隊モノだけど。忍者戦隊ゴニンジャーだ」

「だから何それ？」

「ちなみにお前はニンジャーホワイト、新八君はニンジャーホルスタインだったか」

「…それ、忍ぶ気ねエよな？　どこの武田の迷彩忍者？　そして俺も参加してたんだ？」

「とりあえずリーダーはおいておいてだな、本当に一体どうしたんだお前」

「うつわーこの話の通じなさ加減、久々だと苛立だしさ倍増だなアオイ」

口許をひきつらせて半眼で睨まれたが、いつものことであるので気にしない。視線で促せば、彼はがりがり収まりの悪い頭を掻き回した。

「…なんか、ガキ共の話だと、未来の俺と今の俺が、入替わっちゃったんじゃないのかってことだけど。よくわかんね」

寝て起きたら、なんかこうだった。

遠いお空を見詰めてばやく彼の横顔には哀愁が漂っていて、桂は目頭を押さえたくなる衝動をかううじてこらえた。流石のこいつも、かぶき町の濃い面々には精神疲弊も激しいらしい。というか、こいつ本当にトラブルホイホイだな。ときたまトラブルを持ち込んだりする本人には同情されたくもないだろうが、そこはビルより高い棚の上に上げておく。

「ヅラよー、未来ってエのはこんなことが普通だったりすんのー？　なんか俺、こっち来てからロクな目に遭ってねエ気がすんですけど」

「ヅラじゃない桂だ。いや、流石にそれはない。というか、そんな非常識がそうそう転がっていてたまるか」

「だろうよ」

気のない返事を返す彼の視線が、桂の隣で『また面白いことにな

ってますね』と看板出してるエリザベスに向けられる。

「…で、気になってただけだ、お前のツレのその気持ち悪いオバQもどきはなんなんだよ」

「オバQじゃないエリザベスだ」

隣で『オッス、オラエリザベス』と看板を掲げるエリザベス。その可愛らしい様子（桂ビジョン）に、桂はわずかに緩ませた口許を誤魔化すように拳を当てて咳払いした。

「…少し前に坂本の奴が押しつけていったのだ。しかしまあ、奴もたまにはいいことをするな。今では俺の右腕といってもいいほどだ」

「…え、マジで？」

驚く（というか呆れる）少年に気をよくして、桂はペット自慢を続ける。

「エリザベスは凄いいんだぞ。お使いもできるし家事もできる。読み書きは俺が教えたのだがな、お前などより余程覚えが良いわ。リーダーシップもあるのだぞ、不在の時には同志たちを纏め上げてくれた。どうだ、エライだろう」

玩具を見せびらかすことのように自慢げな桂に、エリザベスが『いやだ桂さん、おだてたって何にも出ませんよ』と看板を掲げながら、頬に手を当て身をくねらせる。それに愛い奴めと笑えば、なんか顔をひきつらせてる銀時が視界の端にひっかかった。

「…ちよ、なんかお前キモさに拍車がかかってねえ？」「ウザい」
が寧ろ褒め言葉になりつつあんだけど

オッサンな分余計にタチ悪イってか気持ち悪い！

ドン引きしてる銀時にそうと気づかず、桂は少年の暴言を笑い飛ばす。

「はっはっは、なんだうらやましいか、そうだろうエリザベスはできたペットだからな。だがこんなエリザベスにも定春殿には敵わぬところがあるのだぞ。あの肉球ともふもふの毛は、エリザベスは持ち合わせていないからな。羨ましいぞこいつ」

「ウゼエエエ！！ 何こいつウツゼエエエエ！！」

死んでくれないかな、ほんと一回死んでくれないかな！

つん、と額を突かれて、銀時は本気でこの旧友に殺意を覚えた。いや、一回死んだくらいで治る馬鹿じゃねエやな、とりあえず五、六回ぼてくりこかすか。

よし、ヤろう。

身体の底から湧き上がる衝動にゆらりと木刀に手を伸ばせば、しかし場の空気などまったく読まない馬鹿の暢気な声。

「しかし、寝て起きたら違う場所にいましたとか、なんの二次元展開だ。心当たりはまったくないのか？」

ズレまくった話を今軌道に戻したのは、天然か、計算か。おそらくどちらもなのだと理解しつつ、出鼻をくじかれてしまった銀時は溜め息を吐いて右手を下ろした。

「……知らねエーよ。つうかね、それは俺が一番知りてエの。だつてトンネル抜けたとか筆筈ン中入ったとか、そんなもんねーんだぜ」
「まったく何もないのか？ よく思い出せ。ここに来る前、何をしていた？」

桂の問いにうーん、と中空を睨み、記憶を手繰り寄せようとする銀時は、意味不明なうなり声を発して首を捻る。

「あー…、ここに来る前なア。…確かひとりで突っ走ってたら辰馬とはぐれちまったんだよ。それで仕方ねーから野宿して、目エ覚めたら万事屋とやらだったっつー訳だ」

「それでは判らん、お前がひとりで突っ走っていった拳句迷子になるのはいつものことだったろう。いつだ」

「日付なんていちいち覚えてると思うか？」

それはそうなのだが。

「…なあ、ツラ」

ふいに、少年から低まった声がこぼれた。

俺たちは、負けたのか。

基本的にだらけきった彼にしては珍しい、囁くような、そして風いだ湖面を思わせる静かなものだった。

「ああ」

なんでもないことのように、桂は少年に事実を告げた。まだこれから戦っていかねばならない少年に、とても残酷な事実を告げた。そうか、と呟いた少年に、特に感情の波は見られない。内心でどう思っているかまでは、桂にはわからなかった。彼は昔から、本心を隠すのがこの上なく巧い。

銀時の、ひとりごとにも近い問いは続く。

「いくさは、終わったんだな」

「ああ」

「それで、お前はまだ、戦ってたんだな」

「ああ」

「高杉も、辰馬も。どっかで手前エのいくさを、続けてんだなア」
高杉。

隻眼の幼馴染を思つて、少しだけ目を閉じる。——この少年の頃は、死以外の離別など夢にも思っていなかった。

「……ああ」

そして、お前もだ。

桂は少年に向けて、噛み締めるように、そのひとことを告げる。桂のよく知る、この少年の知らない、しろい男のことを。強く。

「お前もまた、今なお戦っているよ。銀時」

「——そっか」

少しばかり目を見張った彼は、吐息と共に呟きをこぼして、まるで少年のように、笑った。

その笑い顔にはっとして——桂が何も云えずにいる間に、銀時はそんじやな、と手を上げて辻を曲がって行った。

「銀時！」

思わずその背に叫んだ。何も変わらぬ、白い姿。

しろい少年は振り返らない。

「俺はあのひとを奪った幕府を許さん。この世界を何度更地に変えてやろうと思っただか知れぬ」

それはこの少年とても同じであつたはずだ。否、仲間内の誰よりも、その怨嗟の念は強かつた。彼はあまりにも純粹すぎたから、師への敬愛も、それを奪ったものどもへの憎悪も、うつくしいほど純粹であつたのだ。

「——だが、大事なものができたのだ！ この江戸の街に！」
相方である宇宙生物や、頭と慕ってくれる同士や、行きつけのラーメン屋の店主や、彼の養うこどもたちや、この街に生きるものたち。いつのまにか手にしていたその縁は、知覚してしまえばもう手放しがたいものだった。

「俺は俺のやり方でこの国を変えてみせる。お前も、お前の好きなように生きている。戦っている。お前はお前の、大事なものを守るために」

だから、

そこまで云つて、桂はふと続ける言葉に迷い、口をつぐんだ。銀時はそんな彼の想いを知つてか知らずか、振り返らぬままひらひらと手を振つて、そのまま歩み続ける。

立ち去る少年の背は酷く白けていて、しかしまるで色の錯覚を促す騙し絵のように、彼は深紅に染まつて見えた。

たぶんそれがこの男の業である。仲間を、大事なものを護るために立つたはずの男は、しかし何よりも戦場が似合つた。血煙のため重く垂れ込める曇天の下、誰よりも赤く染まりながらもなおしろい男は、確かに鬼、いくさを愛する阿修羅の仔である。

そのしろさは男の罪悪であり、救済であつた。そのどちらも彼のものではなかつたが、それは確かにこの男の放つ光であり、抱える闇であつたのである。

戦が終わりに、生死さえ判らなかつた戦友の消息を知つたのは偶然であつた。江戸に潜伏している同志の一人が、それらしき男を見たと言つてきたのである。戦場での彼はこの上なく眼を惹いた。その苛烈な強さと鮮烈なしろがねは、一度見たら忘れられるものではなかつた。おまけにあの見目である。本人である可能性は高い。その男が入つていったという家屋を張つて数刻、立てつけの悪そうな玄關を開けて出てきたのは、はたして坂田銀時その人であつた。

無事であつたという安堵と、また共に戦つてくれるかも知れぬという喜びが胸のうちを満たした。しかしそれは、彼に続いて現れた少年と少女によつてすぐさま疑問へととつてかわつたが。

はじめはおかしな取り合わせだと思つたのだ。白夜叉と年端も行かぬこどもなど。明るく笑顔の似合うこどもたち、安っぽいビニールの安い物袋、中古のスクーター、気安げに声をかけてくる街の人間。そんな平穩な日常を象徴するものに囲まれて暮らしているその様があまりにもそぐわないことこの上なく、また何をはじめたのだこの男はと呆れかえりもしたものだ。予想の斜め上45度あたりをアクロバットしているにも程がある。

だがこどもたちと共に夕暮れの家路を辿る、その姿はあまりにきれいであたたかく、それもまたあの男に似合つていたことも事実であつた。

真っ赤に染まつた顔は血潮ではなく暮れなずむ夕陽の欠片。その顔は凍りついた修羅ではなくおだやかな笑みを刻む。彼の男を真ん中に、両側をこどもたちの穢れを知らぬ手がつなぐ。まっすぐに伸びた影はみつつでひとつ。まるであたりまえの家族のように。

男は腰に差料を差していた。しかしそこに刃金のかがやきはない。木目もやわらかな木剣である。彼は元から腰にあつたはこれであると云わんばかりに、何の無理もなくごく自然な感じで、飄々と生きていた。

てらいもなくやいばを木刀へと持ち替えた男へ、怒りを感じなかつたと云えば嘘である。しかし、こどもたちや、階下の女や、幕府

の狗や、街の人々の中にいる彼は、まるでこどものように、とても楽しそうに見えたのだ。

こどもたちとにぎやかに騒いだり、家賃が払えずに大家に強制労働させられたり、警察の厄介になったり、お節介を焼いたり、時たま面倒ごとに巻き込まれ派手な喧嘩をしたり、あげく入院などするはめになったり。そんなふうに、迷惑と親しみをばら撒きながら。そうして生きていたのだ。普通に。

それを眺めているうちに、桂も気づく。面倒臭そうな表情に巧く隠した、やわらかな笑み。こどもたちや周りの人々に向けられたそれは、いつかどこかで見たかもしれない、心底嬉しそうな、見ているこちらまでつい微笑んでしまうような。…あのひとの、ような。それを理解したとき、ああ、と桂は息を吐いた。こどもたちとにぎやかに騒いだり、家賃が払えずに大家に強制労働させられたり、警察の厄介になったり、お節介を焼いたり、時たま面倒ごとに巻き込まれ派手な喧嘩をしたり、あげく入院などするはめになったり。

——それが、彼のさいわいである。

悪夢に怯える夜もあるだろう。憎しみの埋み火がふと燃え上がる日もあるだろう。けれど彼はそんなもんうつちゃって、クラゲのようにふらふらと、なんでもない毎日を生きているから。——満ち足りた表情で、生きているから。

（はやく、あいつも知ればいい）

今の彼が、その背と両腕に後生大事に抱える荷物いしづくの存在を。

詮無いことだと零れる苦笑を噛み殺し、桂はエリザベスを促して日暮れの江戸を歩き出した。

突拍子もない願いだとは理解しているけれど、

知ればいいのだ、今のお前には想像もつかぬだろうことを。たとえばこどもたちを前にしたときの、いい年こいたオッサンのにやけた顔などを。

*** 015 * 突拍子もない願いだとは理解しているけれど、（後書き）**

ここまでお読み頂きありがとうございました。

あれーなんか中盤から似非シリアス。どうしたんだろう、なんか悪いものでも食ったんだろうか、ヅラ（ヅラか）。あんまり電波してないので、消化不良な感じです。

ていうか、ソラチ神ですね。なかなかあの壊れっぷりはシラフでは描けません。頑張っであのレベルまでいききたいものです。常識的な一般人としてどうかと思いますが。

それでは、また次話にてお目にかかりましょう。ありがとうございました。

*** 0 1 6 *** 随分頭が弱くなったね（前書き）

えー、お待ち頂いて下さっている方がいたとしたらゴメンなさい。
お久しぶりです銀猫です。前から三ヶ月経過…！いや、もう、ホントにすみませんでした。

今更ですが、年始にぎんたま小説に感想、メール下さった方々に、
あけおメールとSSをお送りさせて頂きました。が、なろうリニユ
ーアル以前に頂いた方に関しましては、メールをお送り出来ません
でした。ですので、もしも

「感想、メール送ったのに来ていない」

「書き込みしてないけどSS欲しい」

という方がおられましたら、ご連絡下さい。

それでは本編をお楽しみ下さい。今回は遅しい彼女たちと、某モジ
ヤ毛が出てきます。

* 016 * 随分頭が弱くなったね

「久々に依頼が入りましたよ銀さん神楽ちゃん！」

「「おおっ?!」」

電話を置いた新八の嬉々とした声に、呼ばれた二人も顔を輝かせた。

実に数日振りの仕事である。これでご飯と味噌汁のみという悲しい食生活から脱出できる、と一同は手を打ち合わせた。

「それで、依頼内容は？」

せつつく銀時に新八は笑う。その笑みがどこか乾いたものであったことには、まだ出会って日の浅い少年にはわからない。

「西郷ママさんのお店の助っ人です。なんか人手が足りないらしくって」

「ふっん？」

「……。あー」

途端神楽がなにかを悟ったように半眼になって頷いたことは、知らない名前に首を傾げる少年には見えていない。

「うし、ンじゃあ行くとすつか」

「「おうっ」」

立ち上がり玄関へ向かっていった少年には、背後でそれぞれなまぬるい顔をするこどもたちを知る術はない。

そして半刻後。

銀時は呆然と立ち竦んでいた。

「きゃあ、何アにイパー子、アンタ今日いつもよりずっとカワイイじゃなアい」

「そおよう、もー、これじゃあお客みんなとられちゃうわア」

少年を取り囲むのはムサイ……否、いかつい、ではなく、少々たくましい女性（モドキ）たち。

彼女（……）らの中心にいる銀時も、志村家貸与の小袖と袴姿ではなかった。

銀色ウィッグのツインテール。もとの色が白いのでファンデーションは薄く乗せるだけ。シャドウとルージュは着物に合わせたパールピンク。

頬から顎にかけての線が細く、色の白い銀時は、少年といえる年頃である分、いつものパー子より大分女装が似合っていた。似合いすぎて逆に笑えないくらい似合っていた。

「……ザッケンなアアアアアアアア！！」

多分卓袱台があつたら確実に星一徹クラッシュをかましていただろう。青筋浮かべて怒鳴った少年は、周囲を取り巻くオカマ共を薙ぎ倒す勢いで新八に掴みかかる。

「ちよつとオイ何これ！ 何これ？！ 何で女装？！ 何でオカマバアアアアア？！」

「依頼です」

叫ぶ銀時もといパー子とは対照的に、既に諦観している新八もといパチ恵は胸倉を掴まれながらもそっけなく答える。

「そうヨ銀ちゃん、じゃないパー子。生きてくためヨ、時には手を汚さなくちゃいけないときだつてあるネ」

「つーか今の俺たちのカツコがヨゴレそのものだよな？！」

女装した少年ふたりを冷めた眼で眺めていた神楽が、冗談か本気かわからぬ口調で云つて、つまりはいつものようにボケて、間髪入れず銀時に突っ込まれる。

新八が襟元を直しながら、ボケてツッコむ仲の良いふたりの片方をたしなめる。ほとんど溜め息交じりだった。

「いい加減諦めてくださいパー子さん。前やった時だって結構ノリ

ノリで踊ってたじゃないですか」

「そうアルヨパー子、銀ちゃんさりげ嫌がりながらも結構女装やつてるネ。銀子とかパー子とか」

「……………歳食うと、そこまで開き直れるモンなのか……………？」

知りたくなかった事実^に毒気を抜かれ、銀時ヒートダウン。

「……………ちなみにパー子って、何？　つーか、俺のこと？」

「銀さんのこのお店での源氏名です」

「クルクルパーのパー子アル」

「せめてそこは天然パーマのパー子にしてくんない？！」

依頼を受けてからものの三十分で気力をこっそり持ってた銀時が、床に両手を着いて将来のこととか男のプライドのこととか生活費のこととかについて思いを馳せていると、更に追い討ちをかけるように、聞き飽きた声が聞こえてくる。

「何に絶望しているのか知らんが——」

ぴくりと銀時の身体が強張る。彼の横についておざなりに慰めていたこともたちは、呆れたり胡乱げに睨んだり。

「侍たるもの、何があるうと常に背筋を伸ばしてあるべきだ。まったく情けない。ほら、いつまでも床に這い蹲っていないで、立たんか銀時」

思考停止。停止。停止。停止。

強制終了。再起動。起動中。起動。

「……………、……………」

なんか色々云ってやりたいのに言葉が出てこず、ただ呆然と見上げるばかりの少年を睥睨し、その人物はふんと鼻を鳴らした。

長い黒髪が麗しい、江戸紫の派手な着物を纏った、玄人筋の美女少々体格がいいことにさえ目をつぶれば、女以外のなにものにも見えない。

しかし、ここはオカマバーだった。つまりそういうこと。

そして彼女は化粧こそしていたが、その顔はとてもとても見覚えのあるものだった。

「……………え？ ……ちょ、え、……………え？ 何、ちょ、ツラお前、何してんの…………？」

「ツラじゃない、ツラ子だ」

桂を指差しあんぐりと口を開けたまま、助けを求めるように銀時は新八に視線をやる。相変わらずどつか投げやりな様子のこどもは、ふいと視線を逸らしながら彼の疑問に答えた。

「……………なんか、時々ここでバイトしてるみたいですよ、桂さん」

「何、西郷殿とは知らぬ仲でもないからな。助力を乞われれば応じるのは当然のこと。——時給も良いしな」

攘夷を為すには金がかかるのだと真顔で云い切る桂に、がつくりと銀時は頂垂れる。

「……………こんなところで稼いだ金を使われてまで、国も救われたくねーだろうよ…………」

もつともだ、とこどもたちも思ったが、それを口にせぬだけの分別は持っていた。

ぱんぱん、と手を叩く音が、彼らの注意をさらっていく。

「ほら何やってんのよアンタたち。いつまでも遊んでないで、さつさと仕事にかかりなさいよ」

白髪を島田に結った化け物、もとい巨漢、でもなく筋骨隆々たる女性に睨まれ、少年はやれやれと頭をかいた。どうやらそろそろ、本気で腹をくらねばならぬらしい。

「……………しゃーねーか。……………そう、生活費のためだ。生きるためなんだ。たかが女装でなんだ俺。頑張れ俺。俺はやれば出来る子だ。ウン」

心底マジで自分に云い聞かせている銀時へ軽く憐みの視線を向け、新八と神楽は心の中で合掌した。いたいけっぽいこどもにこんな仕事させてごめんなさい。でも結構自業自得です。

「そうよパー子、頑張りましょう。私たちふたりでツートップを張ったじゃない」

「冗談だよな。冗談なんだな。冗談じゃねエとか云い腐ったらブン

殴るかなツラ子」

しなをつくる桂に、自己暗示をかけていた銀時は、瞬間的に青筋立てて拳を握る。もうなんだろうコレ、殴っちゃってもいいよねコレ。殴っちゃったとしても情状酌量つくよねコレ。だってすっげえ腹立つもん。

体中からなんかオーラのものを発している少年を、こどもたちがなだめにかかる。

「銀さん銀さん、落ち着いてください」

「そうヨ銀ちゃん、ツラの戯言は今に始まったことじゃないアル。

……ツラア、銀ちゃんをそっちの道に引きずり込むんじゃないネ、オカマの星だったらお前ひとりで目指すがヨロシ」

「いや、リーダー、俺もそんなものを目指した覚えはないのだが」
神楽の発言には流石に突っ込む桂だが、

「何云ってるアルか、やるからには何でもてっぺんを目指すのが男アル。男として生を受けたからには、例えばオカマバーで働くにしても一番を目指すのが当然ネ」

「……むう……。……それは正論か」

あっさりと云いくるめられる。一回り以上年下のこどもに。

ヨシ、ツラ子起動アル！ かぶき町中の男共を力モにしておしま
い！ ルージャ！ ヨシ！ それじゃあ手始めに、これから私のこ
とはリーダーではなくかぶき町の女王とお呼び！ 了解しました、
女王陛下！
ミレディ

ボケの連鎖が止まらない桂と神楽を、銀時は呆れた目で眺める。

「……なんか、色々はっちゃけたな、あいつ。電波気味なのは相変
わらずとして」

「あ、そうなんですか？」

新八が軽く驚いたように相槌を打ったので、少年はなんか遠い目をした。つまり、昔はもうちょっとまともだったと云えば驚かれるほど、あの馬鹿の馬鹿は定着している訳だ。少なくとも少年の知る桂という男は、志高く潔癖で、誰かに女装などさせられようものな

ら刃傷沙汰にもなりかねないような人間だった。しかし今の桂は、結構楽しそうに女装しているように見えるし、周囲の反応としてもただ呆れて溜め息をつくだけである。なんとも変わったものだ。それがいいことなのかわるいことなのか、今の銀時にはわからない。

しろい少年は苦笑し、隣に立つこどもを見る。今のおのれとそう年齢の変わらない、しかしいくさを知らぬこども。彼の後に続く世代。奇妙な現実には、おかしみを感じてならない。

「おう。俺の知ってるこいつはもっと、なんかこう、堅物石頭の頑固ジジイだったわ」

「あー……。まあ、いいんじゃないですか？　丸くなったってことでひとつ」

「……………いいのか…………？」

簡単にまとめたこどもに銀時は首を捻るが、その気軽な容易さに笑いが漏れる。苦笑に近いものであったけど。

このこどもたちにとっては、さして重要なことではないのだ。そしてそれは今日は曇りだねとか、そろそろ秋が来るねとか、その程度の気安さで受け入れられることなのだ。銀時がいとも簡単に受け入れられたように。

なんだ、こいつも生きてるんじゃないか。少年はこみ上げてくるおかしみのまま、微かに喉を震わせた。肩肘張ることもなく他愛もなく、彼らは生きている。戦を知らぬこどもと笑いあって。

女装はとてつもなく気が重い、それもまた生活のため、生きていくためである。

もう二度とやりたくはないが。ていうかホントにもう帰りたいんですが駄目ですか。

「いつまで遊んでんだ、さっさと接客しろやゴルァ！！」
駄目なようだ。

「パー子オ、ツラ子オー。六番テーブルに入ってちょうだアイ」

承知。……ヘーい。どっかの燃える闘魂を持つプロレスラーのよくな顎を持つ女性――（最早何も云うまい）に指名された二人はそれ

それ返事を返し、楚々と、あるいはやる気なく、指定された席へ向かう。

そしてそこに座る客の姿を認めた瞬間、銀時は宙を駆けていた。

「たーっ！まアアアアー！！」

「ごふウツツ?!」

一系乱れぬドロップキックをかまされて、その男はエネルギー保存の法則に従い、軽やかにぶっ飛んだ。どがごしゃがらしゃあ！！というなんともいえない擬音と共に沈んだ男の胸倉をすかさず掴み上げ、銀時は力の限りがくがく揺さぶった。今までに被ったストレスとか心的苦痛とか疲労とかの分まで叩きつけるように、つまるどころほとんど八つ当たり同然に、容赦なく揺さぶった。

「ンのモジャ毛何してやがんだっ！かなんでいんのねえお前なんでこんなとこにいんの野郎のケツ追っかけてきたのかそういう趣味だったのかよしお前もう金輪際俺に近づくなそして死ねエエエ！！」

「銀時、坂本が死にそうだ。本気で」

とりあえず落ち着けと止められて、銀時はち、と舌を打って手を離れた。万有引力に従い、長身がどさりと地に伏せる。脳をシェイクされ、若干くたばってる状態でなおへらへらしている、見飽きたそれより老けた顔二号を見下ろして、銀時は凶悪な顔で、物凄い勢いで長椅子に座り込んだ。その隣に桂が綺麗な所作で腰を下ろし、次いで坂本がよろよろと這い上がった。

「……で、何でお前オカマバーなんかにいんの。そんな趣味だったのか」

知りたくもなかった仲間の性癖に、銀時は汚らわしいものでも見やるような視線を送るが、そんなもんには気づきもしない、もしくは気づいていても気にしないのが坂本という男である。

「いやア、久々に地球に来とーぜ、おまんらにも会って行こうと思

つてのう。ここを通りかかったら、ちょうどツラのペットが客引きしとつて、これは寄つてかにやと思つた訳じゃ。まさか金時までいるとは思わなかったがちゃ。アッハッハ！」

「金じゃなくて銀だつてんでんたるボケ」

朗らかに笑つた馬鹿の後頭部を持つてテーブルに顔面叩きつけた銀時は、やけくそのように杯を煽つた。普段呑むような水つぽい粗悪品ではなく、琥珀色の美しい、薰り高い蒸留酒である。異国の酒は強く、喉がかつと熱くなる。だん、と透明な硝子をテーブルに叩きつけ、じろりと赤い瞳で何のダメージも受けてなさげな旧友を睨みつけた。

「……ほんつと、空気読むよなアお前、嫌な方向に。なんで来んの、こういうときに限つてさア。つーか、何そのグラサン。ただの馬鹿が胡散臭エ馬鹿にランクアップしてんぞオイ」

「銀時、それは違う。こいつが胡散臭くて馬鹿なのは今に始まつたことではない。ただその色眼鏡で胡散臭さが顕著になつただけだ」

「おまんら二人とも、別嬪じゃのに云うことはきついのー」

それこそきつい冗談だ。銀時はもう一発拳を見舞つたが、桂は真剣にひとつ頷いた。

「綺麗な薔薇には棘がある、と云うからな。つまり、昨今流行りの所謂『つんでれ』というヤツだ。俺は良くわからんが、世の男はそういうのがツボなのだろう」

「………ツラ、お前、何口走つちゃつてんの？」

なんか云い出した幼馴染を啞然として見やれば、幼少時より成長しないクソ真面目な視線が彼を射抜く。

「リーダーに、かぶき町の女王に命令されたからな。男子たるもの、如何な道であろうと頂上を目指すのが本懐。この店で働いている限り、俺は頂点を目指す」

「……いや、お前、今オカマなんだけど」

「うむ。だから今の俺は攘夷志士の桂小太郎ではなく、かまっ娘俱樂部のツラ子として、このかぶき町に君臨して見せよう。とりあえ

ず、当座の目標はこの店のナンバーワンだ」

「お前本当どうしちゃったの?！」

生真面目ゆえの天然な呆けも今に始まったことではないが、ここまで会話にならなかったことはなかったように思う。

「駄目だこいつ電波具合に無駄に磨きがかかってやがる……! ちよ、何この空間、なんかボケばっかりなんですけど、ボケが飽和してんですけど。ムリムリムリ、俺ひとりじゃ突っ込みきれねえよこれエ! …………… 高杉イイイ!! なんつでこんな時にいやがらねえんだ要らねえ時は無駄にいるくせにこの逆KYいい!! お前ちよつとここに来ていそしてこいつらなんとかして頼むから三百円あげるからアアアア!!」

タイムスリップしちゃった時よりも深く絶望して、あらぬ方向へ救助要請する少年に、馬鹿と馬鹿は朗らかに笑う。

「はっはっは、何を云っているのだ銀時。高杉が騒動を収めるのに役に立ったことがはたして今までに一度でもあったか。あれは火のついた空気にガソリンを撒いた上火薬くらい普通に投げ込むような男だぞ。あいつがいたところで場が収まるどころか、さらに騒がしく収集がつかなくなることくらいいい加減学習したらどうだ、何年来の付き合いなのだ貴様」

「あっはっは、金時は相変わらずうつかりさんじゃのお。駄目じゃろー、幼馴染の性格くらい、ちゃんと覚えとかにゃあ」

「っーかいいい加減縁切りてエよ、好きで付き合い長エワケでもねエよコンチキシヨオオオオ!!」

少年の切なる絶叫が無駄に響いた。

口からエクトプラズムのものを吐きそうになりながらも、なんとか仕事をこなしした銀時は、店の裏手でしゃがみ込んでいた。

野次を飛ばしてくるデブやらおさわりしてくるハゲやらをいなしで、お立ち台あるいはホールを忙しく駆け回り、終業時間が来たと

きはものつそい疲労困憊していた。ていうかこの脱力感はなんだろう。戦に出ていたほうがまだマシなんじゃないかと思うのは不謹慎だろうか。

キィ、と軋んだ金属音を響かせて、裏口の戸が開いた。振り返る気力もない銀時の頭上から、聞き飽きた声が降る。

「なんだだらしのない。たった数時間の労働でもうへばったか」

色んな意味と理由で殴ってやりたいその顔をじろりと見上げ、銀時は悪態を返す。

「うつせエよ。つつか、体力的つてより、精神的にキツいんだけど。色々と」

「ふむん？ 確かに職場では職務内容よりも対人関係等のほうが難しいらしいが、お前そんな可愛らしいタマではあるまい？」

「俺の気疲れの主な原因に云われたくねエツてンだよ、ボケ」

「ボケっていうほうがボケなんだぞ」

「なにその小学生の反論。……あー、もういい。ちよつと黙ってるお前」

あーあ、と肺の中の空気を全て出し切る勢いで溜め息が漏れる。

「もー、ホンット勘弁してくれよなア。つーか、高杉。アイツ何やってんの。この馬鹿の暴走止めてくれよオ……。御願い晋ちゃん。俺じゃ手に負えませーん」

相変わらずといえば相変わらずな旧友に辟易し、銀時は思わずそうばやいた。

「……………銀時」

「あん？」

ふいに低まった声に、銀時は桂を見る。真剣そうに見える（けれど思考はどこかズレている）面はいつものことだが、その瞳。滅多に見せぬその凄惨なひかり。薄い唇を開き、零れる声。

「——高杉には、気をつける」

「……は？」

云われた内容が理解できず、銀時はぽかんとしてその生真面目な顔を見詰めた。

気をつける？ アレに？

「……オイ、おめー何云って、」
「む」

いいかけた少年を軽く無視して、桂は裏口を見た。つられて銀時もちちらを見ると、先日会ったあの落書きのような宇宙生物。その手が持つ看板には、『桂さん、そろそろ時間です』と流暢な日本語が綴ってあった。

「いかん、もうそんな時間か」

せわしくエリザベスのほうへ駆け寄る桂の背に、銀時は呆れ気味に声を掛ける。

「時間って何。つかおま、高杉が何だって？」

「すまん銀時、次のバイトがあるのでな、また今度」

「次のバイトって……」

真面目な顔してほざかれた言葉に絶句する。指名手配犯がバイトの掛け持ちしてんじゃねえよ。呆氣にとられて突っ込むことも出来ずにいれば、彼はエリザベスに抱えられ風になる。

「さーらばー！！」

「ちょ、オiiiiiiii！！」

フェードアウトしながらどんどん遠ざかっていくそれに全身全霊をかけて突っ込むが、勿論届きはしなかった。

「気になる台詞を残して去っていくんじゃねエ、つかそれ死亡フラグだぞゾラアアアア！！」

乱雑にぶち込まれた化粧箱にも似た街に、少年の声が木霊する。

随分頭が弱くなったね

相変わらず撤回、本当腹立つ方向に変わったよなあこの野郎！

*** 0 1 6 *** 随分頭が弱くなったね（後書き）

ここまでお読み頂き、ありがとうございます。

ヅラが凄く楽しかったです。前回あんまり電波れなかったので、満足しました。若干モジャが影薄いですが、別に嫌いではありません。銀猫は標準語、東北弁、関西弁しか話せませんので、セリフが面倒、もとい大変なだけです。地元の方がおられましたら、あんまり怒らないでやって下さい。

今回は再び真選組あたりが出張ってきそうな予感です。誰の視点にしようか、まだ決めかねていますが。誰がいいですか。

それでは、ありがとうございました。また次話でお目にかかりましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3798h/>

この世界はフィクションです

2010年10月9日13時44分発行